

貴方のいない楽園を目
指して《完結》

日々あとむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

至高の四十一人の一人とかいう、使い古されたネタのオリ主。

原作キャラちよろつとしか出ません。

※この作品は書籍十三巻までの情報をもとに作成しています。

※この作品は2018/07/末までで感想返しを終了します。

目次

P r o l o g u e	1
1 章 再ログイン	13
2 章 アベリオン丘陵より	41
幕間	101
3 章 追い詰められた者たち	108
4 章 魔神降臨	161
E p i l o g u e	205

Prologue

西暦2138年、DMMO―RPGの一つ「ユグドラシル」というゲームが終わる最後の日。社会人の異形種ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」のギルド長モモンガは、仕事が終わりに帰宅してすぐにそのゲームへとログインした。

「……誰か、メールに反応してくれているかな」

ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」は既にギルドメンバーがほぼ引退し、活動停止状態になっている。しかし、モモンガはせめてこの「ユグドラシル」最後の日くらいは、と他の構成メンバー四十人にメールを送っていた。――最後まで、会えませんか……と。

しかし、忙しくて無理だと返信する者や、中にはメール返信さえしない者もいる。いや、むしろメールの返信が出来る者の方がまだ安心出来た。メール返信さえ出来ない者は、ゲームを辞めた理由が理由であつたりと、とても不安になるからだ。

「……はあ」

モモンガは溜息を吐きながら、「ユグドラシル」にログインする。視界に映るのは、九

つの世界の一つヘルヘイムに存在するギルド拠点、ナザリック地下大墳墓の円卓の間だ。ギルドメンバーがヘUGドラシルにログインした場合、必ずこの場に出現するように設定されている。

モモンガは黒曜石の輝きを放つ巨大な円卓と、そこに並ぶ41人分の空の椅子を見て、再び溜息を吐いた。

「そうだよな……。皆、忙しいもんな……」

モモンガはそう呟き、コンソールを開く。一応、誰かがログインしていないか調べるためだ。コンソールを開いたモモンガはフレンドページを開き、ログイン状態を調べ――

「……………あれ？」

一人、既にログイン状態になっている名前を発見した。

彼は、仕事が忙しくなってログイン出来る暇が無くなったと言って、ゲームを辞めた一人だ。ヘUGドラシルのサービス終了が決定した為に一ヶ月前に出したモモンガのメールにも、確か忙しくて来れないと返事をしていたはずなのだが。

「もしかして、来てくれた……？」

モモンガは忙しい合間を縫ってログインしてくれた仲間に、気分が高揚する。急いで連絡を取ろうとして……ふと、ログイン時間を見て不思議な事に気がついた。

「……早朝からずつとログインしつ放しなのか、これ？」

ログイン時間は、完全に今日の早朝時間を掲示している。それに気がついたモモンガは内心疑問に思いながら、急いで件のギルドメンバーに連絡を入れた。

「もしもし、モモンガですけど……ウィーウエさん？」

モモンガがギルドメンバー……ウィーウエ・ホディエーにメッセージを送ると、懐かしい、いつもの暢気そうな男の声が聞こえた。

『あ、ギルド長！　ども、お久しぶりでーす！』

「ウィーウエさん、来て下さったんですね！」

確かにウィーウエの声が聞こえて、モモンガは嬉しくなる。

「今、どこにいらつしやるんですか？」

『今？　別の世界。^{サーバー}さすがに早朝からだ仕事は休みの奴かニートしかいねーしで寂しかったよー』

どうやら、ヘルヘイムにはいないようだ。

「ログイン時間なら、俺も見ましたよ。ウィーウエさん、仕事が忙しいって言ってたのに、どうしたんですか？」

『ああ、それ？』

ログイン時間を見て不思議に思っていた疑問を告げると、ウィーウエはあつけらん

ととんでもない爆弾発言をした。

『実はさー、俺の会社倒産した!』

「……はい?」

あまりに気軽に放たれた言葉に、モモンガはしばし呆然として……引き攣るように叫んだ。

「と、倒産!? どうしたんです一体!?!」

『知らない。なんか、親会社の上の人の鶴の一声で決まっちゃったんだってさー。まいつちやうよなー』

いつものように、暢氣そうなウィーウエの声。今この場には、全く相応しくない。

「いやいやいや! もっと焦りましょうよウィーウエさん! 貴方、これからどうやって生活する気ですか!?!」

『えー……まあ、明日から仕事探し始めりや何とかなるんじゃない? ならなかったら、とりあえずその辺で野垂れ死んどくわ』

「えー……」

あんまりなウィーウエの言葉に、モモンガは呆れ果てる。

しかし、元からこの男はこういう男なのだ。暢氣していると言うか、無駄に前向きと言うか。近接の報復者系クラスでビルドを固めているプレイヤーのくせに、本人の性格

は全く陰湿さの欠片も無い。そのため、同じギルドのウルベルト・アレイン・オードルやたち・みーなんかは、ウィーウエの事を苦手にしていた。ただ、代わりと言うかギルド内でも珍しくモモンガでさえ苦手とするるし★ふぁーと仲が良いのだが。

「朝からゲームしている場合じゃないでしょう……ウィーウエさん」

そうは言うが、モモンガは全く怒ってはいない。それどころか、不謹慎ではあるが喜んでいた。ウィーウエは、明日から生活出来るかどうか分からない不安を放置して、モモンガのために最後の一日だけ「ユグドラシル」に帰って来てくれたのだ。

『あ、ギルド長。俺の装備品全部霊廟から回収したからね。今、色んなところでPVPやったり、ネームド狩ったりしてるからさ』

霊廟は、引退したギルドメンバーの主力装備品を保管している、ナザリックの宝物殿にある場所の一つだ。ウィーウエは霊廟が製作された時にはまだいたので、自分の装備品が何処に保管してあるか知っていたのだろう。ウィーウエは引退はしたが、アカウントは一応残していたタイプだった。

「そうですか。別にかまいませんよ。あの、それよりウィーウエさん……まだウィーウエさんと俺以外、誰もログインしていないみたいですし、もし良かったら……」

モモンガは、自分も一緒にウィーウエと共に冒険に出たかった。サービス終了時刻まで、残り僅かも無い。今夜の深夜〇時には、「ユグドラシル」は終了する。だからこそ、

たった一人でも、最後に仲間と冒険に出たかった。

しかし――

「……あー……久しぶりだと頭が揺れる」

「あ」

『お？ また一人ログインしたっぽい？』

円卓の間に、更に一人追加される。まだアカウントが残っている、そしてここ数ヶ月全く顔を見ていなかった、引退していないギルドメンバーだ。

『あつと、俺もそろそろネームドと接触するから。また後でねギルド長』

「へ？ あ、はい。また後で会いましょうウィーウエさん」

「お久しぶりですギルド長……もしかして、自分が最後ですか？」

「いえいえ、そんなことないです。とりあえず、席に座りましょうか」

モモンガはウィーウエとの通信を切って、やって来た久しぶりのギルドメンバーと椅子に座って、会話を花を咲かせた。

§ § §

「――はあ」

ヘロヘロが去って静かになった円卓の間で、モモンガはひとりぼっちで溜息を吐く。疲れ切っていたヘロヘロに対し、モモンガはどうしても最後の勇気が出なかった。

一緒に、サービス終了を過ぎませんか、と。その一言が、どうしても。

同じ社会人だ。ヘロヘロが疲れ切っているのもよく分かる。そんなヘロヘロに、一緒に残ってくれなんてとても言えなかった。

モモンガは席から立ち上がると、壁に飾られているギルド武器へ向かった。このギルド武器を作るのにも、たくさんの思い出がある。この武器を作った時の事こそ、ヘアインズ・ウール・ゴウンの最盛期であったからだ。自分達が、最も輝いていた頃の時代だ。仕事で疲れた身体を鞭打って来たヘロヘロに、家族サービスを切り捨て、妻と大喧嘩をして来たたち・みー。有給休暇を取ったと笑っていた——そんな数多のギルドメンバーの記憶が浮かぶ。

「……そうだ！ ウィーウエさん！」

ギルド武器を見て、まだログインしている仲間を思い出す。今日は一日中ログインしてくれるはずであろーうし、まだいるはずだ。フレンドページを見ると、やはりまだログインしていた。

「ウィーウエさん！」

『……はいはいー。どうしましたギルド長ー？』

少ししてから、メッセージが繋がる。モモンガは少し深呼吸をしてから、ウィーウエに告げた。

「あの、ウィーウエさん。もし良かったら、これから合流しませんか？ ギルドメンバーとして、ナザリックで最後を……」

『いいよー』

少し緊張気味の願いは、簡単に聞き届けられた。モモンガは内心喜び、ウィーウエに合流の算段をつける。

「それじゃあ、すぐにナザリックに来て下さいませんか？ 後もう少してサービス終了時間ですよ」

『……えッ!?!』

モモンガの言葉に、ウィーウエが蛙がひっくり返ったような声を出す。その声に驚いたモモンガも、思わず叫び声を上げた。

「うえ!! ど、どうしましたウィーウエさん!?!」

『え？ そろそろサービス終了時間？ ……うわ、マジだ！ やつべ！ ギルド長、急いで戻るけど間に合わないかも!』

「……何してたんです?」

モモンガが訊ねると、ウィーウエは焦った声で答える。

『俺、今ダンジョン潜ってるよ！ ネームドと戦闘中……おつと！ あともう少しでコイツ狩れるから、狩ったら猛スピードで帰るわ！』

「……どこのダンジョン潜ってるんです？」

『……アルフヘイムのミラーハウスにいるジャバウォックくん……』

声はとても小さかった。

「……アリス・ザ・ジャバウォックですか。死んだ方が早いんじゃない？」

『いやだー。あと少しで倒せそうなんだー』

「……はあ、まあ、貴方らしいですけどね。じゃあ、終わったら地上に出て、指輪ですぐ帰って来て下さいよ。……脱出アイテムはちゃんと持ってますか？」

『大丈夫！ ギルド長が来るまではダンジョン潜りまくろうと思って、部屋からアイテム限界までインベントリに詰めた！』

「じゃあ、大丈夫そうですね。俺、玉座の間にいるんで」

『はいはい』

メッセージを切る。モモンガは少し沈黙した後——ぶほと思わず噴き出した。

「変わってないなあー、あの人……。そういうば、元々はソロプレイヤーだったわけ……」

モモンガはウィーウエとの出会いを思い出す。確か、彼はぶくぶく茶釜が誘って連れ

て来たプレイヤーだった。しかし、たち・みーやぶにつと萌えなどは前から名前だけは知っているプレイヤーであつたらしい。たち・みーに至つてはPVP経験があつたのだと聞いている。

ウィーウエは、元々このゲーム内の一部では有名なプレイヤーだ。ソロでストーリーイベントやダンジョン攻略をする変態プレイヤーとして、*ヘUGドラシル*のスレッドでは何度も名前が載っている。*ヘUGドラシル*の一年目プレイヤーである彼は、長くソロプレイであつたので周囲はソロプレイが好きなのかと思つていた。たち・みーもその一人であるが。

「最初は、何も考えずソロで活動したら、異形種狩りが流行つちやつたせいでパーティー組めなくなつて、そのまま勘違いされちやつてたらしいよ」

と、仲良くなったペロロンチーノが言つていた。ちなみに、ぶくぶく茶釜に声をかけられてふらふらついて来てしまった理由が、『ダメ絶対音感』なる能力のせいだと言つていたが、未だにどういう意味かは分からない。ペロロンチーノが慈悲溢れる仕草とアイコンで肩を叩いていたのが、妙に記憶に残っている。

そういつた経緯でギルドに加入したメンバーなので、ギルドメンバーになつた時には既にレベルは一〇〇であつた。ファゴサイトーシスなどの、ソロ攻略する上で必須のク

ラスを習得しているのもそのせいだ。

そしてその名残りなのか、彼はギルドメンバーがあまりログインしていない時はよく一人で冒険に出掛けている。今回も、モモンガがいらない間は暇なので最後にアイテムを散財しながら、ソロでダンジョンを攻略していたのだろう。パーティー編成が一人だけならば、モンスターの体力や攻撃力、防御力もある程度は下がるように設定されている。一部の面倒なモンスターは、その設定のおかげでソロ攻略の方が討伐が早いと言われるほどだ。

「さてと。じゃあギルド武器を持って、しっかりと格好で待とうかな」

装備を全て神器級ゴツアイテムに変更し、ギルド武器を持ったモモンガは、いそいそと玉座の間へと去って行った。

そして。

「……ほんとと、あの人はもう……。どうせ、今回も何となく『たぶん間に合うよね』の無駄に前向きな精神で適当に返事をしたんでしょ」

サービス終了時刻残り一分を切った時計を見て、呆れたようにモモンガは玉座の間の世界級ワールドアイテムの玉座に座り、来ない待ち人に愚痴を告げたのだった。

「……ほんとと、変わらないんだからあの人」

ケチのついた最後もあったものだ。まあ、ゲームが終わった後にでもメールに連絡を

入ればいいだろう。明日は四時起きなのだ。ちよつと彼に愚痴を言つて、その後すぐに就寝しよう。でないと、仕事に差し支える。

モモンガはゆつくりと、今頃大慌てになっているだろうウイーウエを思いながら、目を閉じてへユグドラシルのサービス終了を待ったのであった。

1章 再ログイン

会社が倒産して、無職になった。その日、昔のゲームを引っ張り出してやろうと思った理由は、精々そんな理由である。

かつて、ヘュグドラシルというDMMOORPGがあった。昔、自分もよく嵌っていたゲームだ。データの自由度が半端では無く、本当に自由自在と言えるほどに多種多様なデザインを自ら生み出すことが出来たし、アイテムや魔法、特殊^ス技術^キなど、キャラクターの種族や職業も、十年以上経った今でも全て発掘されていないだろう。

そんなゲームで、最初はソロプレイヤーとして行動していたのだが、しかし自分もあるギルドに加入し、パーティーで活動するようになった。理由は、おそらく自分のことをよく知らなかったのだろう、自分の好きな声優にそっくりな声のプレイヤーに「一緒にゲームをしませんか」と誘われたからだ。その頃の自分は既にソロ活動に慣れ切っていたので、もう「一人でストーリーイベントを全部クリアしてやるぜ。フーハハハア」などと割り切っていたのだが、ついその声に誘われてついて行ってしまった。

……まさか、ついた先があの悪名高いギルドへアインズ・ウール・ゴウンであった

とは思わなかったが。その頃から、既にあのギルドは悪名が轟いていたのだ。

しかし、話をしてみると皆気のいいプレイヤーばかりで、昔PVPで殺したり殺されたり（ほとんどは自分の敗北だが）した仲であるたち・みーも、ギルドに加入することには反対はしなかった。

そして、仲間と一緒にゲームをするのは、思いのほか楽しいものだった。妙なところに拘る職人気質の、俗に言う変態プレイヤーが多かったのも、楽しめた理由だろう。

ただ、長年の癖は中々抜けなかった。ギルドメンバーがほとんどログインしていない時は、よくソロでダンジョンを攻略しに潜りに行ったものだ。その度に、ギルド長のモモンガには「俺達にも声をかけて下さいよ」と笑って言われたものである。

楽しかった。その言葉と、この思いは嘘じゃない。

しかし、如何に無駄に前向きだとよく言われる自分でも、現実と仮想の区別はつく。仕事が忙しくなり、ログインする時間も無さそうになった時、ゲームはすっぱり辞めてしまった。その頃には自分だけじゃなく、半数以上のギルドメンバーが引退してしまっていたので、もはや〈アインズ・ウール・ゴウン〉は事実上のギルド解体に等しい。「引退する」と告げた時のモモンガの寂しそうな声を聞いて、罪悪感が疼いたものだ。

だが、その罪悪感も長くは続かない。仕事が忙しいのだ。なので、一週間もする頃にはそれどころでは無くなった。

勿論、永遠に忙しかったわけではない。だが、もう一度ヘUGドラシルをやるうとは思わなかった。一時間程度ログインする時間はあったが、ログインはしなかった。

データを更新するのが面倒だという思いもあったし、もつと言えば所属ギルドは社会人ギルドであつたので、誰もいないだろうと思つていたのだ。

……なので、モモンガからメールが届いた時には驚いたものである。あのヘUGドラシルが終わってしまう事もそうだが、モモンガがまだあのゲームを続けていた事に、何より驚いた。

自分のようにソロで活動することが苦にならないプレイヤーではなく、仲間と一緒に何かしている方が楽しいタイプに見えたのに、まだこんな過疎化したゲームをしていた事に驚いたのだ。

……もつとも、後で自分で勝手に納得したものだ。ヘUGドラシル自体は楽しかったのだし、最終日に「記念にもう一度集まってみよう」というのもあるか、と。

しかし、その頃の自分はまた忙しい時期であつたので、残念に思いながら「忙しいから無理」だと返信したのだ。実際、メールに気づいたのは一週間くらい経つてからであつたし。

そうして、現実でずっと忙殺されそうになる日々で——ぷつりと、糸が切れた。会社が、企業連合から解体するように言われて倒産になったのである。

理由は、全く分からない。単なる下請けである自分達に、その理由が分かるはずはない。あるのは、明日からどうすればいいのか分からない現実だけだ。

「まあ、なるようになるか」

とりあえず、一時間ほど考えた後にそう結論を下して、自分はゲームを引っ張り出した。モモンガからのメールを思い出したのだ。ヘUGドラシル＜がサービスを終了するという話を。

まず、数年はネットに繋いでいなかったニューロン・ナノ・インターフェイスをアップデート。データロガーも同様だ。ニューロン・ナノ・インターフェイスは最低限のアップデートはしていたが、ヘUGドラシル＜などのDMMO—RPGに関してのアップデートは全くしていない。アップデートの完了には、数時間ほど必要だった。

「さて、ゲームをするか」

アップデートが終わり、ヘUGドラシル＜にログインする。プレイヤーアバターを削除していなかったのだ、ちゃんと自分のウィーウェ・ホディエーのデータはそこにあった。そして——この時が、自分が一番驚いた瞬間だった。

§
§
§

「……マジで？」

ウィーウエはギルド拠点であるナザリックの円卓の間で、呆然と立ち竦む。まさか、あるとは思わなかった。ギルドなんて、とつくに無くなっているとばかり思っていた。「もしかして、まだギルド活動してたのか……。うわー、俺、暇が出来た時くらいログインしとけばよかった」

ギルド維持費を稼ぐのは、少人数では大変であつただろうに。ウィーウエは気まずげに呟くと、コンソールを開いてフレンドページを押した。

「ギルメンは……誰もログインしてないかー」

ざっと見回して、自分以外がログインになっていないのを確認する。当たり前だ。何せ、まだ夜が明けて一時間くらいしか経っていない早朝なのだ。社会人ギルドなので、今日が休日の人間でないかぎり、こんな時間からログインは出来ないだろう。

ウィーウエは適当に誰もログインしていないのを確認すると、誰かがログインするまでの暇潰しに、外でダンジョンを攻略する事にした。

確か、全盛期の装備品は全て宝物殿にあるはずだ。モモンガはギルドメンバーの装備品などを売らずに、そのまま課金ゴーレムのアヴァターラに装備させて、管理していたはずである。

アバターを残していたタイプの自分のようなプレイヤーは、モモンガに頼まれてこの

ナザリックを移動する時の専用の指輪、リング・オブ・アイन्ズ・ウール・ゴウンを装備したままなので、宝物殿にはすぐに向かえる。しかしウィーウエはまず宝物殿に向かうより、自室に設定されているアイテム保管庫へ急いだ。

「うつへー……。アイテム、多いっ」

自室へ向かったウィーウエが見たのは、適当に放り出されている自分が今まで収集したアイテムの山だ。整理整頓をしていないので、非常に面倒な事になっている。

「くっそー……。適当に詰め込むんじゃないかった」

ウィーウエは内心で舌打ちしながら、目的のアイテムを探す。数分ほど確認して、目的のアイテムを発見する。

「お、あった」

それは、装備していると毒に対する完全耐性を得ることが出来るアイテムだ。ウィーウエの初期種族は蟲系なのだが、種族レベルを二〇程度しか取得していないので、毒に対する完全耐性は持たない。宝物殿の最初の転移場所の一つは、猛毒を放つマジックアイテムによって汚染されているので、毒無効系のアイテムか能力を持たないと体力が瞬く間にゼロになってしまう。確か、そうであったはず。

ウィーウエは目的のマジックアイテムを装備すると、とりあえずは良しとして宝物殿へ向かった。宝物殿の奥へ行き……。目的の場所へ辿り着く前に、立ち止まる。

「やつべえ……」

そういえば、そうだった。確か、暗号がいたのだった。ぽつかりとした闇のエフェクトの前に、ウィーウエは呆然として立ち止まる。

「なんだったつけな」

頭を捻り、考える。確か、共通の暗証番号があったはずだ。アレを思い出せば、まだ何とかなるはず。

ウィーウエは数分ほど考え込み、ようやく思い出した。

『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ』！ よかった、思い出した！

パスワードを入れると、更に長文が闇エフェクトに現れる。ラテン語であるが、自分のプレイヤー名をラテン語にするだけあって、ウィーウエはこちらはちゃんと分かった。

『かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう』だったつけな

そう入力すると、闇のエフェクトが消えて通路が見える。ウィーウエは先へ進んだ。

進んだ先に、一人のNPCを発見する。確か、モモンガが作成したNPCだ。名前は、パンドラズ・アクター。パンドラズ・アクターはウィーウエの姿を見つけると、すっと敬礼する動作をした。

「そういや、こういう設定だったっけ？ うーん……うん」

見ていると、このNPCの設定を作った後のモモンガの反応を思い出す。もはや、黒歴史と化してしまったと叫ぶ厨二病卒業者を。

ウィーウエはNPCの製作自体はしていない。NPCは彩色担当だ。NPC達に実際に色を彩りしたのが、ウィーウエである。NPC製作者の中でも、ホワイトブリムの発注は鬼畜であった。外装製作担当者と共に悲鳴を上げたのも、懐かしい思い出。同じ金髪にさえ、細やかな色の差異指定をしてきたあの、ぐうの音も出ないほどの畜生行為は忘れられそうにない。

パンドラズ・アクターを見物していたウィーウエは、すつと目を逸らし指輪をパンドラズ・アクターがいるソファの前にあるテーブルの上に置いて、目的地の霊廟へと向かう。リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを装備したり、所持しているまま霊廟へ入ると、アヴァターラに襲われる設定になっているからだ。

ウィーウエは目的地へ辿り着くと、自分のアヴァターラを探した。

「……えーつと……お、あった」

自分のアヴァターラを見つけたウィーウエは、すぐにアヴァターラから装備品を剥がして自分で装備する。種族ペナルティで胴体に鎧を装備出来なかったために、前衛系ビルドでありながら鎧は無い。

ウィーウエは神器級アイテムで全身を武装すると、再びパンドラス・アクターの待つ待合室へ戻り、指輪を手に取る。そして、指輪をつけるとすぐに再び自室へと転移で移動した。

「よっしゃ、インベントリに持てるだけ突っ込むぞ」

ウィーウエは幾つものアイテムを部屋から発掘する。自分の予備武装に、アクセサリ系。回復系アイテムなどもどんどん入れていく。

所持限界に到達した後、ウィーウエはナザリックを指輪で後にした。

「お、カエルのアクティヴ切られてる。最終日だからかな？」

ナザリックの外にいる蛙系モンスター達は、全て活動を停止していた。その所为か、自分に全く襲いかかって来ない。なのでウィーウエは全く気にせずに、ナザリックのあのヘルヘイムではなく、別の世界へとその場で移動する事にした。

世界切り替えを行ったウィーウエは、なるべく人数の多い場所を目指し、そこで何度かPVPを行った。腕が鈍っているので勝てないかと思ったが、幸い全盛期のウィーウエと同じ実力であった上の上プレイヤーと遭遇する事はなく、何度か行ったPVPで敗北はせずに済んだ。

異形種の入れない人間種などの都市にも、普通に入る事が出来る。本来異形種は人間の都市を襲撃する形で無いと、ペナルティで入れないはずなのだが最終日の為そのシス

テムも切られているのだろう。ウィーウエは人間種の都市を楽しんだ。ウィーウエだけでなく、何人かの異形種プレイヤーもいる。

そして、最終日だからだろう。怪しい露店で売られているアイテムを見て、ウィーウエは思わず爆笑した。

「世界級^{ワールド}アイテム金貨一枚で売ってんじゃねえよ」

そう、《ユグドラシル》にも二百個しか存在しない、超級のマジックアイテム。それが普通に露店で売られているのは間違いなくおかしい。しかし、これもゲームの最終日ならではの現象だ。こういった事は、オンラインゲームの最終日ではよくある事である。おそらく、誰かが面白がつて売りに出したのだろう。

「よっしゃ。買お」

ウィーウエは迷いなく買う。そして、代わりのアイテムを売りに出しておく事にした。代わりに売ったアイテムは、『《宿命》と《偶然》の賽子』と呼ばれる、神器級^{ゴツメズ}アイテムだ。このアイテムは一部の確率システム操作にのみ使用でき、成功と失敗のどちらかの確率がゼロで無いかぎり、必ず五〇パーセントにする効果があつて、主にカジノなどで使われる。ソロで活動していた時にダンジョンボスから手に入れた、ウィーウエにとっては何となく貴重なアイテムであつたが、るし★ふぁーによく譲ってくれるよう頼まれていたアイテムだ。

……勿論、他のギルドメンバーから口を酸っぱくして「アイツにだけは絶対に渡すな」と言われていたので、ずっと後生大事に持ち歩いていたのだった。今回も、その癖で持ち出してしまったのだろう。持ち歩かずにいると、るし★ふぁーがこつそり使つて元の場所に戻しておいた事があつたのだ。

それを金貨一枚で売り出すように設定して、ウィーウエは世界級アイテムを手に入れる。自分のステータスに『ワールド』のバフがかかり、世界級アイテムの効果が無効化されるようになった。

ウィーウエはそれに満足すると、人間の都市を後にした。続いて、様々なダンジョンへ潜り、かつてしていた時のようにソロでネームドなどを狩っていく。手応えがあまり無く、これも運営が少し弱体化させているように感じた。やはり、最終日という事で運営も思う事があるのだろう。

(……待てよ。つて事は、一人じゃ絶対無理だと思つたネームドも狩りに行けるか?)

このゲームの運営は狂っていると称されるだけあつて、適正レベルのダンジョンやモンスターは、本当に適正レベルなのか疑いたくなる強さをしている。しかし、今のこの状態ならば、もしや弱体化されて勝てるかも知れない。

そうと決まれば、ウィーウエは早速高難易度ダンジョンへ潜る事にした。道中の敵は非アクティブ化しているので、リソースをそちらへ割かなくていいのが最終日の良いと

ころだ。

ダンジョンへ辿り着くと、やはりほとんどのモンスターは弱体化していた。些細ではあるが、リソースを他の事に消費せずに済んでいるので、楽に最深部へと到達する。

その最深部へと到達し、ダンジョンのラスボス……ネームドモンスターに近くなつた頃に、メッセージで連絡が来た。見ると、どうやらメッセージ相手はモモンガのようで、ログインしたらしい。

ウィーウエはログイン出来ないと言っていたのに、ログイン出来た理由を訊かれたので、素直に答えるとモモンガは仰天したようだった。流石に、会社が倒産して無職になつたというのは、モモンガにとっても驚くべき事だったようだ。

他のギルドメンバーがログインするまでの間、少し話をしてウィーウエはメッセージを切った。そのまま、ネームドと戦闘に入る。何とかネームドに勝ったウィーウエは、脱出アイテムでそのダンジョンをすぐに脱出すると、ふと気づく。

「待てよ……俺、無職だから〈アインズ・ウール・ゴウン〉卒業か？」

ギルド〈アインズ・ウール・ゴウン〉は社会人の異形種で構成されたギルドだ。社会人ではなく無職となつたウィーウエは、ギルドにこのまま在籍していいものか。

そんなどうでもいい事を真面目に考えながら、ウィーウエはまた別の高難易度ダンジョンへ潜る為に、再びフィールドを駆け抜けたのだった。

「やつべ……。もう一分切ってるじゃん」

アルフヘイムに存在する高難易度ダンジョン、鏡の迷宮^{ミラーハウス}。その最深部にいるダンジョンボスのアリス・ザ・ジャバウォックを討伐して脱出アイテムを使って地表に出たウィーウエは、時計を確認してポツリと呟いた。

「うわー、うわー……。ギルド長に後で怒られる……」

ぷりぷりする骸骨の魔王の姿を脳裏に描き、頭を抱える。最後はギルドの玉座の間で、と言われていたのに間に合わない。後でお怒りメールが届くだろう。間違いない。

「うーん、まあ過ぎた事はしょうがない！　ここで花火でも見上げてるかー」

先程までダンジョンボスとタイマンをしていたために、生命力が赤ゲージの状態でアルフヘイムの夜空を見上げる。空には、運営かあるいはプレイヤーが個人的に用意したのであろう花火がぼふと上がっていた。視界の端では、生命力ゲージがフアゴサイトリスの〈自動生命力持続回復^{オートリジェネレーション}〉で満ちていていた。

フアゴサイトリスはソロプレイでは必須と言っているいいクラスで、幾つかのデメリツトはあるが食事・疲労・睡眠を気にしなくて済むのが大きい。生命力が時間経過によって自動で回復するのも便利だ。魔法詠唱者のクラスを習得していると、更に魔力も回復速度が速くなる効果があった。

その為、長い間ソロプレイをしていたウィーウエは例に漏れずファゴサイトーシスのクラスを習得し、ギルドに加入した後もレベルダウンを面倒臭がつてそのままにしていた。それに実際、攻略の役にも立っている。回復役をあまり必要としないので、ダンジョンの情報を収集するための偵察部隊として、最初の攻略パーティーの中によく加わっていた。

そして、上手くネームドのいる最下層まで行けた時は、ウィーウエの習得しているとあるクラスが便利なので、本命部隊にもその時は入っていた。

視界の端で生命力ゲージが増えていくのと、時計の時刻を見ながら、ウィーウエは強制ログアウトを待ち――

そして、サービスが終了したその時、絶叫した。

§ § §

まず最初に感じたのは、酷い激痛だった。

痛い。痛い。ただひたすらに痛い。こんなにも痛いなんて初めてだ。頭痛がするし、吐き気もだ。とても立ってられない。辛い。ただ、痛い。ひたすらに苦しい。ウィーウエはその場に蹲って思い切り吐いた。

「ぐ——う、おえ——！」

吐いた瞬間、胃の中から出て来たのは晩に食べた夕食ではない。血だ。べったりと、粘ついた新鮮な色の血液が、思い切りウィーウエの胃から吐き出された。

「げ……ば、は、は、あ……う？」

その自分の胃から吐き出された物質に、心の底から理解が出来ない。なんで、こんな物が自分の胃から出て来たのか、さっぱり分からない。はて、自分はいつの間にかとてもない病氣にかかっていたのだろうか——。

理解がさっぱり及ばないウィーウエは、身体を動かそうとして更に与えられる激痛に身悶えた。そうやって悶える度に、更なる激痛に見舞われた。痛い。ただ、ひたすらに痛い。全身が、酷く痛かった。

「ぎ、い……」

奥歯を噛み締める。激痛。身体が震える。激痛。泣き喚きたい。激痛。激痛。激痛。激痛。——！ただ、全身が痛くて堪らない。その場に蹲って、ただひたすら激痛の嵐が過ぎるのを待った。

そうやって、どれだけの時間が過ぎ去ったのか。気がつけば、痛みの波はほとんど引いていた。未だに全身がじくじくと痛みを訴えるが、それでも耐えきれないほどじゃない。

「な、何が……」

あまりに呆然として、そして痛みが引いてようやく色々な物がともに視界に入る。暗い。暗いが、まるで昼間のように明るく見える。ここは、ごつごつとした石壁の中だ。どれもコンクリートなどの固さでは無い。

「え？ え、なに？」

そのよく分からないものを呆然と見つめながら、きよろきよろと辺りを見回す。地面についていた手を、身体と共に起こそうとして、ぎよつとした。

「は、はあ？」

自分の手があるべき場所が、臍脂色の装甲で覆われているのだ。ガントレットを着けているかのように。思わず手を握り、そして広げる。一緒に動く。

つまり、これは自分の腕だ。

「え？」

そう見ると、このガントレットのデザインも色も見た記憶がある。当たり前だ。自分がデザインしたのだから。

「いや……まさか……」

呆然としている内に、いつの間にか痛みも気にならなくなっていた。まるで、傷が塞がってしまったかのように。

「いやいやいや……え？ いや、ええ？」

頭に浮かんだある答えに、即座に否定を返す。馬鹿な。有り得ない。こんな事が起きるはずが無い。自分の両手を見つめる。両手は、どちらも覚えのあるガントレットで覆われていた。装甲の無い、左手の肘から上は黒と赤褐色の、つるりとした別の装甲。

それが、まるでネットで見た画像の、虫の装甲の様に思えた。有り得ない。

「……!？」

ウィーウエは立ち上がり、全身を見下ろす。胴体と腰には金色の、かつて秘境に住んでいたという部族の民族衣装みたいな布。その下に黒と赤褐色の装甲。脚部にはやはり、臍脂色の膝上から足の甲まで覆う巨大なグリーヴ。今気がついたが、血塗れの全身を覆うような真っ黒の帽子つきローブ。そして、足元には先程まで自分が持っていたのであるう、全体的に禍々しい黒紫色の槍。穂先の部分は先端が細く、柄に向かうと刃が広がっていくパルチザンのような形をしていて、穂先は五十センチに近く、柄の部分は二メートルほどはあるだろう巨大さだ。とても持てそうにない。

しかし、ウィーウエはそれを拾い上げると、ずっしりと手に馴染むような重さを感じた。まるで、毎日持って振り回していたような馴染み方だ。

「いやいやいや……」

思わず首を横に振り、否定する。何から何まで、とても見覚えがあるが有り得ない。

こんな事があっていいはずがない。ウィーウエは顔を触る。硬い。ガントレットがでは無い。顔も、何だかとても硬く感じた。思わず顔以外の肩の部分に触る。同じ感触がした。

「……………」

ガチリ。自分の口があるだろう部分が、虫の顎のように音を鳴らす。

「いや…………え？ まだゲームの中なの？ じゃあさっきの痛みは一体…………？ 俺は何の事件に巻き込まれたの…………？」

データロガーはちゃんとしていたので、犯罪に巻き込まれても無実は証明出来る。ログアウトは出来ていないと見て、ウィーウエはコンソールを出そうとした。出ない。

「ん？」

コンソールがまるで出てこない為に、思わず首を傾げる。このログアウト出来ていない現象といい、運営が何かしくじったのであろうか。ウィーウエは緊急措置として、GMコールを行おうとした。そして、それも当然出来ない。

「え？ なに？」

あまりな出来事に、混乱がピークに達する。ウィーウエは考え事をするために、その場に座り込んだ。

「コンソールは出ない。GMコールは使えない。何か変な激痛は覚えた。っていうか、

血吐いたよね俺……？ ん、そういえば……血？ 血!？」

有り得ない。その事に気がついて、絶句する。〈ユグドラシル〉のゲームはアバターの口が動くように出来てなどいない。それだけではない。そもそも、五感の一部は再現されていいはずなのだ。先程血を吐いた、あの鉄錆の味は有り得ない。味覚は無いはずなのだ。この、今も香る血液の臭いも、当然嗅覚が無いのだから嗅げるはずが無い。

つまり、先程から自分の周りには有り得ない出来事が起きている。

有るはずの無い、再現されるはずの無い五感の一部。

動くはずの無い口元。

コンソールは出ず、GMコールは出来ず、そしてログアウトも出来ない。

「お、お、お、落ちて着こう……うん、落ちて着こう」

ぶるぶると震えながら、言葉にして何とか冷静を保とうとする。その時点で失敗している気がするが、しかし言葉にしないと不安だった。

「と、とにかく周囲を探索しよう……うん」

出来れば、同じようにログインしていたはずのモモンガに連絡を取りたいが、しかしコンソールが出ない以上ウィーウエには連絡手段が無い。おそらく、アルフヘイムからヘルヘイムへの移動も出来ないだろう。そして、今持っているアイテムの中に誰かと連絡を取れるような〈伝言^{メッセージ}〉のような、便利な魔法の巻物^{スクロール}も無い。ウィーウエは前衛の戦

士職で、魔法職は習得していないのだ。

その為、モモンガの方から連絡を入れてくれるのを待つしかない。

ウィーウエは周囲を見回した。壁や地面を触り、此処がどんな場所なのか確認している。幸い、種族特性の〈闇視^{ダークヴィジョン}〉で闇の中も昼のように見渡せる。自分の主武装である槍を片手に持ち、警戒しながら進んだ。

「……………此処は、洞窟かな？」

少しじめつとしているが、おそらくこの感触は岩壁だ。洞窟の中なのだろうと予測をつける。ウィーウエは岩壁を片手で思い切り引つ掻いた。壁に、ガントレットによる引つ掻き傷が出来る。

（とりあえず、道に迷わないように印をつけて……番号も振っておくか）

引つ掻き傷の上に、更に横方向に一本線を入れる。こうやって何とか道に迷わないように出口を目指すしかない。出口か、入口が存在するなら風が入っているはずなので、空気の振動が無いか探す。——微かだが、どこからか風が流れているように感じた。肌を空気が滑るのだ。そちらを目指して、何十歩か進む度に印をつけながら進んでいく。

「……………」

そうして、およそ三十分ほど。歩行なら既に二キロ近くは進む計算になるのだが、警戒しながら歩いているため、そんなに進んでいないだろう。一キロも進んでいればい

方だ。幸い、モンスターなどには遭遇していない。痛覚がある状態でモンスターと戦闘行為が出来るか、と問われれば難しいと言わざるを得ない。ましてや、死ぬ感触なんて絶対に味わいたくない。

ゆつくりと、傾斜になっている地面を壁に手をつきながら歩く。だが……重要な問題が出て来た。

「……お腹空いた」

ファゴサイトシス。その食欲増大・食事量増大のペナルティが効き始めた。周囲を見回し、天井にいる蝙蝠や壁を這う蜥蜴など、小さな生物を捕まえる。そして……ごくりと喉を鳴らした。

「いや。うん。……食事調理不要だけど。……うう……マジか。マジなのか……」

このまま我慢し続けたらどうなるのだろうか。こんな感覚は、現実以来だ。現実で会社に泊まり込んで仕事をしていた時に、腹が空き過ぎて倒れそうになった事はある。だが、その時でも。

「いや、生で蜥蜴とか蝙蝠は無理だつて！」

しかも、今の自分は味覚があるのだ。蝙蝠と蜥蜴を口に入れるのは、酷く勇気が必要な行為だった。

「が、我慢しよう……我慢。よく分からんけど、たぶんログアウトさえすれば問題無いよ

ね……?」

だよね、ギルド長——。そう自分と同じように困っているかも知れないモモンガに思いをせながら、ウィーウエは蝙蝠と蜥蜴を手から離すと、再び歩を進めた。食事は、限界まで我慢しよう。

決意して、出口を目指す。風が強くなつて来たように思う。モンスターが出ない事は、本当に幸いな事だ。ウィーウエはおっかなびつくりしながら、外を目指した。

そして。

「……つ、遂に出口」

空腹が割とピークに達していた頃に、ようやく外の明かりが入って来る出口らしき場所を見つける。ウィーウエは喜び勇んで、同時に空腹でふらふらしながら外へと足を一歩踏み出した。

「———すげえ」

外へ出たウィーウエの視界に、酷く、美しいものが広がった。

晴れ渡る、澄み切った蒼穹の空。広がる緑の草原と、そして木々。新鮮な、美味しいとさえ思える空気。

美しい。何もかもが、美し過ぎる。大自然とは、まさにこういう光景を言うのだと目に叩きつけんばかりの光景。

それは、大気汚染とも、土壤汚染とも無縁の、あまりに美しい世界だった。

「
その時ばかりは、苛まれていた空腹を忘れた。食欲なんて、頭の片隅にさえ残らなかった。」

美しい。ただ、美しいという言葉しか思い浮かばない。人は本当に素晴らしいものを見た時、語彙力が乏しくなるものなんだとウィーウエは初めて知った。

現実には、こんな世界じゃない。こんな光景は何処にも無い。この大自然の前は、あまりに人間はちっぽけだ。

その美しい光景を、ずっと見続けたいと思う。思うのだが――。

「やばい。そうだ……俺、腹減ってたんだった」

空腹感が、まずい。もう限界だ。このままではとても嫌なペナルティが発症する。飲食は抜くとステータスなどが一時的に下がり、一度食事を摂取するまで時間経過で下がり続けてしまう。最終的には餓死だ。それは遠慮したい。

ウィーウエは仕方なく、草原と、森を目指して走り寄った。

「
速度は、驚くほど。しかし、自分の身体はこれが当たり前の身体能力だと訴えている。

そういうば、先程も難なく蝙蝠や蜥蜴を片手で捕まえられた。」

（意識だけ、認識のズレがある）

槍を持った時もそうだったが、つまり身体は平然と今までと同じように動いているが、しかし意識がよりアバターに近寄った事で混乱しているのだろう。五感などが完全再現されている以上、この誤差は経験でしか埋められない。

草原で見つけた小動物を、片手で掴む。兎らしき生物はウィーウエの姿を見ると身を竦ませ、怯えるがしかしその憐憫を誘う哀れな姿を見ても何も思わない。

ぞつとした。小動物は、嫌いなタイプじゃない。ペットのハムスターが死んでペットロスになったギルドメンバーを、理解してやれる程度には小動物は嫌いじゃなかったはずなのに。何の感慨も浮かんでこないのだ。そんな自分の心の動きにぞつとする。

「……………」

そして、その兎を見ていると涎が垂れているのを自覚した。お腹が、くうくうと鳴っているのが分かる。このまま食べたいと、血の滴る肉を、骨を食りたいと酷く興奮し――

「いやいやいや……うん。無い無い」

ウィーウエは寸前で、そのまま齧りつこうとした顎を止める。涎は垂れているが、何とか抑えた。耐えられない。

今までの主武装である槍を仕舞うと、炎属性の予備武装を取り出す。そのまま、兎を

槍の刃先に押し付けた。叫び声を上げて、兎が燃える。炎に包まれた兎をすぐに刃先から引き剥がし、見つめた。

毛皮は全て焼けて灰になり、肉は丸焦げになっている。それを、そのまま一口だけ口に含んだ。

「——はッ!？」

気がつけば、思い切り一口で食っていた。口の中が、半生の肉を食べた為にぐちゃぐちゃとしており、骨が砕けてこりこりと素敵な食感を味合わせてくれている。喉に絡まる血が心地いい。

そう、美味しいと思った。思ってしまった。この、肉を噛みきる感触を。骨を砕く感触を。血液を嚼る感触を素敵だと思っていた。その事実、ウィーウエは途方に暮れる。

おかしい。絶対におかしい。今の自分は、絶対に正気じゃない。どんなに食欲が湧いたとしても、こんな風に小動物を食れるような人間が何処にいる。絶対に、今の自分は変だ。変だと、そう思うのに。

「——足りない」

眩きが漏れた。そうだ。それが本心だ。そもそも、経験で分かる。いつもダンジョンへ潜って、攻略の最中は狩ったモンスターで食事をするのが常であったから、経験で

知っている。本来はモンスターを討伐した場合、データクリスタルに即座に変わってしまふのだが、ファゴサイトーシスのクラスを習得しているプレイヤーがモンスターを討伐すると、一定時間だけ死体が消えず、死体を食べるかどうか選択肢があるのだ。

その経験が、ウィーウエに訴えていた。こんなものでは足りない——と。

「——足りない！」

ウィーウエは草原を走り回った。兎。鳥。血の滴る生肉を、片っ端から平らげる。もう、火を通そうとは思わなかった。お腹が減っているのだ。ある程度は詰め込まないと、耐えきれない。

食べて。ひたすら食べて。ウィーウエは泣いた。

「ぐ……うえ、う」

喉に絡まる肉が、血が、骨が美味しい。普通じゃない。こんなのは、絶対に普通じゃない。心の何処かで吐き出したいと強く思っているが、それよりも食欲が勝った。耐えられないのだ。美味しい。だから泣いた。泣きながら食べた。

——そして、そうした小動物を十数匹も狩った後に。ウィーウエは口元を拭いながら、決意した。

「……アレだけは、絶対に食べない」

食べながら、罪悪感は皆無。食欲には勝てない。血肉は美味しい。現実でも、こんな

に美味しい物は食べた事が無い。明らかに、精神がおかしくなっている。

だから、決めた。恐ろしい事に、ある予想が脳裏に立っているから決意したのだ。

知的生物だけは、絶対に食べないようにしよう。それを食べると、色々と終わってしまう。そういった生き物を襲うようになったら、もう終わりだ。そう心の奥で何かがいや、人間性が訴えている。

だから、知的生物だけは食べないと決めよう。どれだけ空腹が訴えても、アレを食べるくらいなら餓死を選ぼうと。

「……………」

立ち上がり、必要じゃ無くなった予備武装をしまう。インベントリは、ゲームの頃と同じ感覚でアイテムを出し入れする事が出来る。なので、すぐに主武装に変えた。モンスターを警戒しなくてはいけないから。

「…………行こう。この周囲の、探索だ」

此処が何処だか分からない。分からないけれど、何とか生きて行こうとそう決める。生きてさえいれば、どうにかなるのが信条だ。だからウィーウエはこのよく分からない場所を、ログアウト出来るまで生きて行こうと決意する。

そう、決意を固めたウィーウエは歩き出した。周囲の探索をする為に。安全を確保する為に。

この世界を、
今を生きていく為に。

2章 アベリオン丘陵より

ローブル聖王国とスレイン法国。この人間種の生活する宗教国家の間には、大きな森と丘陵地帯が広がっており、二つの国を分けている。

森の名は、エイヴアーシャー大森林。此処には森妖精エルフと呼ばれる人間種が国を築いて生活しており、法国と大森林を舞台に長年戦争を続けていた。更に、もっと奥の方には闇妖精達ダークエルフも生活していると言われている。

そして丘陵地帯の名を、アベリオン丘陵。此処では様々な亜人種族達が日夜闘争を繰り返しており、混沌の坩堝と化していた。同種族であろうと、部族間で分かれて対立しているのだ。

ゴブリンやオークが共生している部族もあれば、単なる奴隷関係に終始している部族もある。この丘陵地帯の亜人種達は統率される事なく、ずっと戦いを繰り返していた。

このアベリオン丘陵に棲む多種多様な亜人部族達。その内の一つ、刀鎧蟲ブレイドアイと呼ばれる種族が集まる四十人ほどの規模の部族は、現在危機に陥っていた。

刀鎧蟲は、手甲の部分から刀のような鋭い刃を突き出した手を持ち、鎧にも似た外骨

格に包まれた昆虫のような亜人だ。彼らは他の亜人種と違って装備を必要とせず、元々の頑強さで他の部族と戦っていた。

しかし、此処に至って彼らは、その傲慢のツケを払わせられようとしていた。

「敵兵力は、どれぐらい残っている!？」

この部族の長——クレインプットは、必死に入口を岩で塞いでいる部下達を見ながら、隣の参謀役に叫んだ。その体は酷く傷つき、所々外殻は砕けて血が滴っている。

「はい、族長……おそらく、六十という規模になろうかと思えます」

答えた参謀も、傷ついていた。いや、むしろ見渡しても傷ついていない者は子供くらいであろう。既に、生者の数は元々の部族人数の半分を切っていた。

「なんとという事だ……。……まさか、二部族が合体するとは」

族長クレインプットは、震える声で呟く。そう、此処まで追い詰められた原因はそれだった。自分達と同じ人数であった部族の二つが、何があつたのか知らないが合体し、自分達の部族に襲いかかって来たのだ。

襲いかかって来た部族の種族は、人蜘蛛スパイダーと言われる亜人種である。彼らは四本の非常に細く長い手と細い足を持った、蜘蛛のような外見の亜人種だ。口から多様な糸を吐き、この糸のできた服は鋼鉄なみの硬度を誇る。

その鋼鉄並みの硬度の服で武装した人蜘蛛達が、多勢に無勢で襲いかかって来ている

のが刀鎧蟲達の現状だ。とてもではないが、耐えられない。鋭い刃物同様の手を持つ刀鎧蟲達でも、この服の上からダメージを与えるのは至難の業であった。

幸い、自分達の部族は岩盤や地下洞窟のある土地で生活していた為に、こうして逃げの手を打つ事が出来た。入口を岩で塞いでしまえば、侵入するまでの時間が稼げるだろう。それも僅かではないが。

「族長。今の内に」

「ああ。今の内にこのまま地下洞窟を通り、別の入口へ出よう」

互いに頷くと、急いで女子供を戦士達で挟みながら奥へ駆けていく。彼らは自分達ほど筋力が無いため、動かすのも一苦勞であろうが、しかし糸を使えば岩を退かす時間を短縮出来るだろう。逃げる時間は少なかった。

暗い洞窟の中を、懸命に駆けていく。背後で、岩を退かす大きな音が響き、更に足が急がせた。

「出口だ！」

先頭を駆けていた戦士の叫び声に、安堵が漏れる。どうやら、追いつかれる前に洞窟を抜ける事が出来たようだ。この地下洞窟は何度か通った事がある為に、こちらに分があるとは思っていたが、それでも追いつかれたらどうなるか分からない。このような天井や壁のある場所では、人蜘蛛の方が有利なのだから。

一番最後を走っていたクレーンプットも、外へ出る。しかし、部族の者達から異様な雰囲気を感じ取った。何か、予測もしないものがいたような……そんな、困惑の雰囲気を。

「なんだ、どうした？」

一番最後を警戒のために駆けていたクレーンプットには、何がいるのか分からない。近くの者に訊ねながら、先頭へ近寄る。するとそこに。

「あ、やばい。倒れそう……いや、まだ大丈夫だよ？ うん、大丈夫……？」

首を捻りながら、大きな槍を抱き込んで座り込み背中を見せている真つ黒なローブを着た何かがいた。

「……………族長」

「待て」

敵、では無いだろう。そもそも、自分達に気がついていないはずは無いのだから。これだけの人数で、そろそろと背後の岩盤の裂け目から現れるのだ。寝ていたところで気がつくはずだ。

くん、と風に乗って漂う臭いには、血臭が紛れている。自分達のものではない。おそらく、この濃い血臭は崖際に座り込んで何かをしている、何者かから漂っている臭いだ。

「……………」

此処で、クレーンプットは考えた。このまま、この何者かを無視して逃げるべきであろうか、と。時間はない。背後からは人蜘蛛達が迫っている。だが、この目の前の何者かを無視出来ない理由もあった。

見えている槍が、明らかにとてもない逸品のマジックアイテムにしか見えないのだ。黒紫色の、金属の光沢を放つ神々しささえ感じる禍々しい槍。普通の槍ではなく、その刃先は幅広大型で、突く事よりも斬る事に特化しているデザインをしているように見えた。

そして、ここまで明らかに特別な槍を持っている、血臭漂わせる存在は、果たしてあちらが興味を抱いていないからと言って、無視していいものなのだろうか。

「――失礼！　そこな武人よ！――」

迷いは一瞬だった。クレーンプットは、背後から迫り立ててくる人蜘蛛の存在を一時的に忘れ、槍の持ち主に声をかける。

声をかけられた存在は、くるりと振り返った。深くローブの帽子を被っている為に、顔は見えない。しかし、顎に当たる部分に凄まじい鋸のような物が見えたので、おそらくこの存在は自分達と同じ蟲系種族だろう。

「うん？　俺の事かい？　――って、お、ああ！――」

武人は振り向くと、再び前を向いてオロオロと慌てた。そして、一瞬腕がぶれたかと

思うとその片腕に何かを掴んでいる。

「……崩れてしまった」

ポツリと呟かれる。どうやら、何か暇潰しをしていたようだ。手には、五センチほどの長さに揃えられた木の枝が幾つか握られている。積み木遊びでもしていたのであるか。

「よっいしょ」

武人が立ち上がり、こちらを振り向くとクレインプットだけでなく、部族の者全員がぎよつとした。身長は、おそらく一・八メートルから九メートルくらいだろう。しかし、その両腕に赤に近い色の右は肩まで、左は肘までの長さのガントレットを装着し、脚部には膝上まであるガントレットと同じ色の大きなグリーブを装備している。ローブの下には金色の生地には黒や赤で細かな刺繍が施された衣装を着込んでいた。

「……………」

ごくり、と喉が鳴る。もはや、この存在は明らかに普通の存在では無いだろう。アベリオン丘陵でも一握りしか存在しない、おそらく二つ名持ちだ。間違いない。

「で、何か用かい？ ……刀鎧蟲さん。うん？ 刀鎧蟲で種族合ってるよね？ 確か、そんな名前の種族だったと思うけど」

違ったつけ、と首を傾げる存在に、クレインプットは前に出ると軽く頭を下げた。下

手に出たくはないが、しかし例の異名持ちの誰かであった場合、礼を尽くさないのは恐ろしい。

「その通りだ、名も知らぬ武人よ。このような所で何を？」

「俺？ 単なる迷子だよ、迷子。昨日一日中色々見て回ったけど、このフィールド全く見覚えねえ！——とかなっちゃってさー。へugdドラシル」は広過ぎて困るね」

その言葉に、今度はクレインプットが首を傾げる番だった。

「ゆぐどらしる？ いや、此処はアベリオン丘陵と人間共が呼んでいる場所では無かったか？ 我々も、便利なのでそう呼んでいるんだが……」

「アベリオン丘陵？ うーん、知らん地名だ……。え、それ何処のサーバーの？」

「さーばー？」

再び首を傾げたクレインプットに、目の前の武人はいよいよ慌て始める。

「え、いや。うん。もしかして、NPCか？ いや、NPCでもこんな風に喋られる知的生命体なら、へugdドラシル」の事くらいは……」

何か考え始めた武人に、クレインプットは恐る恐る告げる。

「先程から不思議に思っていたのだが、その『ゆぐどらしる』と言うのは、貴方のいる部族の名前なのか？」

「え」

クレーンプットの問いに、ぽかんとする武人。すると、武人はいきなり頭を抱え始めた。

「え、えー。マジか。マジなのか。ヤバイ。俺、根本的に何か勘違いしてる？ 助けてギルド長……」

武人はぶつぶつと何事かを呟き、考え始めると——がばりと顔を上げて、クレーンプットを見た、気がする。

「——良し！ 良くは無いが、まあ何とかなるだろ！ 差し当たっては、その知的生命体くん。俺は君に色々と質問がある！ なので、何か困っている事があるなら言うように。対価に、それを解決してやろう！」

「……はい？」

何か納得がいったのか、結論が出たのか。とりあえず、よくは分からないが自分に都合の良い展開にはなっている気がする。なので、クレーンプットは色々と湧き出た疑問を押し留め、目の前の武人に頼み事をした。対価が質問という事ならば、この後命を奪われるような事は無いだろうと思ひ。

そして、これほどまでの装備で身を包んでいる武人ならば、易々と殺されまい。むしろ、本当に異名持ちの王の一人であるなら、たった一人でも確実に勝てるだろう。

「では……我らは今、ある部族達に追われている。どうか、我らと協力してその部族を追

い払ってはいくれないか？」

「いいよー」

即答だった。しかし、後からはつと気がついたように訊ねてくる。

「いや、そう言えば何に追われてるんだ？　実は古き漆黒の粘体エルダー・ブラック・ウーズの群れに襲われてるんです、とか言うオチなら俺も逃げるレベルなんだけど」

「ウーズ？　いや、スライム系じゃない。同じ蟲系種族だ。人蜘蛛の」

そう言うのと、明らかに武人はほつとしてるようだった。

「え、人蜘蛛？　なら良かった！　ヘロヘロさん系に襲われるとか、世界級アイテムで全身を武装してないと、装備が幾つ有っても足りないからな！　人蜘蛛なら安心！

……変に進化してないよね？」

「よく分からないが、普通の人蜘蛛だと思うぞ」

「——よし！」

何か良いのか、さっぱり分からない。

「もう一度訊くけど、もしかして七色鉱とかスターシルバー並みの強度の糸を吐いたりとかは……」

「そのような名の物質はよく知らないが、彼らは鋼鉄並みの強度の糸を吐く。気をつけて欲しい」

「あ、そう?..」

告げると、完全に気が抜けたようだった。武人はスタスタと自分達の波を割り、自分達が出て来た岩盤の裂け目へと移動する。

「族長」

参謀がクレーンプットの傍へ寄り、不安そうな顔をするが、クレーンプットは覚悟を決めて参謀に告げた。

「いいや、此処であの武人と協力する。あの装備を見ろ。間違いなく、単なる一兵卒ではあるまい」

「それは、そうですが……」

人間達とは違い、圧倒的な実力が無ければ強力な装備で身を包む事など、亜人達の中では出来ない。強力なマジックアイテムで身を包むのは、亜人達の中では比類なき強者の証拠なのだ。だからこそ、あの武人は間違いなく強いだろう。幸い、武人は何か自分達に訊ねたい事があると言っている。それを利用するのだ。

「ですが、質問に答えた後はどうなるか分かりません。気をつけた方がよろしいかと」「だろぅな」

そんな事はクレーンプットにも分かっている。だからこそ、協力なのだ。こつそりとし色々押し付けて、自分達が有利な方へ持っていく。武人の体力を減らせば、少しの犠牲

で乗り切れるかも知れない。

そうした算段を着けた彼らのもとへ——遂に、人蜘蛛達が姿を現した。地盤の裂け目から、わらわらと出て来る。彼らも、此処で待ち構えているというのは分かっていたのだろう。

「プフよ……観念したようだな」

人蜘蛛の族長であろう雄が、にやりと口元を歪める。プフとは、クレインプットの部族名だ。そして人蜘蛛の族長は、すつと前へ出ている武人の方へ目を向ける。

「……どうやら、助っ人を雇ったようだが」

人蜘蛛の族長も、武人の姿を見て警戒したようだった。他の人蜘蛛が散開し、武人を避けるような位置へ移動する。武人は、特に何も行動しない。

「だが、これだけの人数差を一人では覆せまい。覚悟するがいい——」

人蜘蛛の族長がそう告げると、族長の背後に控えていた者達が糸を吐き出しながら跳躍した。襲いかかってくる者達に全員が身構えた時——武人が、片足を一步前に出す。

「ほい」

やった事と言えば、一言で済む。片手に持っていた槍を無造作に振った。以上だ。

しかし、それだけで——襲いかかった人蜘蛛達は全て、まるで壁にぶつかった流水のように、血肉の水飛沫となって飛び散った。

しん、と静寂が辺りを包む。今、此処にある音はバラバラになった血肉がびしやりと、人蜘蛛達の身体にかかった音だけだ。それだけが、音を鳴らしている。

「……よわ。いや、鋼鉄並みとか言ってたから、覚悟はしてたけど。でもレベルひつくう……。いや、それよりも問題は、やっぱり作業感漂うこの感情だな。いかん、本格的に俺変になってるわ」

バラバラに飛び散った人蜘蛛達を気にする様子も無く、武人は振るった槍を再び元の位置に戻す。そして、何事か独り言を呟いた。内容はよく分からない。きつと、しっかりと理解出来ていた者は誰もいない。分かるのは、一つだけだ。

この武人にとって、目の前の人蜘蛛達は、悲しくなるほどに脆弱だった。

「よし。とりあえず、俺の動きに問題は無さそうだ。……で、次はどうする？ 来るなら来い。来ないなら——どうしよ。俺、魔法詠唱者^{マジック・キャスター}じやないから、群れを追いかけるのは苦手なんだよな——」

待ち構える武人に、人蜘蛛は震えあがっている。当たり前だ。自分達だって、恐ろしい。

しかし、人蜘蛛の族長は叫び、同族達に告げた。

「あれほど強力な一撃を何度も振るえるはずが無い！ 糸で動きを抑えるのだ！」

その言葉で、人蜘蛛達は武人に向かって鋼鉄の強度を持つ糸を幾つも吐き出す。その粘液糸で、動きを抑えるつもりなのだろう。だが。

「悪いな。俺、行動阻害に対する完全耐性をアイテムで得てるから。そういうのは効かないんだ」

糸が、するりと武人を通り抜けていった。吐き出された粘液糸が地面に虚しく落ちる。そして、武人がまた一歩前に出た。人蜘蛛の族長は震えあがって、背後へ下がる。

「――よつと」

そして、もう一振り。また片手で、無造作に槍を振るう。また何体も、人蜘蛛がばらばらに飛び散った。既に、人蜘蛛の数は自分達を追いかけていた時の半分以上となつてゐる。十数体を、一撃で屠っているのだ。

これは、もはや戦闘では無い。作業だ。殺戮でさえ無い。何故なら、武人は適当に槍を振るっているだけだ。それだけで、人蜘蛛は文字通り蜘蛛の子を散らすように血肉となつて飛び散っている。

絶望であつた。勝てるはずが無い。

「ひ、ひい……」

人蜘蛛の族長も、心の底から理解したのであろう。ぶるぶると怯え、脇目もふらず逃げ出した。岩盤の裂け目へ。そんな族長の様子に、生き残っていた者達も我先にと裂け

目へと向かっていく。

後には、武人と、肉片となった人蜘蛛達と、そして。

「よし。終わったな！」

武人が背後を振り向く。そう、今まさに武人の圧倒的強さに怯えている自分達のみが残ったのだ。

「別に追いかけていいよね？ 追い払うだけで。流石に、追いかけて一人残らず皆殺しは面倒なんだけどさー」

武人の言葉に、ぶるぶると首を横に振る。今から追撃してくれ、と頼んでしまったらその後この場に留まっていられる自信が無い。間違いなく、脇目もふらず逃げ出すだろう。あの、人蜘蛛達のように。

「なら良かった！ それじゃあ、俺の質問に答えてくれ。その前に自己紹介だけど、俺の名前はウィーウェ・ホディエー。君らは？」

「わ、私の名はクレインプット・プフです。プフ族の族長をしております」

先程までの口調を改め、敬語になる。とても、普段使いの言葉で話せるような相手では無い。

ウィーウェと名乗った武人は、そんなクレインプットに首を傾げながらも、続々と質問を続けた。

そんなウィーウエの質問に、分かる範囲で誠実に答えたクレーンプットは、このウィーウエという存在は、アベリオン丘陵の出身者では無いのだろう、という事を理解した。あまりに、この丘陵地帯の事を知らなさ過ぎるのだ。もしかすると、本当に迷子なのかも知れない。

ウィーウエはクレーンプットに多くの質問をし、その答えを得た後は頭を抱えて悶え始める。

「えー、えー。いや、まさか……。ありえねー。嘘だと言つてよ……。あー！ 面倒くせー！」

ウィーウエはしばらくぶつぶつと唸っていたが、がばりと唐突に顔を上げる。そして、クレーンプット達に片手を上げて、別れを告げた。

「とりあえず、ありがとー！ 俺、色々この辺り旅してみる事にするよ！ じゃあ、君らも元気でねー！」

そう言うのと、ウィーウエは崖下へ飛び降りる。そのまま、平然と地面に着地して何処かへと去って行く後ろ姿を、クレーンプット達は呆然と見送ったのだった。

§ § §

「うわー！ あー！」

刀鎧蟲達と別れたウィーウエは、誰もいない草原で一人地面にゴロゴロと転がって悶えていた。誰も見ていない為、恥も外聞も無い。

「なんてこった。なんてこった」

刀鎧蟲達に質問した内容を総合すると、どう考えても此処は「ヘグドラシル」では無かった。というより、本当にゲームの世界なのか疑問が出る。何もかもが気味が悪いほどにリアルなのだ。

「でも、なんで刀鎧蟲とか人蜘蛛とかいるんだ？」

「ヘグドラシル」にも存在する亜人種達。彼らは、どうして此処にいるのだろう。それどころか、聞いた事のあるような種族が幾つもこのアベリオン丘陵とやらには生息しているようだ。此処が「ヘグドラシル」では無いなら、一体彼らは何処から来たと言うのか。昔からこの丘陵地帯に住んでいるような言い方であったが。

それだけでは無い。そもそも、どうして自分がウィーウエ・ホディエーというゲームアバターでこの世界にいるのか。自分の精神がおかしくなっているのか。何もかもが疑問だった。

「うーん。うーん。俺はこれからどうすれば……」

ウィーウエは悩む。こんなに悩んだのは、おそらく会社が倒産確定して無職になった

時以来だろう。なのでウィーウエは同じように一時間ほど悩み続け――

「まあ、何とかなるよね！」

そう結論付けると、その場から立ち上がった。

「よし！　とりあえず、また腹が減ってきたから食料集めだー！」

そう叫び、再び野を駆け出す。この場にモモンガを初めとしたギルド（アインズ・ウール・ゴウン）のメンバーがいれば、両手で顔を覆ってウィーウエにツツコミを入れただろう。お前は、その無駄にポジティブシンキングなどころをどうにかしろ――と。

そんな事なんてさっぱり気づかない。ウィーウエは無駄に前向きな思考回路で、とりあえずファゴサイトーシスのペナルティをどうにかする為に野生動物達を追い回した。

「しかし、やばいなー」

数十分かけて野生動物達を追い回し、捕まえ、腹の中に収めたウィーウエは、これからの事を考えると気が滅入った。

とりあえず、数時間は何も食べなくても問題無い量を胃の中には収めた。しかし、その数は兎程度の大きさでは十を超える。しかも、満腹ではなくぎりぎり空腹が我慢出来る程度の量なのだ。

おそらく満腹になろうと思えば、大型の、虎などの大きさの動物が一、二体は必要だ

ろう。小動物ばかり食べていると、この周辺の小動物達が絶滅しかねない。結果として、ウィーウエは追い詰められる。絶対に食べないと心に決めた物に手を出したくなってしまう。

「何とかして、永続的に食料を確保する方法を考えないと、大変な事になるぞ……」

ウィーウエにとつて、一番の死活問題だ。こんな事になるのなら、ファゴサイトーシスのクラスなんて習得するのではなかった。もし今から時間を巻き戻せるのなら、ウィーウエは殴つてでも過去の自分を止めるだろう。

先程遭遇した、刀鎧蟲や人蜘蛛達の事もある。あの程度のレベルなら幾ら襲われても無傷で迎撃出来る程度の身体能力はあるが、しかしウィーウエにとつての適正レベルのモンスターなどに遭遇した場合を考えると、身が竦む。

何せ、最初の悶え苦しんだ激痛は、間違いなくヘUGドラシルで負っていたダメージの、本来の痛みだろう。あれをもう一度体験しろと言われたら、泣き喚く自信がある。好き好んであんな痛みを負ってみたいとは思わない。死なない事と、痛みを我慢する事は全く別の問題なんだとウィーウエは心で理解出来た。

「さっきのクレーンプットくんだったけ？ 彼に聞いた他の亜人種でも探してみるかなー。プレイヤーとかを知ってる人がいいんだけど」

ウィーウエは再び槍を片手に、周囲を歩き回る。疲労・睡眠は無効なので食事にさえ

気をつけていれば、いつまでも進み続けていられた。

なので——ウィーウエは、このアベリオン丘陵の端と思しき場所へ辿り着くまで、全力で駆け抜ける事にした。

ウィーウエの身体能力は、生命力・攻撃力、そして敏捷特化。防御を捨てて、完全に敏捷特化となっている式炎炎雷ほどではないが、その速度は、完全に疾風さえ置き去りにして、真つ黒で朧な残影となる。おそらく、誰も何が通ったかさえ分からないだろう。しかし、ウィーウエの常識離れた視力は、正確に今何を通り過ぎたか把握していた。草原。森。山岳地帯。様々な場所を通り過ぎていく。勿論、交通事故を起こさないように、だ。そうして走り抜けたウィーウエは、遠目にあるモノが見え始めた時点で停止した。

此処が、確か刀鎧蟲達が言っていた人間達が住んでいるという国を守る為に存在する、巨大な城壁だろう。いつの時代からあるかは知らないが、人間達が死に物狂いで亜人達から身を守る為に築いただけだけあって、かなり長大だ。

もつとも、遠目から見たただけだがウィーウエの今の身体能力なら、特殊技術スぺシャルの一つでも使えば斬り碎けるだろう。

「……………」

ウィーウエは、その城壁を見つめる。あの向こう側には、人間がいる。刀鎧蟲達と話

したり、通りがけに色々な亜人種達の集まりを見たが、やはりウィーウエの知りたい事を知っているような存在は、人間の方に多いだろう。亜人種達は、文明と言うものを軽視する傾向が見えた。でなければ、目の前の人間の国のように防壁を固めるはずである。

それをしないという事は、あまりそういった事に関心が無いのだ。

（侵入……してみるか？）

〈闇視〉^{ダークウィジョン}の能力で、闇を見通す事は簡単に出来る。そして当然、あの程度の城壁なら身体能力だけで駆け上がれるだろう。やろうと思えば、簡単に出来る。

だが、その後が問題だ。

まず、ウィーウエは〈人化〉の特殊技術を持つていない。一部の異形種が持つ変身能力を、ウィーウエは所有していなかった。〈ユグドラシル〉ではほとんど必要としない特殊技術だったからだ。

勿論、〈人化〉があれば人間種しか入れない大きな都市にも入れるようになるが、ソロブレイをしていたウィーウエには、ステータスが下方修正されてしまうような〈人化〉は痛かった。それに、アイテムの売買などはヘルヘイムやムスペルヘイム、ニヴルヘイムなどの異形種が有利な世界で補えたのだ。人間種の都市には入れなくとも、数は少ないが亜人種や異形種の都市には入る事が可能である。

更に、ウィーウエは前衛戦士のビルドをしている為に、誰にも見つからないように侵入する事が出来ない。足音を消す〈忍び足〉は勿論だし、〈完全不可知化^{パーフェクト・アンノウンアブル}〉のような便利な魔法は習得出来ていない。

そして、一番の問題は――。

「――やばい、お腹空いた」

この、空腹だろう。食欲増大のペナルティが、大変良く効いてしまっている。ゲームの時には全く気にならず限界まで我慢していた事もあったが、今となつてはそれも苦しい。とても、我慢が出来そうに無い。

「し、食事をしに行こう……」

ウィーウエは遠く見える城壁に背を向け、アベリオン丘陵へと帰つて行く。最後に、ちらりと城壁を見た。

「……ペロロンさんみたいなのは、いないか」

幾ら離れているとはいえ、ウィーウエは自分の身体を物陰に隠さずに立っていた。双眼鏡などのマジックアイテムや、〈鷹の目〉の特殊技術を持つ者からは、ニキロ先にいるウィーウエの姿など丸見えだろう。

しかし、狙撃は全く来なかった。ウィーウエの全速力が見えたのなら、ウィーウエの身体能力が一〇〇レベルに相当する事に気がつくはずだ。何のアクションも起こさ

ないなど有り得ない。

これが意味する事は、あの城壁にペロンチーノのような、ニキロ先を狙撃するような実力者の狙撃兵は存在しないだろう、という事だ。痛いだろうが、自分の防御力を信じて一撃二撃なら耐えて撤退出来るだろうと思いい、こうして近寄ったのだが狙撃手の気配は無い。いたとしても、自分を狙撃出来るほどの射程距離は無い。

つまり、一方的に蜂の巣にされる危険性は低かった。

「……かえろ」

ウィーウエは再び城壁に背を向けて走り去る。とにもかくにも空腹だ。この空腹をどうにかしないと、あの城壁の内側にこっそり侵入し、活動する事も出来ない。最低限満腹状態で無ければ長時間の探索は不可能だろう。

だから、ウィーウエは去る。そしてウィーウエは知らない事だが、既に太陽が傾き始めていたこの時間、あの城壁にいる者達でウィーウエに気がついた人間はいなかった。

——そして、夜になる。

食事を終えたウィーウエは、草原に座り込み、一人夜空を見上げていた。

「すげー……」

広がっているのは、美しい星空だ。ネットの画像でしか見た事が無い美しい光景が、今ウィーウエの頭上へ広がっている事への感動。

「ギルド長も、何処かでこの光景を見ているのかな……」

呟くが、どうだろうと内心疑問を抱く。色々と考えたが、この世界は異世界で、ヘUGドラシル」ともあの荒廃した現実とも関係が無い場所に見える。もしかすると、モモンガはちゃんと元の現実にログアウト出来ているのかも知れない。

それと言うのも、このような事になって既に二日目の夜だが、ウィーウエに一度としてモモンガからの連絡が来ないからだ。睡眠の必要が無いとはいえ、ずっと意識を保っているのも精神的な疲労を感じるものである。それでもずっと意識を保っていたのだが、モモンガからの連絡は無かった。

（でも、魔法が使えないって可能性もあるか）

一応、特殊技術が使える事は確認したが、ウィーウエは魔法が使えないので魔法分野はお手上げだ。明日はヘUGドラシル」にいたモンスターや亜人種達が魔法を使っている所を見て、確認しないといけない。彼らがヘUGドラシル」のシステムを使うとは限らないのだから。

そして、魔法を使っていた時は——モモンガは、この異世界にいないのだと諦めよう。彼は、こんなわけの分からない事態に巻き込まれず、無事に現実に帰れたのだと。その方が、きつとずっといい。今の自分のように、何かを殺しても何も思わないような怪物の精神を持つよりも。その方がいいに決まっている。

ウィーウエはその日も、ずっと起きたまま夜空を見上げていた。夜だけは、通常の食欲に戻る為に何者にも邪魔されずに。

§ § §

この奇妙な出来事から、三日目になった。

「うおー！ 逃がすかあああッ！」

ウィーウエはそう叫びながら、偶然見つけた肉食獣——ウルフ狼を追い回す。瞬く間に距離を詰め、瞬時に片手で首を捉え、骨を砕き即死させた。続いて、他の狼達も同様に即死させていく。

「やったー！ これで満腹になれるー！」

ウィーウエは五匹の狼達の毛を皮ごとペリペリと引き剥がし、腹部の内臓を潰さないように取り出した。兎やらの小動物は諦めがつくが、流石に此処まで大きい動物になると、あまり腸の部分は生で食べたくない。だって、腸の中に詰まっている物と言ったら、口にするのも憚られるものであるし。

「ありがたや、ありがたや」

ウィーウエは全ての処理を終えると、骨ごと貪り喰らう。主武装である槍は地面に突

き刺し、横に立てておいた。両手で齧り付く。

（もう、生肉食べるのも気にならなくなつたな！）

最初は泣きたくなるくらい、嫌悪感が無い事に嫌悪感があつたものだが、三日目になると慣れたものだった。とりあえず、腸と胃だけ怖いので残してしまう。贅沢な気もするが、流石に衛生的な意味で食べたくない。

（このままじゃ、俺の精神どうなっちゃうんだろー）

三日。たつた三日で、どんな人間からかけ離れた精神に移行している気がする。この精神状態は今の生活をする分には有難いが、しかし元に戻るのならば遠慮したい精神状態だ。そもそも、いつも凄まじく不味いゲル状の食事を摂っていたが、果たして新鮮な生肉の美味しさに目覚めてしまったこの状況。大丈夫であろうか。二度と現実の食事は喉を通る気がしない。

ウィーウエは久々に満腹状態になると、早速昨夜考えていた行動を実行に移す事にした。即ち、この世界の亜人種や人間種が「ユグドラシル」の魔法を使えるかどうかの実験だ。

まず、魔法が必ず使えるはずの種族を探す。確か、刀鎧蟲達が言っていた丘陵地帯に住む亜人種の中に、魔現人^{マージュロス}という種族がいたはずだ。彼らは魔法が使える種族だつたはずである。彼らを探して、魔法が使えるかどうか調べよう。人間種は、必ずあの城壁の

近くにいろいろ事が分かつているので、後でいい。

問題は、この丘陵の大きさだ。此処から、一種族だけを探そうと言うのだから面倒な事この上ない。魔法詠唱者であれば転移魔法で簡単に行ったり来たり出来るのであるが、ウィーウエの場合は基本的に徒歩である。

魔現人は、昨日通った道の近くにも、最初の日の近くにも住んではいなかった。なので、別の方角へ移動しなくてはならない。ウィーウエはソロプレイのお供である方位磁石付きの時計を取り出し、太陽と時刻を見ながら方角を確認する。

「えーつと……うん、次はこっちの方角に走り抜けるか」

確認すると、再びウィーウエは走り抜ける。勿論、交通事故には気をつけて。相手をミンチにするのも、自分が痛い思いをするのも出来るだけ避けた方がいいだろうから。

ウィーウエは魔現人の姿を探して、丘陵地帯を駆け抜ける。何処ぞへ走っている馬人ホーイルナーの横を気づかれずに駆け抜け、蛇身人スネークマンが集まりぬめぬめしている横を素通りし。

ウィーウエはただひたすらに駆け抜けた。

——そして。

「い、いねえ……」

太陽が真上を少し過ぎた頃、ウィーウエは見つかからない魔現人に途方に暮れた声を上げた。

（困ったな。他にも、魔法が使えるような種族を探した方がいいかな？ でも、使えるなら絶対魔現人だろうしな）

この丘陵地帯で、あの亜人種が使えないなら魔法システムの不備を疑える。だが、それを確認せずに本来魔法を使うような種族ではない亜人種が使っていた場合、それがシステム不備なのかまた別の理由なのか分からないのだ。《ユグドラシル》の知識が何処まで活用出来るのか知る為に、どうしても魔現人の観察は必要だった。

（何処かで、適当に誰かに訊ねるかな）

こうなったら、自力で探すのではなく、知っていそうな者に訊ねる他あるまい。刀鎧蟲達の時と同じように、何かを対価にして訊くべきか。

「とりあえず、飯食おう」

正午を過ぎたであろう時間のため、空腹だ。朝の時と同じように、狼のような大きな獲物が欲しいがこの広い丘陵で早々見つかったりはしないだろう。また、適当に小動物を捕まえるしかあるまい。

ウィーウエは小動物の姿を探し求め、何匹か捕まえて口に放り込む。八匹目を捕まえた頃に、ウィーウエは何かの群れがこちらへやって来ている事に気がついた。

「？」

首を傾げ、とりあえず持っている小動物を口の中に放り込む。ウィーウエの視力はそ

の群れの正体をすぐに看破した。獣身四足獣だ。数は五。

ウィーウエは彼らの姿を確認すると、ちょうど良いタイミングだとほくそ笑む。彼らに、魔現人の居場所を知っているか訊ねよう。

獣身四足獣達も、ウィーウエの存在に気がついたようだった。群れはウィーウエと五〇メートルほど離れた場所で止まり、リーダーであろう存在が大声で威嚇するようにウィーウエに問う。

「貴様！ 此処で何をしている!？」

さて、第一声はどうするか。とりあえず、友好的に出た方がいいだろう。

「とある種族を探して旅をしている者だー！ 君らに問いたいんだが、魔現人がどの辺りに住んでいるか知らないかー！」

ウィーウエが訊ねると、彼らはざわざわと騒ぎ出す。どうやら、何事か決めかねているらしい。

「魔現人共は此処より南の地へ住んでいる！ 此処は、我らの領土だぞー！」

「そうなの!? ごめーん！」

縄張りだと言うのなら、素直に謝る。しかし、軽い感じだったのが、どうやら向こうは癪に障ったようだった。上司を相手にしているかの如く謝るべきだったらしい。

「貴様！ なんだその軽い謝罪は！ 誠心誠意謝らんか！」

「え、あ、うん。ごめん……」

領土侵犯はいけない事なので、今度は声を落として真面目な感じで謝罪した。すると、獣身四足獣達はそんなウィーウエの態度に満足したのか一つ頷くと、続いて気安げに声をかけた。

「しかしこの丘陵地帯に旅人だと？ 何処から来た？」

「ユグドラシルつてうんと遠い所からかな。地理がよく分からなくて、困っているんだ。そこで、凄腕の魔法詠唱者の力を借りて元の土地へ帰ろうかと思って、魔現人達を探してるんだけど……」

魔法詠唱者だど？ どういう事だ？
マジック・キャスター

「えー……なんて言うか、転移トラップを踏んでしまったように」

ウィーウエがそう言うのと、推定族長の獣身四足獣は訝しげな口調で訊ねてきた。

「転移トラップだと？ 別の土地から別の土地へと転移出来る魔法なぞ、聞いた事が無いぞ」

「そうなの？ どんな魔法があるか訊いてもいいかい？」

「我々が知っている魔法と言えば、第三位階にある〈次元の移動〉だ。脆弱な身体能力の魔法詠唱者共が、距離を詰められた時に使う転移魔法だろう？」

「へえー」

第三位階魔法の〈次元の移動〉^{ディメンショナル・ムーブ}。完全に、ヘUGドラシルのシステムの魔法だ。これはいよいよ、雲行きが怪しくなってきた。

「第五位階魔法に、長距離転移の魔法があるんだけど、知らないかい？」

「第五位階だと？ 最上位の魔法ではないか。その位階を行使出来る者は、現在の魔現人にもいないはずだ。……確か、三〇年ほど前まではいたと聞いたが」

「……さいじょうい？」

何だか、凄まじい勘違いを聞いた気がする。ウィーウエは首を傾げると、獣身四足獣は困惑したようだった。

「そうだ。魔法は第三位階……優れた天才でも、第四位階までであろう。第五位階ともなると、伝説にしか登場せんはずだ」

「……………え」

やはり何か、何かおかしい。ウィーウエは更に困惑した頭で、獣身四足獣に質問した。
「あの……魔法って、第五位階より上があるの知ってる？ 天気を変えられる第六位階コントロール・ウェザーの〈天候操作〉とか……」

「なんだと？ ……ふむ。旅人よ、貴様はどうやら凄まじい物知りのようだな」

断じて違う。しかし、これは困った。彼らが特別頭が悪いわけでは無いのなら、このアペリオン丘陵では魔法とは第四位階までしかなく、第五位階で伝説になるほど全体的

なレベルが低いのだろう。

だが一番の問題は、〈ユグドラシル〉の魔法が正常に作動しているような気配がある事だ。ウィーウエは途方に暮れるしか無い。

「うーん。まいった。これはいいよ、城壁を越えて人間の都市に侵入しないといけない感じじゃないか」

ウィーウエが考え込んでいると、獣身四足獣は、ウィーウエに声をかける。

「おい、俺を無視するんじゃない」

「え？ ああ、ごめん。無視したわけじゃないよ。元の土地に帰るには、人間の知恵を漁る必要があるかなってちよつと考え事が。君自身は、ユグドラシルの名に聞き覚えは無い？」

「そんな土地の名は知らない」

「そつか。礼を言うよ。とりあえず俺は旅に戻る。もし何か用があつたら、見つけた時に声をかけてくれ。今回のお礼に、出来るかぎり協力するよ」

ウィーウエはそう言うのと、その場から去ろうとする。だが、それを獣身四足獣が止めた。

「まあ、待て。出来るかぎり協力してくれるのだな？」

「ん？ まあ。……もしかして、何かあつたの？」

「ああ、あるぞ。ちようどよく、貴様に頼みたい事かな」

獣の顔が獐猛に歪む。おそらく、笑っているのだろう、たぶん。表情の違いは、よく分らない。

オアルトロウス

「半人半獣共にちよつとした加勢を頼まれていてな。これから奴らの村へ行く所なのだ。貴様には、ちよつとした証人になつてもらいたい」

「証人？」

「うむ。歩きながら話そう」

この獸身四足獸——彼は、ヴーヴァ・ディディンジャーというらしい。獸身四足獸はよく、半人半獣に頼まれて戦いに手を貸す事があるそうだが、今回もそうした一環で戦いに手を貸す事になったのだと言う。

「今回の敵は水精靈^{ヴァ・ウ}大鬼だ。奴は『濃霧』の二つ名持ちでな。俺は奴を倒し、伝説を打ち立てようと思っている。『魔爪』と同じくらいの、な。貴様は旅人なのだろう？ ならば、俺の伝説を是非広めて欲しいのだよ」

「へー」

要は、吟遊詩人の真似事をして欲しい、という事だ。まあ、それくらいの自慢話を広めるくらいなら、手伝つてやつてもいい。

「でも二つ名？ それって、持つてる奴どれくらいいるわけ？ 俺そういうの詳しくな

いよ」

「む？ ああ、この辺りには詳しく無いんだったか。なに、『濃霧』を一对一で倒したと言えば、それで良いのだ。この丘陵地帯も広いからな。名声はすぐには広まらんが、話して回る奴がいるなら別だ。」

それと、二つ名はこの丘陵地帯でも有名な、選りすぐりの実力者達の異名よ。我らと同じ種族であり、一〇〇年前から一族で名を継ぎ続けている『魔爪』に、あらゆる飛び道具を無効化する水精霊大鬼の『濃霧』などだな。俺もまた、奴らの中に名を連ねたいと思ったわけだ」

「ふーん。まあ、そんな二つ名持ちを一对一で倒せたなら、一目置かれるようになるだろうね」

「そういう事だ。旅をしているのなら、よろしく頼むぞ」

「はいよー」

ヴーヴァの言葉に頷く。しかし、二つ名持ち……。アベリオン丘陵の適正レベルは低いのでは無いかと見積もったが、二つ名持ちの中にはウィーウエと同レベルのモンスターがいるかも知れない。気をつけた方がいいだろう。

ウィーウエはヴーヴァ達五人の獣身四足獣と、二日ほど行動を共にした。

その間もウィーウエは小動物や狼達を狩り、何とかギリギリ空腹のペナルティを受け

ずに済む状態で過ごしている。ウィーウエの食欲に、ヴーヴァなどは驚いていた。と言うのも、亜人種などには多くの動物と同じように食い溜めの機能があるので、腹持ちがいいのだ。彼らは牛や馬などの干し肉などを持ち歩き、それで半人半獣達の住む場所まで向かおうとしていたようだ。ただ、彼らもやはり新鮮な肉の方がいいらしく、ウィーウエが狩った狼などは干し肉と交換する事もあった。

最初は珍しい為に交換に応じ干し肉を口に入れたウィーウエも、少しばかり微妙な気分になる。確かに、新鮮な肉の方が美味しい。

「しかし、貴様は随分と足が速いな」

そしてウィーウエが瞬く間に動物を捕まえる姿を見たヴーヴァも、ウィーウエに一目置くようになった。彼らは、強さに敬意を払うタイプのようで、ウィーウエが単なる旅人ではなく、槍を持ち歩いている事も伊達では無いと身体能力から感じたのだろう。

もつとも、ウィーウエは彼らの前では速度を落として手を抜いていた。強さを勘違いさせるのは、いざと言う時の為だ。正確な戦闘能力の情報は、あまり渡しておきたくない。

だが、それを思えば最初の刀鎧蟲達と人蜘蛛の争いは失敗だった。種族レベルは低く見えたが、ウィーウエと同タイプの職業レベルばかり上げるタイプかもしれないと思いい、特殊技術などは使わなかったが槍自体は本気で振るったのだ。結果、過剰な攻撃力

で肉片になってしまった。

（槍も、こいつらと別れたら主武装から替えるか？ いや、いざという時のためにやつぱり主武装の方がいいな）

あまり痛い思いはしたくない。手を抜いて、手痛い目にも遭いたくない。ならば、装備品の質は落とせない。

ウィーウエはこの二日間、彼らと交流しながらそんな事を思っていた。

そして、半人半獣達のもとへ辿り着いたウィーウエ達は彼らから歓迎を受けた。ウィーウエもヴーヴァから旅の戦士だと説明をしてもらい、それを受け入れられる。

彼らと水精霊大鬼の戦いは、既に勝敗自体は決している。だが、再戦してはならないという決まりは無い。半人半獣達は水精霊大鬼に領土と食料を明け渡す事で生き残り、ヴーヴァ達を連れて再戦を申し入れるつもりなのだ。

そして、ヴーヴァは『濃霧』へと挑み、二つ名を手に入れる。自分は第三者としてそれを見届ける吟遊詩人役だ。

ヴーヴァはウィーウエ達を連れ、半人半獣達の案内に従い『濃霧』のいる場所へ向かう。水精霊大鬼——『濃霧』は、ヴーヴァ達が来るのを静かに待っており、ヴーヴァの姿ににやりと笑った。

「ふふふ……獣身四足獣の小僧を連れて来たか。この『濃霧』ロモロ・ボルツイと戦お

うとは愉快愉快……」

「ふん！ 貴様の『濃霧』の二つ名も、今日までよ。これからは、『濃霧』を倒した雄として、この俺、ヴァーヴァ・ディディンジャーの二つ名が響き渡るようになるだろう」

「ふ——吠えよるわ」

ロモロと名乗った水精霊大鬼は残虐な笑みを浮かべると、ヴァーヴァに向かって戦闘態勢をとる。そして――

「行くぞ！」

二人が同時に叫ぶと、彼らは命懸けの決闘を行った。

「……へー」

二人の決闘を、ウィーウエは気怠げに見つめる。ウィーウエの率直な意見は、「欠伸が出そう」であった。

はつきり言って、あまりに動きが遅過ぎる。ウィーウエと同じ一〇〇レベルの者達なら、おそらく五撃は放つであろう距離感で、たった一撃しか与えられない戦いは、まるでスロー再生されている動画を見ているようだった。

とは言っても、全く参考にならないわけではない。スロー再生のように遅いからこそ、ウィーウエにとって参考になる戦いもある。同レベル同士の戦いの駆け引きが、彼

らの方が巧みなのは間違いないからだ。

所詮、ゲームの世界での戦いであつたウィーウエは、彼らのように優れたフェイントは使えないだろう。死んだ時は死んだ時だと平然と考えられた思考は、今は絶対に出来ない。その為、彼らのように肉を切らせて骨を断つ戦いにさえ怖気づいてしまうかも知れなかった。

痛いものは痛い。死ななくても、痛みは嫌だ。怖いのは恐ろしい。

(俺も、このよく分からない場所で生活するなら、何とか痛み慣れないと不味いな)
だからこそ、彼らの駆け引きは参考になる。中でも、最も興味深いのは――

「〈剛爪〉！」

「ふん！ 無駄だあ！」

「くっ！」

ヴーヴァの一撃を霧になったように回避するロモロ。射撃武器ではなく接近攻撃を霧になって回避するとは、中々に特殊な能力を持っている。だが、気になるのはやはり〈剛爪〉という知らない能力を使っているヴーヴァだろう。ウィーウエは、そんな能力聞いた事が無い。

(知らないシステムが混ざってる？ やっぱ、この世界特有の何かかな？ 気をつけた方がよさそうだ)

低レベルの存在の攻撃は、常時発動型スキルでほぼ無効化出来るはずだが、ヘUGドラシルのシステムによらない攻撃はこれを貫通する恐れがある。その場合、硬直後の隙は大きなものになるだろう。

「しかし……」

ウィーウェはじつと二人の決闘を観察する。二人の決闘に誰もが盛り上がっているが……

「まずいな」

ヴーヴァの敗北は確定している。この後の身の振り方を考え始めた方が良さそうだ。おそらくだが、ヴーヴァも感じ取っているだろう。自らの敗北の予感を。彼は、その敗北を何とか先延ばしにしているだけに過ぎない。おそらく、ロモロの攻撃無効化の正体は——ウィーウェの予想通りならば、ヘUGドラシルのシステム上有り得ない事柄が原因だ。

即ち、前提クラスの破棄。上位クラスを習得するために必要である、下位クラスを飛び越えた特殊技術の習得だ。

ロモロの攻撃無効化の正体とは、つまり〈物理無効化Ⅲ〉と呼ばれる特殊技術である。ヴーヴァの身体能力を見るかぎり、おそらくヴーヴァは三〇レベルもあるまい。そしてそのヴーヴァと相対しているロモロも、四〇レベルは無い。

〈物理無効化Ⅲ〉は三〇レベル以下のデータ量の武器やモンスターの攻撃による負傷を、完全に無効化する。四〇レベルも無いロモロが持つには有り得ない常時発動型特殊技術だ。ヴーヴァもロモロも、完全に〈ユグドラシル〉のシステムを無視している。

（ユグドラシル〉のシステムを使いながら、同時に無視する？ うーん……わけが分からない。こういうシステム関連のPCスキルは俺には無いんだよね……）

ヘロヘロ達ならどうかは知らないが、ウィーウエにはバグを起こしたシステムを修復出来るようなIT系スキルは無い。ただ、印象的には別システムで稼働していたはずなのに、いつの間にか別のシステムが混同してしまっていたような気色の悪さだ。

（これはもう、俺に解決は無理。原因があっても無くても、俺には無理だ。大人しく運営からの救助を待っていた方が良さそうだなあ）

異世界に転移してしまったのか、それともまだゲームの中なのか。そんな事はウィーウエには分からない。ただ、自分に解決は無理だと理解した。自力での脱出は不可能だと。

ただ、自分だけがこういう状況になったとは思えない。モモンガはいないとしても、自分だけがこんな異常事態に巻き込まれたなんて、あまりに低い確率だ。

絶対に、自分以外にこの異常事態に巻き込まれたプレイヤーはいる。とりあえず、それを前提にしてこれからの身の振り方を考えよう。

だから、一先ずは……………友好関係の構築から。ウィーウエは、槍を手にして一步前を踏み出した。

「……………む？」

ウィーウエが槍を片手に、一步前に出たからだろう。ロモロはヴーヴァへの攻撃を止めて、ウィーウエを見た。

「何をする気だ？ 俺は無敵なのだぞ。そんなもので俺に傷一つつけられるか」

「…………一対一の決闘を邪魔するのは、俺もどうかと思うけどねー。まあ、でもヴーヴァじゃ勝ち目無さそうだし。俺が出ようかと」

ヴーヴァに勝ち目が無い、と口にした瞬間、ロモロは笑い、ヴーヴァは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「…………ホディエー！ 俺は、それでもまだ戦える！」

「だろうなー。でも、俺が出た方がいいと思うよ。っていうか、ぶっちゃけ俺が確かめたい事があるから、代わってくれ」

「確かめたい事……………」

勿論、特殊技術の確認だ。ロモロの攻撃無効化の正体が、本当にウィーウエの予想通りのものなのか。それを確かめたい。その為に、ヴーヴァと相手を代わって欲しいのだ。

「俺は構わんぞ。土台、この俺に攻撃を与える事は不可能なのだ。俺は、無敵なのだから！」

凄まじい自信を浮かべるロモロ。此処まで自信を持つ理由も、何となく分かる。このアベリオン丘陵はレベル帯が低い。適正レベルが三〇以下なのだ。ウィーウエの予測通り〈物理無効化Ⅲ〉を持つのなら、確かに此処では無敵を誇るだろう。

ただし、それは。

「……魔法は無効化出来るのかい？　ロモロくん」

「――」

そのウィーウエの言葉に、ロモロは笑みを消した。〈物理無効化Ⅲ〉はあくまで、物理攻撃を無効化する特殊技術。当然、魔法攻撃は無効化出来ない。それは、別の特殊技術が必要になる。

「水精霊大鬼つてのは、射撃攻撃を何度か無効化する特殊技術があるけどさ。君のそれは、一定量以下の物理攻撃を無効化する特殊技術だ。違うかい？」

「……なるほど。その格好に、見た事もない種族からして旅人だな？　中々の博識ぶり。しかし、ここ最近で俺に攻撃を届けたのは魔現人の“炎雷”と獣身四足獣の“魔爪”のみ。貴様に、俺の防御を貫通出来るか？　見たところ、どう見ても魔法を使うようには見えんが」

ウィーウエの装備を見て、ロモロは笑う。それに、ウィーウエは頷いた。

「だろうね。俺、戦士系だし。でも、お前には勝てると思うよ」

「——なるほど。良し、いいだろう。かかってこい」

ウィーウエの挑発に、ロモロは乗った。ウィーウエは軽い足取りでロモロへ近寄っていく。そして、ヴーヴァの隣に來た時に、左手のガントレットを外してヴーヴァに渡した。

「お、おい!」

「持つといてー。今から確認するのに、それ邪魔だし」

ウィーウエはそう告げると、左手の装備を指輪だけにする。リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンに精神作用無効化の指輪……全ての指に様々な指輪が嵌められている。ただし、それだけだ。左手の装備が外れたために、素の攻撃力と防御力しか持たない。だが、それでいい。

ウィーウエは自分の左手を見た。黒と赤褐色の、硬い装甲の甲殻。指先は、爪なんて無いのに凶悪に尖っている。溜息が出そうだ。怖いはずなのに、全く違和感が無いその姿に。

「……本当に、泣けてくる」

ぽつりと呟いて、ウィーウエはロモロの目の前に立つ。ロモロは、小馬鹿にした様子

で指先をくいくい、と自身へ向けた。

「それじゃあ、遠慮なく」

なので、ウィーウエは容赦なく——この世間知らずの顔面に、拳をくれてやったのだった。

「ぐっばああああ!!」

一〇〇レベルの戦士であるウィーウエに顔面を殴られたロモロは、その場で耐えきれず衝撃で吹っ飛ぶ——が、両足が地から離れそうになった瞬間、ウィーウエは爪先を踏み抜いてやった。よって、吹き飛ぶ事無くロモロはその場に留まってしまった。ウィーウエの射程距離から、まったく出る事が出来ずに。

ばうん、と捻じれるような動きでその場へと倒れたロモロに、ウィーウエは踏んでやっていた爪先を放す。顔面——顎と鼻と頬の骨が完全に碎けたであろうロモロは、ひくひくと痙攣して「お……お……」と呻き声を上げている。ウィーウエはそんなロモロの様子を気にも留めず、右手の槍でぶすつとロモロの左手首を突き刺してやった。勿論、平然とそれは貫通してロモロの左手首が離れる。

「……良し! やっぱり、〈物理無効化〉系特殊技術だな! この反応は、〈物理耐性〉系じゃあないつと」

確かめたい事を確認し終えたウィーウエは、一人頷く。そして、背後で啞然としてい

るヴーヴァ達に振り返った。

「……で、コイツどうする？」

「え、あ、はい。……好きにすればよろしいんじゃない？」

急に敬語になったヴーヴァに、首を傾げた。そういえば、あの刀鎧蟲も急に敬語になったような気もする。しかし特に深く考える事はせずに、ウィーウエは槍先で口モロを突いてやった。

「おい、起きろ」

「はひ……はひ……、あ」

「駄目だこりゃ」

完全に伸びてしまっていて、起きる様子も無い。ウィーウエは気絶状態になった口モロを起こす事を諦めて、ヴーヴァ達に向き直った。ヴーヴァ達の身体がびくりと揺れる。

「それじゃ、ガントレット返して」

「あ、はい。どうぞ」

「ありがとう」

ヴーヴァにガントレットを返してもらい、ウィーウエは左手に再び装着する。

「で、ヴーヴァさん。マジにこいつどうしょつか？ その半人半獣くんに訊いてみる

？」

「いえ、貴方が勝ったんですから、好きにすればいいのでは？」

「え。でも俺、コイツじゃない」

腹は空くが、食べたくはない。

「勝者が敗者を好きにするのは、当然の事です」

「え……じゃあ、放置で」

面倒なので、その辺に放っておく事にした。そう言うと、ヴーヴァは「はあ……」と
気の抜けた声を出す。

「それで、これからどうする？」

「こ、これから？」

「うん。とりあえず、君らの目的は半分は達成した。二つ名とかは、まあ、うん。俺が
やつちやつたし、君にはまだ無理だったという事で、諦めるとして。これから君らどう
するの？」

ウィーウエの問いに、「ちよ、ちよっとお待ち下さい！」と慌てるヴーヴァは急いで他
の四体と、案内役だった半人半獣と内緒話を行う。ウィーウエの耳にも微かに声が届く
が、小声なので完璧には聞こえない。

数分ほどして、話し合いは終わったのかヴーヴァがおずおずとウィーウエへ訊ねる。

「あのー……ホディエーさんはどうするのでしょうか？」

「俺？ 俺はまあ、その辺適当にうろつくけど？ 後で、人間の作った城壁の方へ行く予定もあるけど」

「そうですか。……それじゃあ、俺達は元の場合へ帰ろうと思います」

「ふうん。なら、此処でお別れて事で」

「はい」

互いに、別れを告げてウィーウエは別行動を取る。後でヴーヴァ達が「なにあの蟲怖い！」と震えあがっている事なんて、まったく気づいていないウィーウエであった。

§ § §

アペリオン丘陵の西に広がる、当時凄まじく偏執的であった聖王国の首脳部が作り上げた巨大な城壁の要塞線。そこには、三つの大きな砦が存在する。それは一〇〇キロにも及ぶ長大な城壁に、たった三つだけ存在する門の防衛施設である。万が一、亜人達の侵入を許してしまった時の為に存在するそこは、現在気楽なものであった。

この城壁へ亜人達に向かってくる頻度は、一ヶ月に一、二度ほど。それも数十人規模の小ささだ。勿論、数十人規模であろうと身体能力に圧倒的に差があるので、人間に

とつては脅威なのであるが。それでも慣れというものは存在する。城壁の目の前、四〇メートル以上が開けた平地となつた事もあり奇襲というものが無くなって久しい。よつて、どうしても緊張というものが抜けてしまうのだ。

もつとも。——見張り役が働いていないというわけでは決して無いが。

「……これ以上近づくと、バレルかなー」

ウィーウエは平地となつている場所より、数十メートルほど離れた木々の間で、こつそりと城壁の様子を覗き見ていた。

ヴーヴァ達と別れたウィーウエは人間の領域に関わると決めた為に、空腹状態を紛らわすために深夜になる今の今までひたすら獲物を狩り腹に溜めていた。夜の間は通常の食欲に戻るが、夜が明けると食欲が再び増加する。だが食い溜めをしておくと、明日の朝すぐに空腹で悶え苦しむという事は無い。その為に、こつそり豚鬼オーグの牧場で育てられていた牛を二匹ほど盗んでしまったが。

（うーん。今のところ、俺の姿が見られている様子は無い、よな？ いきなり明かりが点いたりとか、慌てた様子も無さそうだし）

一キロほど離れた地点から、慎重に隠れるように距離を詰めたが気づかれた様子は無い。人間種……それも普通の人間に（ダークワイジョン 監視）のような、夜闇を見通す種族的特徴は無いので、この時間帯ならば必ずマジックアイテムが必要になる。アベリオン丘陵のレベ

ル帯では、おそらく人間の方もレベルをウィーウェほど上げる事は出来ないだろうから大丈夫だろうと思つたが、油断は禁物だ。

(けど、さすがにこれ以上は無理だろうな)

前提条件を無視してクラスを習得する者。あるいは全く別のシステムの特殊技術を行使する者。そういった、《ユグドラシル》の常識外の行動をする存在を無視出来ない。人間の中にも、間違いなくいるだろう。これ以上は、確実に露見すると思つた方がいい。(やっぱり、わざと強襲して魔法を使つてもらうのが一番いいかな?)

アペリオン丘陵の亜人種達と同程度のレベルの存在しかないのなら、ほぼ確実に全て無効化出来る。高レベルになるとダメージを多少削減する程度に収まるのだが、おそらく無効化するだろう。……そうだといいな、という希望的観測を持ちながら、ウィーウェはそわそわと城壁を盗み見る。

「えーい！ 男は度胸だよね！——良し！ いざ！」

気合いを入れ、覚悟を決める。ウィーウェは最後の抵抗で黒いローブを深く被り直し、姿がなるべく見えないうちにしながら木々から足を一步踏み出して——城壁へと近づいた。

城壁の見張りである、夜番の交代時間には鐘が鳴る。だが、その日夜番であつたヨー

ンの耳に届いた鐘の音はいつまでも打ち鳴らされ、この日「亜人の影がある」事が知らされた。

（今日も来たか）

ヨーンは丘陵地帯に視線を向け、夜闇を見通す。訓練をしているので、普通の兵士ならば見通せない夜闇も、ヨーンならば不可能ではない。

ヨーンがじつと見つめると、そこには黒いロープを深く被っている亜人が悠々と歩き近づいて来ていた。亜人の種族は、ロープで隠れているために分からない。ただ、槍を片手に、手足が妙に金属質なので鎧を装着しているかあるいは、蟲系種族であるために装甲を持っているのだろう。

（……一匹だけか？ しかも、平然と歩いて近づくとは……異名持ちか？）

亜人種族の中には王と呼ばれ、異名を持つ者達が何体か存在する。例えば「魔爪」。例えば「炎雷」。「濃霧」。それに——「断絶」。

（……蟲系ならば「断絶」の可能性もあるが……？）

だが、「断絶」の種族は刀鎧蟲。つまり徒手空拳だ。奴は自らの両腕に存在する手甲の刃で戦う。よって、槍なんて武器を持つはずが無い。ヨーン達も知らない相手なのかも知れない。

しかし、そんな事は関係が無いだろう。ヨーンの部下は優れた射撃兵だけの部隊。城

壁に辿り着く前に、すぐに射殺してしまうに違いない。それだけ、優秀な弓兵なのだ。そして事実、ヨーンの命令を待つまでもなく。部下達は決まり通りに、悠々と歩いて近づいてくる亜人へ向けて、三〇〇メートルの時点で強烈な炎の矢の一撃をお見舞いした。

炎の矢は赤の軌跡を描きながら、亜人へと一直線に向かう。射手は副官だろう。強烈な一撃だ。そして、ヨーンはそれが見事眉間を貫く一撃だと悟る。即ち、相手を即死させる素晴らしい一撃だ。あの距離でヘッドショットを完遂させるのは並みの技量ではない。

例え頭部に兜を装備していたり、装甲があろうとも炎の魔法が属性ダメージを与える。無傷では済まないだろう。

だからこそ——それは、目を疑う光景だった。

「——え？」

まるで見えざる盾でも持つかのように、魔法の矢は亜人に当たる寸前で弾かれた。亜人は足を止めず、平然と歩いて城壁へと近づいて来る。

(……飛び道具に対する、防御能力?)

そこで、ヨーンは気づいた。真っ黒な、夜闇に紛れるローブを深く被っているために気づき難かったが……その亜人が身に着けている全てが、信じられないほどの技巧で編

まれたマジックアイテムだと。

つまり——もはや言うまでもなく、明らかに。ただの亜人では無い。

「——ッ!!」

ぞわり、と身の毛がよだち、ヨーンは背筋から来る震えを止められなかった。弾かれたように走り持ち場に付き——間に合ったのは相手が悠々と歩いてくれているおかげだろう——、持ち場にいた部下達に声をかける。

「お前達！ アレを近寄らせるな！ 撃ち抜くぞ！」

「はい！」

ヨーンは部下にそう叫ぶと、自らも矢筈を弓の弦にかける。そして、即座に射撃。金属鎧を装備した戦士であろうと、吹っ飛ぶほどの物理威力を持つ一撃だ。だが。

「——効いてない！」

亜人の身体に触れる前に、やはり弾かれた。他の部下達が放った炎以外の魔法の矢も同様だ。全て、触れる前に弾かれる。一部のモンスターは特定の攻撃手段で無いと無効化する能力を持っている事があるが、おそらくそれだろう。あの亜人は、特定の攻撃以外無効化するに違いない。でなければ、三〇ほどの様々な種類の矢を無効化する事は出来ないだろう。

（となれば——矢の材質か!? 一部のモンスターは銀製であつたり、鉄製でないと通用

しないと聞くが——)

次々と矢を放つが、亜人は防御さえしない。ただ悠々と歩き、次第に城壁との距離を詰める。その間ヨーン含めた部下達、狙撃兵は次々と矢を放つがやはり通用しない。

他の場所では皆に備えられている大弓を放つたようだが……やはりと言うべきか。亜人は防ぎもせずに大弓の矢は弾かれた。

自分達の、あらゆる攻撃は通用しない。もはや、これは飛び道具に対して完全耐性を持つっていると認識するしか無いだろう。……つまり、今の自分達は役立たずであると。

「くそッ！」

部下の一人が叫ぶが、ヨーンだって同じ気持ちだ。飛び道具に対する完全耐性を持つているのなら、もはや自分達に出来る事は何も無い。あの亜人以外に、何者かが近づいているか見張りをするくらいである。

となれば、近づかれる前に出来る事と言えば——マジック・キャスター純粋な魔法による、強烈な一撃のみである。

この要塞線には、第三位階魔法を行使出来る魔力系魔法詠唱者が三人いる。三人も、だ。第三位階の信仰系魔法の使い手ならもつといるのだが、此処は宗教の色濃い聖王国。魔力系魔法の使い手は驚くほど少ない。まして、第三位階にも到達しているとすれば尚更だ。

「飛行」の魔法でその魔術師達が空を飛び、亜人の上空を陣取る。亜人はそれを見て上を向いた。ずり、と少し片足を引いて警戒の様子を見せる。その亜人へ向けて——
フレイヤーボール
 「火球」と「雷撃」二発が撃ち込まれた。

そして当然。

「魔法まで無効化しただど?!」

魔法は着弾する前に、掻き消えた。まるで元々存在していなかったかのような、消失。飛び道具を無効化するモンスターもいれば、当然魔法を一部無効化する能力を持つモンスターもいる。だが、この二つの能力を同時に所持しているようなモンスターは存在しない。どちらかは、身に着けているマジックアイテムの効果だろう。しかし——

あらゆる飛び道具を完全に無効化するマジックアイテム。あるいは、第三位階魔法さえ完全に無効化するマジックアイテム。そんな物が、この世に存在するのだろうか——。

「……………ッ!」

誰もが、あまりに理解の及ばない事象を前に絶句する。魔法は通用せず、飛び道具も効かない。となれば、残された手段は接近戦のみであるが……手に持っている禍々しい気配の槍が、相手が凄腕の槍兵である事を予感させる。

アベリオン丘陵で高価なマジックアイテムに身を包むのは、確実に強者だ。人間社会

のように、金や権力に物を言わせて実力も無いのに高価なマジックアイテムを身に着ける行為は、亜人達の間では許されない。

故に。——高価なマジックアイテムで全身を武装するあの亜人は、間違いなくアベリオン丘陵の強者に違いなかった。

現在、この要塞線に存在する最強の戦士はヨーンと同じく、九色の持ち主。その女戦士が、この空気をどうにかするべく飛び出して来る。

女戦士は全速力で走る。おそらく、武技の〈能力向上〉に〈疾風加速〉も使っているのだろう。驚くほどの速度で女戦士は亜人との距離を詰めていく。

亜人は、立ち止まって女戦士を待っていた。槍を片手に、まるで誰かと待ち合わせをするかのように悠然と。

「——ッ！ 〈限界突破〉、〈流水加速〉、〈剛撃〉」

幾つもの武技を同時に使用。女戦士は、亜人へ向けてそのバトルアックスを振り上げた。

「死イ——ねえええええ！」

そして、振り下ろされる。幾つもの武技を同時に使用した、最強の一撃。彼の“魔爪”でさえ深手を負わせた事のあるその最強の一撃は。

「……………あれ？」

槍を持たない、左手で軽々と——それも親指と人差し指を使って豆粒を摘むように——バトルアックスの刃を掴んで止められていた。

「……え？」

女戦士は、そんな有り得ない現象を前に呆然としている。亜人は、マジマジと目の前に立つ女戦士と摘んだバトルアックスを交互に見て……指を放した。途端、女戦士は解放されてたたらを踏む。そして、顔色を真っ青にして亜人を見た。

「……………」

亜人は、女戦士、魔法詠唱者達、マジンク・キヤスター、ヨーン達の方角を順番に見回すと、そのまま踵を返して再び歩き去って行く。

悠々と。先程と同じ調子で。何を気にかける様子もなく。何者も、自分を傷つける事は出来ない^{と知っているかの様に}。

「ヅ、アアアアアアアッ!!」

その無防備な背中に、女戦士が再び攻撃。しかし、亜人はまるで背中に目でもついてるかの様に、一つの金属音を響かせて無傷だった。

亜人がやったのは、言葉にすれば簡単なものだ。片手に持っていた槍を、少し傾けて女戦士の攻撃を槍の柄で防いだ。それだけである。——九色の一人である女戦士の攻撃を、見もせず^{に防いだという事を除けばだが}。

「
女戦士はそれ以上何も出来ず、呆然と去って行く亜人の姿を見送る。いや、誰もが何も出来ない。」

弓矢などの飛び道具も通用せず、第三位階魔法さえ無効化し、そして九色の一人である女戦士の攻撃さえ子供の児戯に等しく防ぐ凄まじい技量。

そんな相手に、一体何が出来ると言うのか。ただ、去って行くのを呆然と見送る事しか出来ないだろう。

だから、ヨーン・バラハもまた呆然と見送った。その、おそらくは……アベリオン丘陵最強の亜人の後ろ姿を。その背中が、見えなくなる瞬間まで。何も出来ずに。

「あー！ ビックリした！」

人間の城壁から、三キロ以上離れた場所へ移動したウィーウエはそう叫び、ごろりと草原に転がる。

（未知の攻撃って怖っ！ 〈ユグドラシル〉の特殊技術でも防げるみたいだけど、それでも怖かった！ 今度はどう、そういう実験は止めよう！）

弓矢による攻撃も、魔法による攻撃も全て防いだが最後の、あの目つきの凄まじく悪い女戦士の攻撃だけは、内心でかなり震えていた。女戦士の速度は、ウィーウエの動体

視力と身体能力の前では欠伸が出る遅さであったが、しかしだからこそ未知の攻撃を待ち構えるのに勇気が必要になる。邪魔が出来る攻撃を、わざと邪魔せずに未知の攻撃を貰おうと言うのだから。

もつとも、その甲斐有って未知のシステムによる攻撃はウィーウエのヘUGドラシルシステムによる特殊技術で何の問題も無く防げるのだと判明したが。

「……うーん」

しかし、今回人間の技術を垣間見た事で分かった事がある。まず一つは、此処はウィーウエにとつては適正レベルが低過ぎる事だ。だが、これは別に困っていない。周辺モンスターや人間のレベルが低いという事は、つまりウィーウエは死ぬ心配をしなくて済む。即時復活する為のマジックアイテムは持っているが、それでも数は少ない。死んだ時のペナルティが無く即時復活するマジックアイテムは一つしか無く、他はデスペナが緩和されない下位のマジックアイテムが幾つか。回復アイテムのポーションも持つてはいるが、ログアウト寸前まで高難易度ダンジョンに挑戦していた為に数が心許無い。巻物スクロールに至つては自分が使えないのでゼロだ。

そして、蘇生ワンド・オブ・リザレクションの短杖などの他者が対象の蘇生アイテムもまた、一つも持っていない。つまり、ウィーウエは即時復活のマジックアイテムを全て使い果たした時、死亡が確定する。

それを思えば、強力なモンスターなどが存在しないアペリオン丘陵は天国と云っている。隙だらけのウィーウェに追撃が無かった事から、あの人間の国にも高レベルの人間が存在しないというのも最高だ。

更に、〈ユグドラシル〉のシステムと全く別のシステムが高レベルで融合し、共存している事も判明した。〈流水加速〉やら〈剛撃〉などと言っていたが、そんな特殊技術は知らない。勿論、ウィーウェが全く知らないクラスの特種技術だという可能性もまだ捨てきれないが、おそらく別システムの能力だろう。特殊技術を使う寸前の初動が、ウィーウェとは全く違う気がする。

そして、その未知の攻撃により分かった事は……この世界は、言語が違うという事だ。今まで亜人にしか遭遇しなかったので全く気づいていなかったが、人間の口の動きからようやく、ウィーウェは彼らが別の言葉を喋っている事に気がついた。脳に届く時におそらく翻訳されて聞こえている。理由はさっぱり分からないが。

そして——魔法。これは完全に〈ユグドラシル〉のものを共通で行使していると思われるだろう。あの魔法詠唱者が使用したのは、間違いなく位階魔法だ。

だが、それは同時にある事実も赤裸々にする。

「……そつか。ギルド長、此処にはいないのか」

〈ユグドラシル〉の魔法は、亜人種も人間種も区別なく使用出来ている。プレイヤー

も、おそらく例外では無いだろう。ウィーウエは魔法を使えないが、特殊技術は問題なく使用出来るのだ。魔法も、問題無く使用出来るとみていいだろう。

つまり……モモンガから連絡が無いという事は、彼はこの世界にはいないのだろう。この異常事態になって、仲間に連絡を取らないなんて有り得ない。幾らモモンガが、サービス終了時の約束をすっぽかしてしまったので怒っているのだとしても、この異常事態で連絡を取らないなんてあるはずが無い。

だから……モモンガは、此処にはいないのだ。

「……………」

しかし、それでいい。こんなわけの分からない状態に、わざわざ巻き込まれる事も無いだろう。今頃、現実は大騒ぎのはずだ。ログアウト出来ないプレイヤーと、ネットから目覚めないユーザー。幾ら一般市民が相手でも、流石にこれは無視出来まい。必ず、現実で何らかのアクションがあるはずだ。

よって、ウィーウエのこれからの目標は、現実から救助が来るまで生き残る事。此処が一体何処で、どうしてこんな事になってしまったのかさっぱり分からないが、それでも何とかしていくしかない。

生きてさえいれば、きつとどうにでもなるだろうから。

「…………でもまあ、とりあえずはメシだな、メシ」

ウィーウエにとって最大の問題は、この食欲だ。ファゴサイトーシスなんてクラス習得しなければ良かったと、本当に今になって痛感する。これが無ければ、食事無効の指輪などをつけて対策が出来るのに。食事のペナルティはあるが、睡眠や疲労が無効になる為装備スロットが一つ空く——そんな便利さから、このクラスを習得したが本当に困ったものだ。

「朝になったら、また食べ物探さないとなー」

ウィーウエは草原に寝転がり、夜空の星を数えながら時間が経つのを待ち続けた。ウィーウエの悩みなど知らぬとばかりに、澄んだ夜空に浮かぶ星々はひたすらに輝き続けている。

幕間

ローブル聖王国は巨大な湾を持ち、「U」の字を横にしたような形の国土をしている。そして、北部と南部に分かれ、その両方の東側に要塞線とアベリオン丘陵が広がっていた。

そしてその北部には、信仰の中心である大神殿が存在し、更に政治の中心でもある首都ホバンスという場所がある。そこにある王城の会議室の一つで、城壁の砦から送られたある情報についての会議が紛糾していた。

もつとも、それについての彼の役目は既に終わっている。情報を届けたヨーンは、既に会議室から退出し再び城壁へ帰ろうとしていたところであった。

「やれやれ。少しばかり長引きそうだな」

本来ならばヨーンのような立場……兵士長が直接届けるような事は有り得ないのだが、今回は情報の中身が重要だった。ヨーンが話さなければ、とても信じてもらえないような内容であっただろう。ヨーンとて、この情報を届けたのが単なるいつもの伝令であったならば、信じられるか分からない。

会議がどれだけ長引くかは分からないが、このまま会議の内容が終わるのを待つわけにもいかない。一時的とはいえヨーンが抜けた穴は大きい。早く城壁に帰らないとまずいだろう。

だというのに。

「やあ、バラハ兵士長。このようなところで会うとは、奇遇だね」

「……イラーネク侯。お久しぶりです」

会議室を出て廊下を歩いていた時に、反対側から歩いて来たのは供を連れたヤプク・イラーネク侯爵だ。イラーネク侯はヨーンと同じ年でまだ四〇にもなっていないが、芸術面を評価されて九色の内の一色を戴いている。

「いつもは最前線だろう？ どうしたんだい？」

「緊急の伝令がありましたので、先程皆様にお伝えしたところです。イラーネク侯も普段は御自宅で絵を描いているとお聞きましたか？……？」

ヨーンが訊ねると、イラーネク侯はにんまりと笑みを作った。

「ああ！ 今日のはちよつとした気分転換さ！ まあ、君に会えたなら偶には外出も悪くない」

「はあ……」

ヨーンははつきり言って、イラーネク侯が苦手だ。何と言えはいいか悩むところだ

が、とにかく性癖が特殊なのである。彼女の親戚だという事は知っているが、それでもあまり長々と会話はしたくない。何故なら……

「ところであの子とはどうだい？ うまくいつてるかな？ 可愛いだろう？」

「ええ、はい。彼女は可愛いですよ」

「そうだろう！？」 あの目つきの悪さが、彼女のチャームポイントだと君も思うだろう？ だ
というのに、君以外は全く彼女の魅力が分からないのだから度し難い。それと言うのも
……」

これだ。この、自分の好きな物を話させると延々と話し続け、止まらないのがヨーン
には苦痛だった。

イラーネク侯が好きな物は絵画ともう一つ、*“赤”*を戴く戦士の彼女だ。この二つを
話させると、イラーネク侯の口は止まらない。延々とそれについて垂れ流し始める。

以前、同じ話をあまりに何度もする為に「その話はもう聞きましたよ」と告げた事があるのだが、そう言う「あの子（絵の事でもいいが）の話は何度聞いても飽きないだ
ろ？」と笑顔で告げられて再び延々と話し続けられた事がある。かと言って「聞いてま
せん」と言えば「じゃあもう一度」と言つて繰り返すのでもはや諦めるしかない。

それに、イラーネク侯の話がまったく聞きたくないかと言えば、そうでもないの
でヨーンとしては大人しく聞き続けるしかない。

「なあ、あの子は可愛いだらバラハ兵士長」

「はい。彼女は可愛いですよ、イラーネク侯。私にはもったいない女性です」

ヨーンがそう言うのと、イラーネク侯の顔に満面の笑みが浮かぶ。可愛がつている親戚の子が褒められて、ご満悦の表情だ。イラーネク侯は人懐っこい表情をしているので、こうして笑顔を浮かべると他人の心を朗らかにさせる。笑みを作ると悪鬼羅刹のような表情になる彼女とは、雲泥の差だ。彼女も可愛い人なのだが、目つきの悪さが全てを台無しにしてしまっている。二人を隣同士で並べたとしても、とても二人は親戚だと気づかないだろう。

（まあ、俺も趣味が悪いという事で）

彼女の照れた笑みが好きだが、客観的に見ればあれは間違はなく、血を見るのが大好きな、殺戮者のような笑みだろう。なので、ヨーンが最初の彼氏である。顔つきはともかく、内面は優しい人なのだが。

「……………」

彼女の事を頭に浮かべた時、思わずあの亜人の事も思い浮かぶ。彼女は九色の内の一色であるのに、自分の技が何一つ通用しなかった事にショックを受けていた。当然だろう。自分だって、立ち直れたかと言われればそうでもない。自分達の自慢の技が、兎戯に等しいと言外に告げられればショックも受ける。

……飛び道具も、魔法も、彼女の武技も通用しなかったとなると……おそらく、次はこの国最強の“白”の聖騎士が出陣する事になるだろう。それさえ通用しなかったならば、いよいよこの国も終わりというわけだ。

「……どうかしたかね？」

ヨーンが上の空になっている事に気がついたのだろう。そして、少し暗い表情を浮かべていた事も。イラーネク侯はヨーンの顔を心配そうに見ている。

ヨーンはイラーネク侯を心配させまいと、再び笑みを作った。彼は戦いには疎いので、あまり心配させたくはない。

「いえ、何でもありませんよ。それより、彼女の話をもつと聞かせて下さい」

ヨーンの言葉に、イラーネク侯は再び笑みを作って「勿論だとも！」と口を開いた。

§ § §

藍蛆^{ゼルン}という種族がいる。上半身は鰻に手が生えたような姿をしており、下半身は藍色の蛆のようにてらてらと光りぬめっている奇妙な種族だ。彼女達はアベリオン丘陵の北部にある、千の陥没穴がある場所で生活している。

基本的にメスしかおらず、オスは王族のみという奇妙な生態をしており、極稀にオス

がいなくなった場合にメスがオスに性別を変化させる事がある。そんな、生物学者が聞けば大変興味深い性転換を行う彼女達は、現在先細りしか感じられない未来に追い詰められていた。

「……なんという事でしようか」

部族を纏め上げる、参謀役のジーバーは思わず両手で顔を覆う。これからの自分達の部族の未来を思つて。

オスは一つの部族に一人か二人ほど。そんな生態の藍蛆は、部族のオスが何らかの理由で死亡した場合、僅かな可能性を手繰り寄せられない限り繁殖出来ずにその部族は絶滅する。

彼女の部族は今、そうしてオスがなくなつてしまひ段々と数を減らしてしまつていた。

藍蛆という種族は、それほど強い種族ではない。種族的に足があまり速くなく、装甲が柔らかいのだ。ただ、代わりに魔法の力はとても強い。精神系魔法というあまり一般的でない、特殊な魔法を使う。……勿論、近接戦闘が出来ないわけではなく、得意な者達だっているが。

そんな彼女達の王は、数年前にとつともないマジックアイテムで全身を武装した、恐ろしく強い人間達に殺された。

人間達は王と護衛数百名ほどを殺した後、別の場所へ足早に去ったようだがそれで藍蛆は詰みに近い。オスがいらない以上、数は増やせず朽ちていくしかないからだ。

そして、他の亜人種達からの侵略を受けた事などもあり——もはや、ジーバーベの部族には何の希望も残されていなかった。

他の部族の者達に入れてもらうか……いや、おそらく同じ藍蛆だとしても、あの人間達に同じように殺されている可能性が高いだろう。逆に、彼女達は運が良い方なのかも知れなかった。

総勢二五九名。この僅かな数が、ジーバーベの部族の生き残り。既に他の亜人種達に追われて、一〇〇名が命を落としている。

「なんとか……なんとかしなければ」

ジーバーベはぶつぶつと呟きながら、身体をずるずると這いずらせ穴の中へと潜っていった。

3章 追い詰められた者たち

この異常事態に巻き込まれて一週間——ウィーウエは、アペリオン丘陵の北部にある山岳地帯にまで足を延ばしていた。理由は簡単、食事の為である。

「ひーふーみー……ひとまず、これでいいか」

ウィーウエは山岳地帯で狩った獲物……山羊三頭を地面に並べて、山羊の腹を捌いて腸と胃を取り出す。取り出した後は、すぐにガツガツと食った。もはや、完全に鮮血滴る生の肉には慣れてしまった為に躊躇いは無い。

（今日で一週間か……。現実の方はどうなってるんだろ？ そろそろ、何らかのアクションがあってもいいと思うんだけどなー）

相変わらず、コンソールは出ないしGMコールも使用出来ない。時々槍の刃で指先を切って痛みがあるか確認した。腹も空く。味覚も触覚も、嫌な事に痛覚も——あらゆる五感に付随する感触は万全だ。現実と、何ら差は無い。

いよいよをもつて……此処が異世界だとかいう、わけの分からない世界である可能性が濃厚になって来た。問題は、何故か「ユグドラシル」のシステムが通用している事だ

ろう。これだけが、どうにも一番理解出来ない。自分が元の人間の姿だとか、ヘUGドラシルのシステムが一切通用しないだったりと、それならもう少し真面目に異世界かどうか検証出来るのだが。この覚えのあるシステムがひたすら、異世界の可能性を否定してくる。

（ゲームが異世界で本物になるとか、有り得るのかなー？）

これが首を傾げざるを得ない為に、ウィーウエはどうにも複雑な心境だ。

もつとも、どんな状況にせよやる事は決まっている。ウィーウエは、ただひたすら生き残ろうとすればいいのだ。今を生きていれば、いつかは状況も改善するだろう。

「――良し！ 腹ごしらえも済んだし、また探索に戻るかな」

全てを胃に収めたウィーウエは立ち上がり、再び山岳地帯を歩き回る。此処は山羊人などの生息地帯のようで、彼らが岩壁を登っている姿をよく見かけた。あの巨体が二本の足で山岳地帯の岩壁を駆け上がる姿は、中々にシユールだ。……今のウィーウエの身体能力なら、きつと同じ事が出来るだろうとは思うが。

しかしこの一週間……その内二日は獣身四足獣達と行動を共にしたが、何かピンとくる発見は何も無かった。目新しい技術などは確かに存在したが、特に何か元の世界に帰る方法に連なる発見は無い。運営からの接触も皆無だ。これは、長期戦を見越さなければならぬかも知れない。

だが、この異常事態が長丁場になるとすると——元の、現実の自分の身体は、果たしてどうなっているのだろうか。生命維持の為に専用の施設が用意されているのだろうか。だが、ウィーウエは無職になっている。貯金をはたいても払える気はしない。おそらく、借金をしても払える値段では無いはずだ。国や企業が出してくれるとは、とても思えない。そんな甘い連中では無い。

それを思えば不安が鎌首をもたげるが、何か出来るわけでもない。意識だけが暴走して、数時間が数日に感じられるようになってしまっていると希望的観測を抱くしか無いだろう。この世界の時間と現実の時間がリンクしていた場合は、その時はその時だと思っしか無い。

ウィーウエは首を軽く振って不安を追い出すと、すぐにその事は忘れて再び山岳地帯を見回した。山岳地帯を見回る以上、念の為に〈飛行〉^{フライ}の魔法が込められたネックレスを装備している。魔法の効果が込められたアイテム——^{マジック・キヤスター}巻物や短杖などは、原則的に魔法職……それもその魔法を使用出来る系統の魔法詠唱者しか使用出来ないものなのだが、中にはそれを誤魔化す事が可能な職業や、そもそも使用者制限の無いアイテムも存在する。この〈飛行〉^{フライ}の魔法が込められたネックレスなども、使用者制限の無いアイテムだ。

高所では必ず、こういった落下対策のアイテムが必要になる。落下ダメージなどは馬

鹿にならない威力を誇るので、中には魔法職のプレイヤーであろうとこういった対策アイテムを装備している事があった。

ウィーウエは山岳地帯の山の一つである、その頂上から地上を見渡した。米粒のように、様々な亜人種や動物達が動いている。だが、気になるものは何も無い。プレイヤーにしては弱過ぎるし、運営が絡んでいるようなキャラクターにも見えない。

あれは、今まで遭遇した亜人種達と同じ、ただの現地民だろう。

（山岳地帯にも新しい発見は無さそうだし……別の場所へ移動するかな。人間の国は無理だろうけど、大森林の方へ移動するのもいいかもしれない）

アベリオン丘陵の、人間の国とは反対方向へ向かうと大森林が広がっている。どれだけ広いかは知らないが、森の中なら遭遇するモンスターはがらりと変動するだろう。この丘陵での経験上、誰も彼も知的生命体であり言葉が通じるのですぐに戦闘になる事も無いだろうし、もし戦闘になって勝てない強さであったなら、アイテムでも使って逃げればいい。

……それに。もしかすると、ウィーウエのように困っているプレイヤーがいるかもしれない。あちらに足を延ばしてみるのも一興だろう。このフィールドが、どれだけ広いかは分からないが。

ウィーウエは決意すると、山岳地帯を駆け下りた。

山岳地帯を下りて再び平野に出たウィーウエは、近くを通りかかった刀鎧蟲達の集団に手を振られた。首を傾げていると、彼らはウィーウエに向かって来る。

「お久しぶりです、ホディエー殿」

「えーつと、どちら様？」

ウィーウエが困惑して訊ねると、刀鎧蟲のリーダーらしき存在は名乗った。

「以前、貴方に助けていただいたプフ族のクレーンプットです」

「ああ！ あの時の！」

流石に名前はまだ忘れていない。この丘陵について色々教えてくれた、最初に遭遇した知的生命体の亜人種達だ。名前は忘れていないのだが……流石に、顔の違いが判別出来るほどでは無かった。

本人達も種族の違いで判別出来ないのは慣れっこなのか、ウィーウエの薄情さを特に気にした様子は無い。

「また大所帯で移動しているねー。どうしたの？」

「それなのですが……もし良ければ、私共の頼みを引き受けて下さいませんか？」

「ん？」

クレーンプットは、口を開いてウィーウエに語る。

彼らは、以前の縄張りを捨てて大移動の最中らしい。それは人蜘蛛達の襲撃に遭ったからではなく、もっと切実な理由を耳に挟んだからだ。

以前から、定期的にこの丘陵地帯には凄まじい装備をした人間達が訪れ、二つ名付きの亜人種達を殺して回っている事があるのだとか。彼らは皆二つ名付きの亜人と互角に戦える強さであるらしく、一対一ならともかく複数人で襲撃されると撃破されるしかない。亜人は、元々同じ部族同士ならともかく群れたりしないからだ。

そういった事があるので、襲撃に来る人間達に合わせてクレーンプットは定期的に縄張りを移動しているのだと言う。

「間引きってやつかー。大変だねー」

「ええ。その所為か、魔現人の『炎雷』などはよく縄張りを移動するようです。我々も、それに倣って移動しようかと」

「ふーん」

魔現人と中々遭遇しなかったのは、そういう理由であったのか。魔現人が定期的に縄張り移動をしているとなると、確かに遭遇する確率は減るだろう。道理で走り回っても、見つけれないはずである。

「それで、君らは移動の真つ最中なわけだ」

「そうです。それで……出来れば、その間の護衛を頼まれてもらえませんか？」

「護衛？」

クレインプットが言うには、目的の場所へ向かうにはある二つ名持ちの縄張りを通らなくてはならないらしい。遭遇する確率は限りなく低いのだが、万が一遭遇した場合は全滅を覚悟しなくてはならないのだとか。

それを聞いたウィーウエは、二つ返事で了承した。

「いいよー」

「ありがとうございます。しかし、何分払える対価が少ないのですが……」

「あー、今回はいいよ。無料で受け付けてあげるよー」

一応、この世界で少し関わった存在だ。このまま寝覚めの悪い事態になったら、ちよつと気にしてしまう。この丘陵の平均的な強さも分かってきた事であるし、別に無料で引き受けても構わないだろう。正直に言って、ウィーウエはあまり対価は気にしない方だ。メリットやデメリットは気にせず、自分が満足出来るかどうかが重要なのである。そうでなければ、ヘUGドラシルのようなDMMO—RPGをソロプレイで長年活動していない。

その為、今回は気軽に引き受けた。ギルドメンバーのモモンガやぶにつと萌えなどは、ウィーウエのこういった行動には少し困った顔をする。しかし、たち・みーはこういう時にはウィーウエの味方だ。むしろ、ウィーウエが何かする前にたち・みーの

方が率先して引き受けて、ウルベルト・アレイン・オールドに嫌味を言われる事の方が多い。

ウィーウエの二つ返事にクレーンプットは礼を言い、ウィーウエはクレーンプット達のプフ族と行動を共にして約三日ほどかけてアベリオン丘陵を進んだ。目的地はこの北部にある陥没穴付近の森であるらしい。

北部に存在する陥没穴の数はおよそ一〇〇〇ほど。そこに、藍蛆と呼ばれる種族が基本的に生活しているらしいが、ウィーウエはその話を聞いて首を傾げた。

藍蛆……確か、藍蛆系はヘUGドラシルでは異形種だったはずだが。此処でも、種族にちよつとした違いが出て来てしまっている。気をつけなければ。

そんな話を聞きながら、件の縄張りも無事に通り過ぎて、クレーンプット達は目的地の小さな森へ到着した。ウィーウエの仕事は此処で終わりだ。この地の縄張りを確保するのは、ウィーウエではなく彼ら自身の仕事である。彼ら自身で、それは確保しなければならぬ。

「ありがとうございます、ホディエー殿。もし、我々に何かご用がありましたら、またいつでもお訪ね下さい」

「気にしなくていいよ。まあ、また何かあったら此処に訪ねに行くから。お達者でー」
ウィーウエは彼らに手を振って別れを告げ、再び旅に戻る。ゆつくりと北部の山岳地

帯から離れたが、特に変わった出来事は起きない。もはや、新鮮味は何も感じられなかった。

（やつぱりあの大森林に行つてみるのが無難だなー。アイテムですぐにでもエリア移動出来るようにしておいて、あの大森林を少しずつ探索してみるか）

その前に、まずは情報収集だ。クレーンプット達はあの大森林の事については、詳しく知らないらしく特に情報が出てこなかった。一番情報収集に適しているのは人間の国であろうが、さすがに堂々と異形種の姿で人間の国に入る気にはならない。

つまり、あの大森林の近くに生息しているモンスター……亜人種から、話を聞くしかないだろう。何だつたら、まずはこの森の付近にある陥没穴の藍蛆達に話を聞いてみるのがいいかも知れない。亜人種だという話だが、彼らは面白い種族的弱点を持っているので、その所為で亜人種と勘違いされているだけなのかも知れないからだ。実際は、寿命が無い異形種の可能性が高い。異形種ならば、その寿命の長さから色々な事を知っていそうだ。

（大森林の前に、藍蛆達を探してみよう）

ウィーウエは陥没穴を目指して野を駆けた。

S
S
S

シンクホール

陥没穴とは、何らかの理由で地面が陥没し、地表に円形の大規模な穴が開く現象を言う。現実の世界でも酸性雨の影響で元々自然があつた場所に、幾つも陥没穴が開いてしまい巨大な空洞しか無くなった。地盤に出来る関係上、更なる雨により時間経過で刻々と規模が大きくなっていくので、非常に困つた事態になっている。

ウィーウエの知識としてある陥没穴は、ブルー・プラネットよりそう教わつていたものだけだ。工事現場で地盤沈下が進み崩落し、陥没穴と化した場所を見た事は無い。

「おー……」

なので、実際に一〇〇〇もの数で存在する巨大な陥没穴を見たウィーウエは驚嘆した。現実では三〇〇〇以上の陥没穴が出来ている場所もあるというが、中々に圧巻である。穴の縁まで近づき、じっと底を覗いてみるが暗闇が広がつていて底がよく見えない場所が幾つもある。深さ一〇〇メートル以上だろう。完全に崖だ。

ヴァンパイア・バット

ウィーウエがまた別の陥没穴を覗くと、ぶわりと何体もの吸血蝙蝠が陥没穴から飛び立った。それはそのまま夜の空へと吸い込まれていく。おそらく、食事の時間なのだろう。彼らはウィーウエを無視して、丘陵地帯に広がる獲物を目指して飛び立った。

その吸血蝙蝠の群れを見送つて、ウィーウエは適当に選んだ陥没穴へ飛び込む。勿論、〈飛行〉^{フライ}の魔法が込められたネックレスは装備してだ。どれだけ深いか分からないの

で、注意しながら進むしかない。ウィーウエは自由落下しながら、周囲を目まぐるしく観察する。勿論、着地の事は絶対に忘れないが。

陥没穴には横穴が幾つも開いており、おそらく元々は地中系モンスターの通り道であつた事が窺えた。巨大な縦穴が出来てしまつて、既にその通り道は捨ててしまつてい

るだろう。

ウィーウエは地面に近づいて来た事が分かると、ネックレスの力を発動させる。ふわりと身体が宙を飛び、地面にゆつくりと着地した。地面は完全に土で出来ており、ざらざらとしている。光の届かない闇を見通すと、横壁に幾つか穴が開いていて何かが住んでいる事が分かる。

(とりあえず、不可視化しておくかー)

ウィーウエは装備を切り替えて、神器級アイテムであるフード付きローブから、それより少し劣る伝説級アイテムの似たデザインのローブを装備する。これはヘアインズ・ウール・ゴウンのギルドに参加前の主武装だつた装備だ。ソロプレイで最も重要なのはダンジョンで雑魚モンスター相手にどこまでリソースの消費を軽減出来るかなので、雑魚モンスターとの戦闘を避ける為に隠密・潜伏に特化した能力を持っている。

ウィーウエは不可視化の効果を発動させると、何者かが通り道にしているだろう横穴へ進んでいった。

横穴へ進んだウィーウエは、注意深く周囲を観察しながら道を進んでいく。時折土壁を見ながら、この道を生んだ存在がモグラのように手足で地面を掘り進んだのか、スコップなどの文明の利器で掘り進んだのか考える。しかし、実際にトンネルを掘った事があるような土木作業員では無いので、ウィーウエには判断がつかない。体格的にはウィーウエが通れるような横穴なので、二足歩行生物のような、上半身が縦になっている生物の気がするが……モンスターの中にはウィーウエの体格を平然と上回る蚯蚓の姿のモンスターもいるので、そうと決まったわけでもない。

ただ、仮にそのような大型モンスターが存在するのなら、藍蛆のような種族が陥没穴で生きていけるとは思えないので、多分藍蛆達が掘った横穴だと思うのだが。

ウィーウエは不可視化の効果が切れて姿を現さないように、気をつけながら道を進んでいく。しばらく進んでいくと、広間のように大きく開いた場所へ出た。上を見上げると、小さな白い穴がある。おそらく、別の陥没穴に出たのだろう。

（別の陥没穴か……時間的に見ても、そろそろ一度地上に帰らないとまずいかも）

主に、腹の具合が。食欲増大のペナルティがそろそろ襲ってくる時間だ。何かモンスターに遭遇する事も無かったので、地上に戻って食事をしてまた訪れるべきかも知れない。

ウィーウエがそう考えていると、奥から微かな話し声が聞こえた。ウィーウエは声の

聞こえない横穴へ身を滑らせ、不可視化が解けないように効果の残り時間を考えながら身を隠す。数分もしない内に、奇妙な客人が二人ほど現れた。

その二人は同じような、上半身にはぬるつとした長細い魚類に手が生え、下半身は藍色の蛆虫のようにぬらぬらとした生き物の姿をしている。ウィーウエの記憶が確かなら、あれが藍蛆という異形種のメスの姿のはずだ。オスは強制的に上位種族のロードになるので、また違う姿をしている。

ウィーウエは二人の会話にこつそりと聞き耳を立てた。

「……此処まで離れば聞こえないはずです。現在の同卵達の数、どの程度になっていますか？」

「ジーバーベ殿……残念ながら、更に数を減らしております」

二人の藍蛆は、暗い雰囲気会話をしている。

「そうですか。……やはり、あの人間達に王と側近の者達を全て討ち取られたのが痛いですね」

ジーバーベと呼ばれた藍蛆の方が、両手で顔を覆った。

「なんという事でしよう……。このままでは、我らは一週間と経たず全滅します。王達さえ御無事であつたなら、あの巨大なワームとて追い払えたでしょうに」

「ジーバーベ殿、やはり、あの奇妙な巨大ワームには我らでは勝てませんか」

「不可能です。あの巨体をどうにかするには、高位階の魔法の力が必要でしょう。ですが、今の生き残りの同卵達にはそこまでの高位階魔法の使い手はありません。武器が通らないほどの硬さを誇る以上、魔法の力は必要不可欠です。ですが……」

その高位階魔法を使える肝心の使い手が、もう存在しない。二人は、そう嘆いているようだった。

「いざとなれば、他の部族に入れてもらうのも手だと思っていましたが……あんなものがこの陥没穴に棲み付いた以上、他の部族であろうと滅びるのは時間の問題でしょう」

人間達に討伐された王族と精鋭。そして陥没穴に出現し始めた巨大なワーム。

（なんか、すつごくピンチっぽいなー）

困惑する。あまりに希望が存在せず、もはや絶滅の末路しか残されていないと嘆く二人の藍蛆にそして同情した。二人は、これから辛い未来を背負って夢も希望も無い現実を生きていかななくてはならないのだろう。

これが、アベリオン丘陵の生存競争。弱者は食物として強者に淘汰されるしかない、悲しい現実だ。

（うーん、どうするかなー？）

人間はおそらく、あの城壁の向こうにある国からやって来た人間達だと思うが、巨大なワームという存在が気になった。もし仮に、その巨大ワームが最近出現したばかりだ

と言うのなら、ウィーウェと同じく「ユグドラシル」からやって来た可能性がある。ただ――

（ワーム系種族はいたけど、プレイヤー種族としてはあんまり巨大生物は選べなかったはず）

「ユグドラシル」には人間種、亜人種、異形種と合わせて七〇〇種類にも及ぶ豊富な種族選択が存在した。ただし、それでもプレイヤーが自分のアバターとして選べる種族には制限があり、巨大生物の類は少ない。少なくとも竜系や全長が五メートルを超えるような種族は選べないはず。二人の会話を聞くに、巨大ワームは間違いなくプレイヤーに選べる種族ではなく、モンスターとして出現するタイプだろう。

（プレイヤーだけじゃなくて、やっぱりモンスターもいるのかな？）

実際、目の前の藍蛆や獣身四足獣、刀鎧蟲など彼らも「ユグドラシル」に存在した種族だ。しかし、刀鎧蟲のクレーンPUTTは知っていて然るべき世界樹の存在を知らなかった。そうなると、昔から住んでいるという他の種族達も元からこの世界観にいた種族になる。「ユグドラシル」とは異なるシステムやデータを使用している形跡があるのに、「ユグドラシル」にいるはずの生物という矛盾。

（わけが分からないな。あまり深く考えずに、とりあえず目の前の事から順に片付けた方がいいかな？）

ウィーウエはそう結論付けて、二人の藍蛆に声をかけた。既に腹は決まった。とりあえず、現地民とは比較的友好的な関係を築くに限る。今のところ、友好的な関係を築いているのは刀鎧蟲のクレーンプットに獸身四足獸のヴーヴァ達の部族だけで、この地域にはまだ友好的な関係を築けていない。彼女達に恩を売って、仲良くしておくべきだろう。

「あのだ、お二人さん」

ウィーウエが声をかけると、二人の藍蛆はびくんと身体を震わせて、周囲を見回した。自分達しかいないはずなのに、自分達以外の声……それも、同種族的に存在しないはずの男の低い声が聞こえたら驚くのも当たり前だろう。

声をかけた後、不可視化の効果を切って姿を現す。二人は、ウィーウエの姿に驚いたようだった。

「……失礼ですが、どちら様でしょうか？」

ジーバーベと呼ばれた方が、ウィーウエに警戒気味な声をかける。ウィーウエは気にせず、名乗った。

「俺の名前はウィーウエ・ホディエー。ちよつとした迷子の旅人さ。さっきの話を聞かせてもらったんだけど……」

ウィーウエの自己紹介に、ジーバーベは礼儀としてだろう、ウナギのような頭を下げ

た。

「私はジーバーベと申します。もしや、この陥没穴に落ちて道に迷われましたか？」

ジーバーベはそう言うのと、ウィーウエの姿を見て目を剥いた。この反応も覚えがある。ウィーウエの装備を見て、このアペリオン丘陵の者達は誰もが驚くのだ。気持ちに分かる。ウィーウエの装備は明らかに、このアペリオン丘陵の平均レベルに適していない。強過ぎるのだ。

しかし、装備を下位に変える気にはなれない。それでは、いざという時に装備変更の手間がかかる。同レベル帯であればその遅れは致命的だ。万が一がある以上、装備レベルは落とせない。

「いや、実は君達に訊きたい事があったから、訪ねて来たんだけど……何だか大変そうだね。——どうだろう？ 良ければ、俺に詳しい話をしてみないかい？ ちよつとしたモンスター退治なら、得意分野だし」

二人はウィーウエの言葉に、顔を見合わせる。続いて、ウィーウエの装備を上から下まで舐めるように見つめた。

「……その前に、一体我らに何の用だったのでしょうか？ 先に、そちらを話されては？」

「君らは、とても長生きだろう？ だから、ちよつとアペリオン丘陵の東にある大森林に

ついて少し訊きたかったんだ。もし良ければ、道案内ってやつもして欲しかった」

ウィーウエが素直に答えると、ジーバーベは考え込み、「少しお待ち下さい」と言ってもう一人を引っ張ってウィーウエの視界の隅に寄った。

二人は「……道案内……危険……ワーム……装備……」などと言い合っている。おそらく、ウィーウエに任せて良いか考えているのだろう。だが、藍蛆の現状は少し盗み聞きしただけでも、のつびきならない状況に思える。最終的には頷くだろう。

問題は、こちらに払える報酬の事に違いない。道案内だけで済むとは思えないのだろう。時折こちらに視線を送っては、うんうんと考え込んでいる。

だが、それでもこの現状を打破するきっかけが欲しかったのか。二人は話し合いを終えたと戻って来て、ウィーウエの言葉に頷いた。

「ホディエー殿、貴方がよろしいのなら是非とも、我々の話を聞いていただけませんか？」

「いいよー。さあ、遠慮なく話してみるといいさ」

ウィーウエの許可に礼を言い、二人は今現在、藍蛆が陥っているどうしようもない状況をウィーウエに語り聞かせた。

「三年ほど前の話なのですが、貴方と同じような高位のマジックアイテムで武装した人間達が、我々の王とその側近である精鋭達を襲撃しました」

「その話は刀鎧蟲達から最近聞いたよ。何でも、アベリオン丘陵の亜人達は定期的に間引きされてるんだって？」

ウィーウエがクレーンプットから聞いた話を伝えると、ジーバーベは頷く。

「そうです。我々も襲撃されるまで、それがどれほどの強者か知らなかったのですが、私共は奴らに為す術などありませんでした」

「だろうな。二つ名付きの亜人と互角かそれ以上の強さの集団に挑まれたら、君らの強さじゃどうしようも無い。嵐が過ぎるのを待ただけだろう」

「その通りです。私共の部族はそうして、王を亡くした為に繁殖が不可能になりました。今まで、何とか我らの中で性転換する者がいないか他の亜人達の襲撃を躲しながら、耐えていたのですが……」

「最近、状況が変わった——と？」

こくりと、ジーバーベは頷いた。

「おそらく、一ヶ月は経っていないと思います。この陥没穴に、巨大な魔物が現れたのです」

それは、暗紫色のキチン質——エビやカニのような甲殻類染みた鎧板のような、装甲に覆われた巨大なミミズに似た姿をしていたと言う。口は牙が生えており、藍蛆を呑み込んでしまうほどの巨大さなのどうか。

「その、恐ろしい巨大なワームがやって来て——陥没穴に横穴を幾つも開けながら、この地を巡回するようになりました。最初は、その通りを避けるようにして暮らしていたのですが、すぐに新しい横穴を掘って、別の陥没穴に避難して住んでいる我らや、他の者達も食べてしまうのです。逃げようにも、あの巨体から逃げる方法はなく——」

「……皆一緒に胃の中に、つてか。ふーん」

ウィーウエは特徴を考える。暗紫色の、巨大なワームモンスターと言え……一応、特徴だけは覚えがあるが。

「二人とも、実際に見た事は？」

「勿論、この目で見ました……あの巨体を。同卵達を飲み込み、噛み砕き、再び横穴へ消えていく恐ろしい姿を」

「なるほど」

名前は知らないが、しかし見た事はあると。なら、話は早い。ウィーウエはインベントリに手をつ込む。いきなり空中に手をつ込んだウィーウエに二人は驚いたようだが、そこからウィーウエが一冊の本を取り出すのを見て更に首を傾げた。

その本は分厚く、一〇〇〇ページ以上の厚さが見て取れる。この本は百科事典エンサイクロペディアという名前のアイテムで、ヘUGドラシルのゲーム開始時に必ず運営から与えられるアイテムなので、プレイヤーならば基本は所有しているアイテムだ。持ち主が破棄を選択しな

い限り、奪われる事も消失する事もない特徴を持つ。更に、このアイテムはプレイヤーが遭遇した事のあるモンスターの画像データが強制的に登録される。未知を既知に変える事を楽しんで欲しいという製作側の意図が体现されていると言えよう。

とは言っても、モンスターの細かなステータスなどが登録されるわけではなく、自分で発見した特徴などを書き込まなければならぬ。ウィーウエはソロプレイヤーだったので、これをとっても重宝していた。おそらく、ウィーウエはプレイヤーの中でも上位に入る、詳細な書き込みをしたプレイヤーだろう。

ペロロンチーノなどはウィーウエと違って自分の趣味満載の、面白い書き込みをしていたのでゲームを引退する際にほとんど書き込み内容を消してしまっていたが、ウィーウエは書き込み内容を消していなかったので十全な状態だ。

パラパラとページを捲り、目的の項目を探す。やがて目的の項目に辿り着いたウィーウエは、二人に見えるようにページを開いてそこに記載されているモンスターの画像データを見せた。

「それって、こんな奴だった？」

そのページに記載されているモンスターを見た二人は、ぶんぶんと頷く。

「そうです！ それです！ 間違いありません！ ……それにしても、かなり詳細な肖像画ですね。さぞかし名のある方の作品なのでしょう」

「いや、これはそういうアイテムだから、この本が勝手に外見と名前を登録してくれるんだよね。とは言っても、遭遇した事が無いと記載されないし、弱点とか種族的特徴が分かるわけじゃないから、自分で調べてみないといけないんだけど」

「そうなのですか！　ですが、それだけでもとてつもないマジックアイテムでは？」

どうやら、こういったマジックアイテムはアペリオン丘陵には存在しないようだ。確かに、モンスターに遭遇さえすれば自動書記してくれるマジックアイテムは、今の状況では貴重だろう。大事にしよう。

「それにしても……この書き込みは文字でしようか？」

ジーバーベは困惑気味に、ページにウィーウエがメモ書きしている文字を見つめている。そういえば、人間達を見て知った事だが、此処では言語が統一されていないのだった。ウィーウエが使う言語と、あの人間達が使う言語は全く別だ。ただ、翻訳だけがなされている。

「俺の故郷で使われてた言語なんだけど、知ってる？」

二人は首を横に振って否定した。やはり、日本語——ひらがなも、カタカナも、漢字も分からないようだ。ただ、数字は読めるらしい。数字は共通文字のようだ。

「しかし記載されているという事は、ホディエー殿はこの魔物に遭遇した事があるのですね」

「うん。君らの見間違いないかなければ、たぶんコイツだと思うよー。しかしコイツかー……うん、このアベリオン丘陵を旅した感想としては、そりゃ君らのレベル帯じゃ勝てないだろうね」

このモンスターは、ヘUGドラシルでなら五〇レベルが討伐する際の適正レベルになる。三〇レベルさえ滅多にいないようなこの適正レベル帯の低いアベリオン丘陵でなら、これは無双するだろう。

「れべる?」

また、二人が首を傾げたのでウィーウエも困惑する。やはり、強さの数え方も違うのだろうか。

「俺の故郷での、強さの表現方法だよー。この辺にはそういうの無いの?」

「はあ……。確か、人間共が難度と呼ばれるもので強さを表現していると聞いた事がありますが……我々には、そういった物差しのような表現方法は無いです」

「ふーん。難度、かー」

後で調べてみる必要があるかも知れない。ただ、やはりと言うべきだろう。データが妙に現実に適した表現方法になると、こういった数値が曖昧になってしまるのが非常に不便だ。画面に表示される名前を見て、レベルが予想出来た頃は親切だったなと思う。

「まあ、いいや。その辺は。……よし、コイツなら問題なく俺が討伐出来るモンスター

だ。巡回してるって事は、必ず決まった道を通ってるって事だよ。此処から、一番近い巡回路は何処になるの？」

「は、はい！ ぐう案内します！ どうぞ、ついて来て下さい」

二人の先導に従って、ウィーウェは歩を進める。多少の空腹ペナルティでも、あのモンスターが相手なら大丈夫だろう。完封出来る。ただ、問題は二つ。その一つは自分の精神力が空腹に耐えられるか否か、だ。まあ、最初の日と同じように頑張ってみよう。（それにしても……紫イモムシくんかー。どこから来たんだろ？）

「ユグドラシル」ではプレイヤーに紫イモムシと呼ばれ親しまれていた、地中に潜む昆虫モンスター。かなり巨大なモンスターで、確か全長は三〇メートルを超える事もある。更に、一口で人間サイズを丸呑みにしてしまう中々に面倒なモンスターだ。確かに、尾には強い毒攻撃の針が備わっていたはず。ノックバック攻撃や、クリティカルが入ると朦朧状態にされるので、本当に面倒臭い。しかも、倒しても滅多な事ではデータクリスタルを落としてくれないので、とっても美味しくないモンスターである。

ただ、知性が限りなく低いお馬鹿さんなモンスターなので、精神系魔法が物凄く効きやすい。なので、面白がって捕獲する魔獣使いや、精神操作する魔法詠唱者がよくいたものだ。

（でも、グレンベラ沼地にいるようなタイプじゃないっぽいから、良かったよー）

ギルド拠点の付近にあったグレンベラ沼地にいるタイプは、七四レベルのモンスターなのでとても強い。しかも発見されると群がってくる性質があるので複数体を同時に相手にする事を考慮しなくてはならない。

だが、今回二人が間違いないと言っているモンスターは、単独行動をする一般的なタイプだ。そう警戒する事も無いだろう。

(とりあえず、猛毒に対する完全耐性のアイテムは装備しているから、毒については万が一が起きても大丈夫。耐久値が高いけど、特殊技術も使えば二、三発で討伐出来るかな?)

問題は、やはり自分がいつもと同じ動きが出来るかどうか、だ。空腹もあるが、あんな巨大なモンスターが自分に向かって来ていると思うと、思わず身が竦んでしまうかもしれない。覚悟を決めて、立ち向かわなくては。

(死にはしないだろうし、落ち着こう、うん)

そう、レベル的にも、特殊技術的にも死ぬわけがない。ただ、攻撃が当たれば痛いだけだ。多少の痛みなら、きっと我慢出来る。だから問題は、やはり自分がいざという時に怯まないでいられるかどうかだろう。

ウィーウエは深呼吸する。そして、気合を入れた。

「——よし！ まあ、なるようになるだろう！」

「どうされました？」

ウィーウエが唐突に叫んだので、二人は困惑したようだ。ウィーウエはそれに「なんでもないよー」と告げて、二人の後を歩く。暗い、暗闇の道を。

§ § §

土と鉱石の入り混じった、湿気た空気が充満している道を二人に案内されて歩いたウィーウエは、横と縦の幅が自分よりも数十センチほど広くあるかという横穴に出た。ジーバーベはもう一人に向かって何事かを呟くと、もう一人は何処かへと去って行く。

「この道が、そろそろ巡回に来る時間の道です」

「ふーん」

周囲の土を触ってみる。ジーバーベも土を触り、頷いた。

「やはり、今日はまだ通っていないようです。我々がいれば、食事をする為に確実にやって来るでしょう」

「だろーねー。アイツ、結構な大喰らいだし……よし。じゃあ、此処で待ち構えるから君は端に寄っておいてよ」

ウィーウエは槍を構えると、特殊技術や装備の効果を幾つか発動させる。

（……しかし、ヘイト値とかはどういう扱いになるんだろ？ あんまり特殊技術を使い過ぎると、必ずこつちに意識が向かうようになってるのかな？ そりや、気になるだろうけど優先順位としては普通、回復役から潰すものだし……それでもヘイト値にひっぱられて防御役を狙うのかなー？ うーん）

ゲームの場合はヘイト管理というものがあり、あまり行動回数が多いとヘイト値が稼がれそのプレイヤーが狙われる。だが、ヘイト値を無視するならチーム戦の場合は最初に狙うのは回復役と相場が決まっている。でないと、イタチごっこになるしジリ貧になるからだ。

だが、ヘイト値が適用されると攻撃などは防御役などヘイト管理が上手い方に意識が引き摺られるはずだ。その辺りはどうなっているのだろう。

（あー……そういうえば、同士討ちはどうなってるんだろ？ ゲームなら、同パーティーにダメージは与えないけど……今の状況でも、適用されるのかなー？）

おそらく、適用されないだろうな、と思う。ウィーウエは〈絶望のオーラ〉などの、広範囲に影響を与える自分を中心としたオーラ系特殊技術は持っていない為安心だが、他はどうなのだろうか。非常に気になるものだ。

（まあ、これも後で検証するべきかな？ 傭兵モンスターでも召喚して確かめてみよう

かなー？)

一応、傭兵モンスターを召喚する為のアイテムは幾つも持っているし、その代償である金貨も持ち合わせている。金貨は自分達の持ち物の中でも真つ先に消費されるものだろうから、流石にギルドに残っていないと思っていたが、モモンガは手つかずで放置していたようなのだ。道中のモンスターが非アクティブ化しているとは知らなかった。で、自分が残していた所持金は全て持ち出した。

(いや、駄目だ。いざという時を考えると、金貨が尽きたら召喚出来なくなる傭兵モンスターは勿体ない)

このアベリオン丘陵では適正レベルが低い、隣の大森林などは適正レベルが急に上がって強敵ばかりになる可能性があった。その場合、傭兵モンスターはかなり重要な存在になる。実験の為だけに使えない。

(とりあえず、フレンドリィファイヤーには気をつけて戦うしか無いか。幸い、俺は近接職だからあのジーベベとかいうのを巻き込む心配は少ないし)

〈感知増幅〉で先手を取り易くし、〈上位全能力強化〉で全ての基本ステータスを上昇。更に〈上位幸運〉で幸運値も最大まで上げて不慮の事故の可能性を低下させる。魔法にも同じような名前の術があるが、ウィーウエは魔法が使えないので特殊技術による強化だ。これは魔法と違って、一日に使用出来る回数が決まっているので、あまり多用した

くないが、今回はこの丘陵地帯でもかなり強いモンスターが相手だ。用心に越した事は無い。

（ああ……ドキドキしてきた。〈狂戦士化^{バーサーク}〉でも持つてれば、戦闘中脳筋になれるのに

……いや、まあ。うん。脳筋になったらなったで、後で困る事になりそうだけど）

実際に命が掛かった戦いをするのは、流石に「無駄に前向き」と他人に言われるウィーウエでも不安を押し殺せない。精神操作系の魔法や特殊技術を無効化するアイテムは装備しているが、心の中から沸き起こる不安を消してはくれないらしい。無効にしてくれたらいいのに。

「……………来たな」

「……………!!」

そうして考え込んでいる内に、ウィーウエの知覚に引つかかるものがあつた。ウィーウエの呟きに、ジーバーベも反応し、震えながらウィーウエと共に横穴の闇の奥を見つめる。

「……………」

槍を握り込む。闇の奥から、何か異様なものが這い出て来ようとしている。ずるずると、巨体を引き摺る音が響いてきた。向こうも、もはやこちらに気がついている。それは獲物を呑み込もうと、こちらへ近づいて来て――

「——え？」

その前に、見え始めたその巨体が、自分が知るものと違う事に気がついた。

暗紫色の、キチン質の鎧板のような装甲に覆われた、口から牙を幾つも生やした巨大なワーム。それが藍蛆達が語る、この陥没穴に巢食った魔物であつたはずだ。

だが——

「——し、深紅色の装甲だつて……!？」

暗紫色じゃない。アレは、どう見ても紫ではなく赤だ。つまり、ウィーウエの想定していたモンスターではなく……適正レベルが八〇レベルの、上位モンスターである。

「……やつべー！」

ウィーウエは即座に、ジーバーベの元まで踵を返して走る。そして、そのままジーバーベを掴むと脇に抱え込み、横穴ではなく縦穴の陥没穴に戻ろうとする。ジーバーベは急な転換に意識が追いついていないのか、ウィーウエに抱えられた状態で困惑しているようだ。

「え？　え？」

しかし、今はジーバーベに構っている暇は無い。あの巨大なワームはウィーウエとジーバーベに向かって口を開き迫っている。

なので。

「ええい！ もう！ 〈清浄衝撃盾〉！」

ウィーウエの周囲に青白い衝撃波が発生し、巨大な深紅色のワームの頭部を吹き飛ばした。この特殊技術は攻撃を無効化し、相手に対して吹き飛ばし効果を發揮する。特殊技術で強化はしなかったし、狭い場所である為頭部を揺さぶるだけに留まったが、それでも強力な威力だっただろう。ちなみに、^{アライメント}属性が悪に傾いている場合は特殊技術名が〈不浄衝撃盾〉となり、衝撃波の色が違う。ウィーウエは極善ではないが、悪に傾いてもいないのでそこらは使えない。

急に頭部を揺さぶられた巨大ワームは意識が混濁したのか、動きが止まった。その間に、ウィーウエは横穴から陥没穴へ戻る。

すぐにジーバーベを放り出すと、ウィーウエは叫んだ。

「おま……！ アレ、暗紫色じゃないじゃん！ 深紅じゃん！」

ウィーウエの言葉に、ジーバーベは困惑したようだった。

「深紅？ あれは暗紫ではないのですか？」

「……あー、あー！ そういう事か！」

現実にいる生物でもよくある話だ。生物はそれぞれ、識別出来る色が決まっている。人間は赤・緑・青の三原色で、それを下地に細かな色を識別している。虫の場合はそれに透明——紫外線を追加した四原色だ。

だからこそ、中には色の見え方が根本的に違う種族というものが存在する。例えば、牛や馬はモノクロに近い色の見え方をしており、青と赤の違いが分からない。

おそらくは、藍蛆もそういった特殊な色の見え方をしているのだろう。おそらく、彼らは明るいところでなければ色を見分けられないのだ。その為、紫と赤の違いが分からずに、場所が暗い事もあつて暗紫色と勘違いしたのだろう。

「くっそー、そういう事かー。それなら仕方ないなー」

これでは、責めてもしようがない。今回は運が悪かったという事だろう。ウィーウエはフードの上から頭をがしがしと搔くと、すぐに横穴に向き直った。

「とりあえず、その場から動くなよー。動いたら、命の保障はしないからな？」

「は、はいー!」

ジーバーベは震えながら、その場に立ち竦む。ウィーウエは体勢を整え、先程の横穴を睨んだ。

（来るかなー? 来るだろうなー。だって、アイツ紫イモムシくんと同じくらい、頭悪いし）

一部の知性あるモンスターは、プレイヤーのレベルが高過ぎると逃走を選ぶ事がある。逃げられるかどうかは別にしてだが。しかし、あのモンスターにその手の知性は存在しないだろう。アレはただひたすらに、食欲に有機物を手当たり次第に喰い散らかす

のだ。

ずるずる。気配がする。やはり、ウィーウエを追って来たようだ。ウィーウエは槍を握り、別の特殊技術を使用する。

（使うのはクリティカル率アップに、敏捷値上昇系、あと貫通強化。……さつさと仕留める為に、大技も使うか）

完全な攻撃用特殊技術も使用する事を決めて、ウィーウエは待ち構えた。相手の敏捷値があまり高くないのが幸いである。幾つも特殊技術を発動する機会があるのだから。これがプレイヤー同士だったり、知性の高い上位モンスターだとかうはいかない。

「——来たあッ!!」

相手が横穴から飛び出してきたと同時に、全力で地を駆ける。ウィーウエの踏み込みで地面の土が捲り上がり、土煙が巻き起こるがそんなものを気にする存在は皆無だろう。ウィーウエも、目の前の相手もそんな事は気にも留めないし、ジーバーはそもそもこの攻防を認識出来るほどのレベルでは無い。

ウィーウエの主装備である神器級ゴッスアイテムである槍——コーギトー・エルゴ・スムは本来両手武器なのだが、筋力が高い場合は片手武器として扱える。そして、槍は本来刺突武器なのだが、これは斬撃武器としての能力も備えていた。

無属性のクリティカル率上昇とダメージ率だけに特化しているだけあって、相手の弱

点属性に刺さる事は無いのだがソロでダンジョンを攻略する事もあるウィーウエにとっては、どんな相手にも必ず最低限の効果がある武器は必需品だ。これはソロプレイヤーの時に、必死になってデータクリスタルを集めて何とか製作した神器級ゴッズアイテムである。

ギルドに所属するようになってからは、一緒にデータクリスタルを集めるから別の槍武器を作らないかと訊かれた事があったが、ウィーウエは他の装備品を神器級ゴッズアイテムに揃えるのを手伝って貰い、結局主武装は変えなかった。

何故なら——固定値とは、それだけで正義だからである。

「行くぞー！　ラインゴルトの黄金」　「オ！」

〈ユグドラシル〉には五大明王撃という連鎖攻撃の特殊攻撃技が存在するが、ウィーウエの使ったこれもその類で、一連の流れを〈ニーベルングの指輪〉と呼ぶ。元ネタは、ニーベルングンの歌と呼ばれる叙事詩であり、それをある有名なドイツ人が歌劇にしたらしいが。

これは属性アライメントと連動しており、属性アライメント——カルマ値が中立でないと使用出来ない。善に偏っていても、悪に偏っていても不発に終わる。

ただし、代わりにその効果は絶大だ。中立には最低限の固定ダメージしか与えられないが、善悪に大きく偏っているほどダメージ値が上昇する。そして、追加効果を発揮す

るのだ。

最初のヘラインの黄金^{ラインゴルト}には中立に対する固定ダメージ、善悪属性に対する追加ダメージと狂気の状態異常を与える効果がある。ウィーウエが習得している職業に属性看破があるので、見たら分かるがこのアベリオン丘陵の亜人達は、基本的に中立が多い。このモンスターも、知性が少ない所為か属性が中立だ。追加ダメージと効果は見込めないだろう。

だが、それでいい。正直、今となつてはヴーヴァ達のようにどんな特殊攻撃を使つて来るか分かつたものではないのだ。固定ダメージで削つた方が安全策と言える。

槍を片手で薙ぎ払うように振るい、もう片方の手で特殊技術を使つて行動を阻害しようとする。しかし――

「……うん？」

放たれた攻撃は、ウィーウエが思つた以上の効果を發揮した。端的に言う、追加で行動を行う必要が無くなった。……何故なら、その槍の一撃でモンスターの首は胴体から離れ地面に転がったからだ。

「おっと、と……」

肉体の勢いを殺せず、巨体が地面にざりざりと投げ出される。切断された首と胴体からは多量の血液が流れ落ち噴き出し、周囲を汚していく。ウィーウエは投げ出された巨

体を避け、バックステップでジーバーの横へ立った。

「……弱い。なんか、《ユグドラシル》のより弱くないか、コイツ」

このモンスターの耐久力なら、一撃くらいはもつだろうと思ったのだが、予想外に一撃で死んでしまった。

「なんか、紫イモムシくん程度の強さしか無かったなー」

首を傾げる。上位種のはずなのに、こんなに弱くていいのだろうか。確かに、ウィーウエは過激なほど特殊技術を使用して攻撃力も何もかも底上げしたが、それでも一撃で死ぬとは思わなかった。予想外にもほどがある。

（それにしても……あんまり、びびらなかつた俺）

戦う前はドキドキしていたのだが、いざ戦闘になった場合は全く気にならなかった。恐怖のきの字も無い。

（どういう事だろう?）

意味が分からないが、とりあえず今は放っておく案件だろう。それよりも、必要な事がある。

「……………」

死体に近づき、槍の刃先で、つんつんと突いてみる。しん、と反応は無い。死んだふりをするような知性も無いはずなのだが、念の為確かめた。だが、やはり死んでいるよ

うだ。まあ、生物である限り首は致命的な一撃……死んでもおかしくは無いが。

「うーん……何か、釈然としないものを感じるな」

首を傾げるが、仕方ない。これで全て終わったと見てとるべきだろう。ウィーウエはジーバーベに振り返った。

「退治完了したけど」

「……………」

ジーバーベはウィーウエを見つめ、頭部を切り離されたモンスターを見つめ、それを交互に繰り返す。そして、数瞬の後。

「う、うわあああああああ！」

ジーバーベは雄叫びにも聞こえる歓喜の声を上げて、ウィーウエにへばりついた。その唐突な行動に少し驚き、思わず槍を向けそうになるが押し留まる。ジーバーベはウィーウエに飛びつきへばりつくと、ウィーウエの顔を見上げて何度も同じ言葉を叫んだ。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！　我らは、これで何とか首の皮一枚繋がりました！　ああ、本当に感謝いたしますホデイエー殿！」

「あ、うん」

べたべたと張り付くジーバーベに、ウィーウエは困惑するが興奮しているのだろうと

思いそのままにする。ただ、ぬるぬるとした肌の感触が絶妙に気持ち悪い。この身体になつてから、初めての他者との接触が藍蛆相手とは、何だか無性に悲しくなつた。

しかし、そんなウィーウエの心境など知らぬジーバーベは、興奮した様子でウィーウエの手を取つた。

「さあ、どうぞホデイエー殿！ 精一杯のもてなしをさせていただきたいのです！ こちらへ！」

「あー、はいはい」

ぐいぐいと引つ張るジーバーベに、ウィーウエは少し辟易しながら大人しくついて行く。種族の滅亡間近であつた状況から、事態が一気に好転した為に興奮を抑えられないのは分かるのだが、もう少し落ち着いたらどうだろうか。

（まあ、いいか。ちようど、お腹もしつかり空いてきた事だし）

食欲が出て来たので、そろそろ食事がしたかつた頃だ。大人しく、ジーバーベについて行つて持て成されるとしよう。ただ――

（こいつら、何を食べるんだろ？）

口の辺りを見つめても、何を食べるのかさっぱり見当もつかない。ウィーウエは気になりながらも、ジーバーベに引き摺られるようにして巢へと案内される。

そして、この後死ぬ程後悔するウィーウエであつた。

「さあ、どうぞ！ 我らが英雄殿！」

ジーバーベに案内された先、彼女達の巢に辿り着いたウィーウエだが、ジーバーベの紹介ですぐさま事のあらましが部族の者達に広まった。彼女達は全員が狂喜乱舞とも言える興奮を示し、ウィーウエを讃え上座に案内する。

「……………うん。これ、なに？」

そしてウィーウエは、ちよつと震える声で隣に控えている藍蛆に訊ねた。藍蛆は微笑みさえ感じられる口調で、ウィーウエの質問に答える。

「はい！ 新鮮な地下^{アンダーワーム}長虫です！ まだ生きてるので、鮮度は抜群ですよ！」

「ふーん」

それを聞いたウィーウエは、震える声で返した。目の前には真つ黒な大きなミミズが一匹、うごごごと悶えている。確かに新鮮そうだ。やばい。

「あの、君らつてこれ、どうやって食べるの？」

もう一度訊ねると、藍蛆は首を傾げて教えてくれた。

「私共は生き物の体液を啜り食します。ですが、これは我らが体液を啜っておらず、一度も手を付けていない新鮮なものです。どうぞ、遠慮なさらないで下さい」

「あ、はい」

体液をちゅうちゅうと啜るといふ藍蛆の恐ろしい生態を聞きながら、ウィーウエは目の前の大ミミズを見つめる。うごうご。やばい。勇気が出ない。しかし空腹が訴えて来ている。そろそろ胃の中に何か入れてくれ、と。食べない選択肢は、もはや存在しない。せつかく用意してくれたのであるし。

（大丈夫、大丈夫。うん。今の俺ならいける。……ミミズは一応、言葉を喋る知的生命体じゃないし）

昔、現実でもミミズを食べる風習の国があつたとギルドメンバーから聞いた事がある。なら、今のウィーウエならきつと大丈夫だろう。そうに違いない。吐きませんように。

ウィーウエは覚悟を決めると、ミミズを掴んで齧り付いた。ぶちゅ。

まず、食感の時点でウィーウエの心は無の境地に達した。舌にざらつとした感触を覚えたのは、おそらくミミズの表面にある体毛だろう。それが最初に舌を刺激し、続いてゴムのようなぶよぶよとした皮膚の食感が続く。どろりとした体液が舌に零れ落ちて

ウィーウエは、無言でそのままもぐもぐと齧り付いた。これ以上の食レポは不可能

だ。もはや、無の境地で黙々と食べる以外の選択肢は無い。これが好意から発生したものでなければ、無言で大ミミズを藍蛆に叩きつけてやるところだが我慢する。

「美味しいですか？」

「……うん」

小さな声で、藍蛆の言葉に頷く。ウィーウエの言葉に、彼女達は嬉しげに返した。

「どうぞ、遠慮なくお食べ下さい。貴方は、私共の英雄なのですから」

「……うん」

黙々と食べる。おそらくは、きらきらとした表情で自分を眺め、崇める藍蛆達に囲まれながら、ウィーウエは無の境地で食事を続けたのだった。

——結論として、今回ウィーウエに分かったのは、自分は血の滴るレアステーキなどの方が好きだという事だ。時々、ちゃんと調理された牛とかのステーキが食べてみないな、なんて思っていたがとんでもない贅沢品だったと思う。神よ、日々の糧に感謝します。これからは、そんな不満は持たないと誓おう。

（二度と、イモムシとかワーム系は口に入れないようにしよう）

何か、大切なものを失ってしまった気がする。

ウィーウエは藍蛆達の好意で差し出される大ミミズなどを、黙々と食べ続けた。

S S S

「よろしいのですか？　こんな事まで協力していただいて」

ジーバーベは、困惑しながらウィーウエを見つめる。それにウィーウエは「いいよー」と気軽に返事をした。

二人は、今あの深紅色の巨大ワームの死体がある場所へ他の藍蛆達を連れて戻っていた。死体は変わらず、そのまま鎮座している。彼と彼女達は此処に、あの巨大ワームを解体する為に戻って来たのだ。

「君らじゃ満足に解体も出来ないだろ？　俺も、そういった特殊技術を持つてるわけじゃないから、丁寧に剥げるわけじゃないけど、君らの力じゃびくともしないだろうし」
ウィーウエの言葉は事実だ。自分達は、これに手も足も（足は元から蹴る事は出来ないが）出なかった。なので、いざ解体しようにもこの巨大ワームの装甲さえ引き剥がせないだろう。

「感謝します、ホディエー殿」

「気にしないでいいよー。じゃあ、やろうか」

ジーバーベ達が見つめる中、ウィーウエが空間に手を入れて、短剣を取り出す。その短剣から強い魔力の輝きが見て取れるので、確実に魔法の武器だろう。

しかし、一番不思議なのはあやつて、空間に手を入れてアイテムを出し入れする行為だ。確か〈ポケットスペース小型空間〉というアイテムを空間に収める事が出来る魔法が存在したが、別のマジックアイテムの効果の方が可能性が高いだろう。

ジーバーベは改めて、ウィーウエの全身を見る。頭天边から足の爪先まで、全身を桁外れの魔法の武具で武装した、何と言ったか不思議な言葉の故郷からやつて来た旅人。手に持つ槍も、何もかも、身を覆う檻樓のようなローブさえも、有り得ぬ魔力の輝きでこの地下世界を照らしている。

これは、間違いなく只人ではない。そんな事は、絶対にあり得ない。自分達に武具を流してくるあの闇小人達でさえ、これほどの逸品を一つとして用意する事は不可能だろう。そんな桁外れの武具で全身を武装する彼は、一体何者なのだろうか。

(もしや、噂に聞く魔神の内の一体なのだろうか?)

この世には、昔から魔神と呼ばれる凄まじい力の持ち主が幾多か存在している。特に八欲王という化け物達や、十三英雄と呼ばれる者達が戦った魔神達は亜人の世界でも有名だ。八欲王達は互いに殺し合い自滅し、魔神達は全て十三英雄に滅ぼされたと聞くが中には封印されただけの者もいるだろう。ウィーウエはその封印された魔神の内の一体である可能性がある。

自分達が手も足も出ず、ただ滅びるのを待つしか無かった相手を槍の一閃で討伐した

その凄まじい力量。彼の十三英雄達も魔神達も八欲王達も、単なる伝説だとはかり思っていたがウィーウエを見てみると案外、伝説ではなく本当にあつた話なのかも知れないと思える。

滅びゆく自分達を救ってくれた救世主。口調は少し間延びしているが朗らかで、傲慢な様子を感じさせない温厚な姿。圧倒的な力の持ち主。

(なんて……なんて………素敵な人！)

断言しよう。ぶっちゃけて言おう。惚れた。恋をした。とっても格好良い。

ジーバーベは鈍い音を鳴らしながらワームの装甲を引き剥がしていくウィーウエの隣で、チラリとウィーウエのフードの下にある顔を見つめる。そこにはフードの影から覗く、虫系種族特有の装甲の黒くて鈍い輝きが見えた。

あのフードの下には、どのような顔が隠されているのだろうか。いや、どのような顔であろうと構うまい。自分達のような亜人にとって、強さこそが全てだ。造形の美しさなど、何の意味があるうか。亜人にとつては、基本は強さこそが全てだ。自分達藍蛆はそういう傾向が少ないのだが、幸いにして彼は温厚で、朗らかで、優しい。

(このような御方には、きつと二度と巡り合えないに違いありません！)

亜人というものは基本的に粗野な者で、どうしてもジーバーベは別種族の亜人達は好きになれない。だが、彼はジーバーベにとって初恋の王子様のようなものである。こん

なにも強く、優しく、そして窮地を救ってくれるような雄に惚れない方がおかしいだろう。

（なんとかモノにしなくては！）

ジーバーは目を光らせて、ウィーウエのフードに隠れる横顔を見つめた。

（なんか……すつごく、見られている気がする）

ウィーウエはワームから装甲を引き剥がしている中、横から妙な視線を感じて困惑していた。視線の主は間違いなく、藍蛆達の参謀であり暫定リーダーであるジーバーベだろう。

（俺、何かしたっけ？）

何か仕出かしたかと内心で首を傾げるが、特にそんな記憶は無い。彼女達を不快にさせるような言動はしていないはずで、むしろ手助けをしてあげているくらいだ。

（それにしても……この短剣で装甲が引き剥がせるとなると、コイツのレベルは六〇も無いな）

ウィーウエが今使用している短剣は、装備しているとドロップ率が少しだけ上昇する能力を持っている。データクリスタルがドロップするのではなく、現実的に獲物を解体して素材を手に入れなくてはならないこの状況では意味が無い気がするが、使わないよ

リマシンだと思い装備したのだ。そのおかげか、思ったよりも綺麗に剥がせる。

問題は、本来このモンスターにこうも深く傷をつけられるレベルの武器では無いのに、装甲を剥がせてしまう事だ。幾らウィーウエの馬鹿力があるとは言っても、それでも抵抗があまり感じられない。

（やっぱり、レベル低かったのかな、コイツ）

そうとしか考えられないだろう。しかし、こんなに弱いのに何故このモンスターは高レベルモンスターに見ただけでも進化してしまったのか。もしや、モンスターの成長具合もあのロモロという亜人の職業と同じように、下位種族を無視して成長出来てしまうのだろうか。

（後で、進化理由を調べてみるかなー）

ウィーウエは〈エグドラシル〉でこのモンスターにも遭遇した事がある。なので、

エンサイクロペディア

百科事典に詳細があるはずだ。そこで紫が深紅になる理由を調べて、レベル無視の環境変化が可能なのかどうか調べよう。

（ほんっと、よく分からないなー）

装甲を次々と引き剥がし、その辺りに放り出す。それを藍蛆達がすぐに回収し、頑張って加工するのだろう。……彼女達は加工する手段があるのだろうか。おそらく、積み重ねたりして盾にでもする気かも知れない。鎧にするには、そもそも加工する道具が

無いであろうし。

そして、胴体を全て引き剥がし終えた後は切り離れた頭部から牙を引き抜いていく。全てを解体し終えた頃にジーバーが「お疲れ様です」と声をかけてきた。

「ありがとうございました、ホディエー殿。これだけの素材があれば何とか他の亜人達から身を守れそうです」

「それはいいけど、加工する当てつてあるの？」

「此処から遠いですが、闇小人達のもとへ依頼しようかと思っております」

「ダークドワーフ？」

森妖精^{エルフ}にも二種類いるように、山小人^{ドワーフ}にも二種類の種族がいる。おそらくは、そのもう片方の人間種だ。

「はい。彼らの加工技術は素晴らしい腕ですので、彼らに最低限の加工を頼もうかと。この丘陵地帯で魔法の武具を持つ者達の武装は、基本は彼らから物々交換で手に入れたものですから」

「へえ」

山小人系の種族は、鍛冶などの加工技術に優れているのがフレーバーだ。此処でもそれは同じなようで、ウィーウエには興味が湧いた。

「なあ、その間の護衛っていらんかい？」

なので、ウィーウエは自分を売り込んでみる事にする。すると、ジーバーベは頷いた。「それは勿論、必要です。その……護衛として、雇われていただけますか？」

「いいよー。俺も、闇小人達には興味がある。大森林の事は後でいいや」

闇小人はまだ見かけた事が無い。なので、彼らがいる場所とやらに興味があるのでウィーウエはまずそちらを片付ける事にした。大森林は逃げないのだ。後回しにしても大丈夫だろう。……まあ、ヘグドラシルには移動する森とも呼べるおかしなアクティブモンスターもいたが、たぶん違うだろう。きつと。

「ありがとうございます、ホディーエー殿。では、さつそくですが明日から頼まれてもよろしいですか？」

「おつけー。じゃあ、明日陥没穴外の地上で落ち合おうか。どの道、外には出るんだろ？」

ウィーウエがそう言うと、ジーバーベは頷いた。

「はい。さすがに、地下に潜ったまま闇小人のもとへは向かえませんか。……泊まってはいいかれないのですか？」

「ああ、うん。俺もまだ外で用事があるし。明日の日の出の時間に、陥没穴の外で落ち合おう」

また大ミミズのような食感の食べ物を用意されたら、さすがにキツイものがある。な

ので、何とかしてウィーウエは外に出てその食事を回避しようと必死だ。だが、ジーベーベは申し訳ないと思っているのか食い下がった。

「もし迷惑をかけると申し訳なくお思いでしたら、杞憂ですよ。我々は、貴方に感謝しています。貴方が我らの住居で寝泊まりをしても、我々は喜んで受け入れるでしょう」

「いやいや。うん、大丈夫。俺、外で済ませたい用事があるだけだから。また明日ね、明日」

ウィーウエは必至に拒否する。何となく、ジーベーベが悲しそうな口調のような気がしたが、気のせいだと思っておく。ミミズ系は本当に無理だ。空腹に耐えかねた場合は食べるだろうが、そうでないかぎりは遠慮したい食事である。本当に勘弁していただきたい。

「かしこまりました。……それでは、ホディエー殿。明日の日の出にまた会いましょう」
「うん、またねー」

彼女達に手を振って別れを告げ、ウィーウエは逃げるように陥没穴の縦穴を身体能力で無理矢理登っていく。土壁の凹凸に足をかけ、跳躍。落下しないように注意して。

しばらくそうして駆け上がったいくと、外に出た。ウィーウエは外の空を見上げる。既に夜が明けており、何処かへと食事へ飛び立っていた吸血蝙蝠達が帰ってきていた。

（とりあえず大森林は置いとして、明日から闇小人の探索か）

ウィーウエは頭をフードの上からガシガシと掻く。今回も色々と分かった事は多かったが、しかし何かが分かる毎に更に疑問が増えていった。本当に、この世界は何なのだろうか。ネットの中なのか、本当に異世界なのか。さっぱり分からない。

そこで、装備を元に戻していない事に気がついた。別にこのままでも問題は無いが、しかし防御力は落ちる。どうするか少し考えて——結局は元の神器級アイテムに戻しておく事にした。護衛依頼なので、姿を隠せる装備品で先行して安全を確保しておいた方がいい気もするが、しかし場を離れている内に厄介なものに遭遇して胃の中にかれていた方が面倒だ。自分が蘇生する為のアイテムはあるが、他人を蘇生させるアイテムは持っていないのだ。

「——さて、それじゃあ食糧を探しに行こうかな」

幸い、先程藍蛆達から奢ってもらった大ミミズを大量に摂取したので、すぐに必要というわけではないがウィーウエにとつて食事はなくてはならない必需品である。それに、大量の荷物がある護衛依頼となると、傭兵モンスターを雇っておくべきかもしれない。実験に使うのは勿体ないと思ったが、実際に召喚出来るのかどうか、召喚時間はどの程度か見ておく必要がある。戦闘能力をほとんど持たない、荷物運搬用のモンスターを召喚しよう。確か、四〇レベルほどの魔獣がいたはずだ。

「あつと。そういうば、紫イモムシくんの進化過程を調べておくんだつた」

ウィーウエはインベントリから二冊の本を取り出す。一冊は傭兵モンスターを雇う為に必要な召喚の本で、もう一冊は百科事典だ。エンサイクロペディアウィーウエは更に金貨を取り出して、まず召喚の本で目的のページを開く。

「あつた」

冷気や炎に耐性を持ち、移動速度が速く、何より長期間食料を食べなくてもいいという優良というか有料モンスター。それはマンモスのような見た目の魔獣であり、ヘュグドラシルでもよく使われていたモンスターだ。

ウィーウエはそれを召喚すると待機を命じ、続いて百科事典の目的のページを探す。エンサイクロペディアすぐに見つけたウィーウエは、モンスターの詳細設定を読み込む。

有機物なら何でも口に入れる、腐肉喰いのパールワーム。様々な亜種や変種のいるこの種族は、当然環境によって細かな外見と装甲の色を変える。深紅色が良い例だ。

そして、深紅色のワームは変種の内の一種で、出現場所は荒野や岩砂漠だ。どう考えても、丘陵地帯に出現するような生物では無い。森林などからやって来たのなら、緑か青色になっているはずだろう。

つまり……やはりどう考えても、この辺り出身の生き物では無い。何処かに、砂漠地帯か荒野でもあるのだろうか。いや、捕獲デイルムされていた可能性もある。その場合は、魔物使いが付近にいる事になるのだが。

「うーん。でも、やっぱり環境変化で色違いになる事しか書いてないか」

それ以外の進化理由が何か書いてないかと思つて調べたが、無駄足だったようだ。しかし、自然界の法則に則つて亜種や変種に変化するとなると、あのワームのように極端に弱いモンスターもいれば、本来そのレベルでは有り得ない極端に強いモンスターもいる事になる。それだと見た目で判断するのは禁物になつてしまうだろう。

これからは、他のモンスターと遭遇した時はもつと氣をつけた方がいいかも知れない。未知の特殊技術だけでなく、未知の魔法も存在するかも知れないし、未知のモンスターもいるかも知れないのだ。油断は禁物である。

「――よし！　氣を引き締めて、さつそく食糧を集めるとするか！」

行くぞー、と声をかけるとマンモスの魔獣はウィーウエの声に従つて、のしのしと歩き始めた。命令系統はしっかりしているようだ。こうして召喚して雇つても、忠誠心がゼロであつたらどうしようかと思つたが杞憂だったらしい。後は、召喚継続時間だろう。位階魔法や特殊技術で召喚する場合、召喚モンスターには召喚継続時間があつてそれを過ぎると消えてしまう。だが、傭兵モンスターにはその召喚継続時間が存在しないはずなのだが、その場にはないはずのものをこうして呼び出すのは大丈夫なのか。疑問は尽きない。位階魔法などの召喚継続時間がある召喚モンスターも氣になるが、ウィーウエは習得していないので立証不可能だ。

ウィーウエはぬぼうつとしたマンモスの魔獣を引き連れて、食料を探しに向かったのだった。

そして分かったのは、傭兵モンスターはどうやら討伐されないかぎり消滅しないという事だった。狩った狼などを荷物として吊るしていたウィーウエは、空腹を訴えるマンモスの魔獣を前にして、少し途方に暮れたのだった。

……仕方なく、自分の食事を少し分け与える事にする。ウィーウエと違って燃費がいいので、少し渡す程度で大丈夫だろう。

ウィーウエは夜が明けて合流時間になるのを、陥没穴の近くでそうして待ち続けたのだった。

4章 魔神降臨

「ホディエー殿！」

約束の日の日の出の時間。ウィーウエは荷運び用のマンモス魔獣と共に陥没穴付近で待っていると、聞き覚えのある声を聞いた。声の方を振り向くと、同じような姿の藍蛆が幾人か見える。彼女達は皆、ウィーウエが解体してあげたワームの部位を持っていた。こちらに近づいて来ているのが、おそらく先程ウィーウエに声をかけた本人……ジীবーベだろう。

「本日は、よろしくお願いします」

「よろしくー」

頭を下げるジীবーベに習い、ウィーウエも気軽に挨拶を交わす。ジীবーベはウィーウエが連れている魔獣を見て、困惑したような声色で訊ねてきた。

「あの……そちらの魔獣は何でしょうか？」

「これ、俺の食糧運び。俺、大食漢だからね。闇小人の所まで、どれくらい掛かるかわからないから、ちよつと色々狩って運ばせてる」

魔獣の左右には荷物を載せる籠が取り付けられており、ウィーウエはそこに狩った山羊や狼などをそのまま幾体も載せていた。節約しながら進めば、三日は空腹のペナルティなどを受けずに進めるだろうし、食欲も腹の中で多少燻る程度で済む。

だが、ジーバーベが聞きたいのはそういう事では無いようだ。彼女は少々怯えたような様子を見せている気がする。そこで、この魔獣のレベルを思い出した。ウィーウエにとっては脆弱に過ぎるレベルだが、彼女達にとっては身近に感じられるほどの、けれど決して勝てない強さなのだろう。

「コイツ、俺が召喚したようなものだから。あんま気にしないでいいよー」

「召喚モンスターなのですか？」

「うん。ただ、特殊なやつで召喚継続時間が長いんだ。中々消えないけど気にしないでね」

ウィーウエの言葉に、ジーバーベは納得したようだ。召喚モンスターならば、召喚主には絶対……怯える必要は無いという事だろう。ジーバーベの様子から、召喚モンスターの忠誠心に関してはどうやら心配する必要は無さそうだ。これは傭兵モンスターだが。

「それにしても、君も来るの？」

「はい」

ジーバーベの様子を見て、疑問を投げかけると彼女は頷いた。その言葉に、ウィーウエは困惑する。確か、彼女はこの部族の参謀役だと聞いていたのだが。闇小人と交渉するのに彼女は必要なのだろうか。幾度か交渉している様子が見える事から、別に彼女自身が来なくても良さそうな気がするが。

（まあ、本人の勝手だしね。別にいいかー）

彼女達が決めた事なのだから、特に何も言うまい。ウィーウエはこの件についてはそれ以上の言葉を黙殺し、別の疑問を投げかける事にした。

「それで、闇小人は何処に住んでるんだい？」

「はい、彼らは山岳地帯に住んでいるのです。山羊人などが住んでいる場所ですね。此処から——」

どうやら、ウィーウエがかつて訪れた山岳地帯にいたようだ。ただ、岩山などの裂け目などから、地下に向かっていかないと行けないので、表層を歩いた程度のウィーウエには発見出来なかったらしい。

「なるほど。じゃあ、さっそく出発しようか？」

「そうですね。なるべく、急いでおきたいです」

ウィーウエの言葉に頷いて、ジーバーベが背後の者達に声をかける。彼女達も二人のもとへ集まり、それぞれ荷物をソリのようなものに乗せて引つ張り始めた。ウィーウエ

はそれを見て、一応声をかけてみる。

「どうする？ コイツの籠に紐引つ張らせる？」

ウィーウエが魔獣を指差すが、しかし彼女達は首を横に振った。既に魔獣は幾つも荷物を載せているし、これ以上の迷惑はかけられないと言う。彼女達がそう言うならばと、ウィーウエはそれ以上何も言わなかった。

「では申し訳ありませんが、ホディエー殿はジーバーベと共に最後尾をお願い出来ますか？ 先頭は野伏^{レンジャー}の技能を持つ私共が立ちますので」

「いいよー」

戦闘能力が高いウィーウエを最後尾に配置するのは当然の事だろう。背後から強襲されようと、この丘陵地帯の平均レベルでは、ウィーウエに致命的ダメージを負わせる事が出来る存在は皆無に等しい。ウィーウエの体力的にも、世界級アイテム^{ワールド}でも使うかしないかぎりには、即死は有り得ないだろう。その前にジーバーベを置くのは、ジーバーベが自分達にとつての要人だからに違いない。

それに、ウィーウエの速度なら先頭が襲われても秒で先頭に駆けつけられる。護衛には向かない職業構成をしているが、低レベル帯ならば気にする必要も無い。魔獣もこの丘陵地帯では強いのだから。

配置を決めて、ウィーウエは彼女達と共に山岳地帯へ歩き出す。山岳地帯の方角か

ら、少し冷えた空気が風下にいるウィーウェ達の方へ流れてきていた。

§ § §

丘陵地帯では暖かな春の気温であつたが、山岳地帯はまだ雪が残っているらしく、冷えた空気が傾斜を降りてくる。最初はそれなりに緑が見えた景色も、傾斜を登っていくにつれて段々と減つてきた。流れる小川は透明で、まだ水温が冷たいのか生物の姿も見えない。

ウィーウェが全力で走れば一日で辿り着く頂上も、藍蛆達の足では一日程度では三分の一も進めない。ましてや、蛆のような下半身では山羊人のように崖を駆け登るなど不可能な事で、必然遠回りの道を進む事になる。

だが、そうした通り道はよく草むらからモンスターの奇襲を受けるので、左右を警戒しなければならぬ。幸い、ウィーウェが連れている荷運び用の魔獣のレベルから、頭の良いモンスター達は奇襲を仕掛ける事に躊躇していた。その為、道中は藍蛆達からしてみれば比較的穏やかである。ウィーウェ自身は残念ながら、本人の自覚無く探知阻害の指輪を装備している為に、強者の気配が隠れてしまっていた。彼がそのままの気配で闊歩していたのなら、誰も襲つては来ないだろうに。——もつとも、代わりに藍蛆達と

も穏やかな関係を結べたかは疑問だが。

「――少し、休憩しましょう」

疲労無効のウィーウエはともかくとして、たくさん荷物を持つて歩いている藍蛆達に、長時間の登山は不可能だ。ジーバーベはリーダーとして、二時間ほど歩いた後に少し開けた場所へ辿り着いた後仲間達の様子を見ながら告げる。藍蛆達はジーバーベの言葉に足を止め、その場で疲労を回復する為に水分を補給し始めた。

疲労・睡眠・食事無効のマジックアイテムがあれば平気な登山も、そうした高価なマジックアイテムを持つていない藍蛆達には辛い旅だ。彼女達は闇小人達に渡すワームの素材と共に、数日分の保存食と水分を持ち歩かなくてはならない。特に登山はかなりスタミナを消耗するので、高カロリーの軽食を齧りながら進まねばならないのだ。チヨコレートなどがあればいいのだろうが、そんな甘い菓子が存在するはずは無く。またウィーウエがそんな菓子を持つているはずも無い。

彼女達の足に合わせて進むのは、ウィーウエも中々気疲れするものだった。基本の歩幅と速度が全く違うのだ。肉体的な疲労は全く無いが、精神的な疲労は蓄積した。彼女達が休憩している間に、精神的な疲労回復も含めて暇潰しを行う事にする。

ウィーウエがごそごそと何かをしている事を目敏く見つけたジーバーベが、ウィーウエに声をかける。

「何をされているのですか、ホディエー殿」

「んー、積み木」

木の枝を幾つか集め、なるべく均等に切り分けた後に三十センチほどの高さに組み立てる。そして、一本ずつ引き抜いていく簡易版の積み木遊びだ。この小さな塔が崩れてしまわないようにする遊びで、ウィーウェは以前も一人でこうやって暇を潰していた。以前は集中していたところに刃鎧蟲達は何故か自分に声をかけてきた為に、驚いて崩れてしまったが今回は大丈夫だろう。

不思議そうな様子のジーバーベに遊び方の説明をしながら積み木を組み立て終わると、彼女は感心しているようだった。

「なるほど……倒さないようにするのなら、脳の運動にちょうど良さそうですね。私も参加してよろしいですか？」

「いいよー。一人でやる遊びじゃないしね、基本は」

ジーバーベがウィーウェの向かいに回り、コイントスで先手と後手を決めて一本ずつ木の枝を引き抜いていく。幾つか木の枝を抜いていくが、実際には綺麗に切り分けられていない木の枝はすぐにバランスを崩していった。その為、倒さないようにするには中々考えないといけない。

そうして二人で遊んでいると、決められた休憩時間を過ぎた為に再び列を組んで出発

する。土の中に住んでいる為か、藍蛆達はそれほど寒さに弱くないので、標高の高い場所へ移動しても行動に障害は中々出ない。雪でも降らないかぎりは大丈夫だろう。

のろのろとした足取りで、何度も休憩を挟みながら目的地へ向かっていく。ウィーウエはその道中の間に魔獣に運ばせていた肉に齧り付き、行儀の悪い食歩きをする事となった。ジーバーベなどは一人で大型草食獣を一頭食べる姿に、「燃費が悪いんですね」と思わず呟いたほどだった。ウィーウエも、好きで食歩きなんてしているわけじゃないので、その言葉には曖昧に返した。

日が暮れ始めると、更に気温が冷え込む。何とか目星をつけていた休憩場所まで進んだ一行は、荷物を降ろしてそこで一夜を明かす事となった。寝ずの番はウィーウエと、レンジャー野伏の幾人か。特に、ウィーウエは睡眠の必要が無いので寝ずの番には最適だった。

藍蛆達が見張りを残して寝静まる中、ウィーウエは同じ見張りの者達と会話を行った。そうして会話をしていく内に、気がついた事がある。

どうやら、彼女達は自分達の種族を亜人種だと思っているようだが、その根拠が亜人種に効果のある魔法が効くからというものなのだ。藍蛆は元から特定種族のみに発揮する魔法の効果を受けるといふ、種族的弱点があるのでそれのみで亜人種だと断定するのは根拠が薄いとウィーウエは思う。更に、彼女達の種族にはあるジンクスがあるようで、それを聞いたウィーウエは思わぬところで生命の神秘を知ってしまった。

そうして、夜が明ける頃。再び一行は傾斜を進む。闇小人達はこの山岳地帯の地下に居を構えているらしく、岩の裂け目や洞窟などから入らないといけないらしい。更に、亜人種達と交流する場所は決まっているようで、そこで他の亜人種達と鉢合わせになつて殺し合いになる事も少なくないようだ。闇小人達は、そんな彼らの殺し合いには関わりにならず、生き残つた者達と取り引きを行う事がよくあるらしい。

ただし、今回はウィーウエが護衛として行動を共にしているので、余程の相手でないかぎりには藍蛆達の勝利で終わるだろう。誰が相手であろうと、藍蛆達が怯える必要は無かつた。

そして、運の良い事に。二日かけて取り引き場所へ辿り着いた一行は、確かに他の亜人種達と遭遇してしまつたが、幸いと言うべきかウィーウエの顔を見て彼らは尻込みをしてしまつた。何故なら、彼らはウィーウエが丘陵地帯で遭遇した獣身四足獣——ヴァーヴァ達だつたのである。

ヴァーヴァはウィーウエに遭遇すると、最初に遭遇した時と違つてかなり腰が低くなつていた。そんな彼らにウィーウエは首を傾げるが、特に気にせず談話する。聞けば、彼らも闇小人達と取り引きを行つており、取り引きが終わつて帰り支度をしようとしていたところだつたようだ。

その為、互いに何事も無く別れる事となつた。かなり運の良い出来事だつたと言えるよ

う。

闇小人達と交渉を行う藍蛆達を尻目に、ウィーウエは手の空いている闇小人へ声をかける。

「ねえ、ちよつと訊きたい事があるんだけどいいかな？」

「なんじゃ？」

気難しそうな風貌の、見るからに設定通りの闇小人といった様子の男。彼はウィーウエに声をかけられたので億劫そうに訊き返した。

「ちよつとき、最近変な奴みてない？」

「変な奴？ お前さんみたいな奴しか見とらんな」

闇小人はウィーウエの姿を頭の天辺から足の爪先まで見回して、そう答えた。

「そう、俺みたいな奴。毛色が違うっていうか、この辺じゃ見るはずが無いっていうか。……うーん、ユグドラシルとか日本が故郷とかそう言ってる奴」

ウィーウエの言葉に、闇小人は考える素振りをするがしかし首を横に振る。

「いや、知らないな。ユグドラシルも二ホンも、そんな地名は聞いた事がないぞ。どんな所なんじゃ？」

「だから、俺みたいな奴がたくさんいる所というか……。とりあえずこう、この辺じゃ見るはずのない魔法の武具を持つてる奴。そういう奴を見かけた事無いか知りたいんだ

けど」

闇小人は再びウィーウエの上から下までを熱心に見回し、しかし首を横に振る。

「お前さんのように、桁外れの魔法の武具で全身を武装しておる奴なんぞ、この辺じや見た事ないぞ。っていうか、本当にお前さん何処から来たんじや？」

「だから、ユグドラシル。でもそつか……見た事ないか。いや、待てよ」

ウィーウエはインベントリに手をつ突つ込み、幾つかのマジックアイテムを取り出す。ウィーウエが今全身に装備しているマジックアイテムは、全て神器級ゴツズアイテムだ。これは貴重品なので、一〇〇レベルプレイヤーの中でも一つも持っていないプレイヤーというのは、さらにいる。なので、ランクを少し下げる事にしたのだ。

ウィーウエが空間に手をつ突つ込んだ時はぎよつとした闇小人だが、そこからウィーウエが取り出したマジックアイテム群を見て更に、目玉が飛び出て落ちてしまいそうなほど驚愕していた。

「この中でさ、見た事があるランクのマジックアイテムってどれ？」

とは言っても、ウィーウエもあまり下位のランクのマジックアイテムは持っていない。何せ、寸前までソロでダンジョン攻略を行っていたのだ。どれも一〇〇レベルプレイヤーが持ち歩くに相応しいマジックアイテムしか持っておらず、当然だが、マナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬のようなしよぼくれたアイテムなんて持っているはずが無い。だが、

それで充分だろう。

闇小人はウィーウエが広げた幾つかのマジックアイテムを、食い入るように見つめている。それらを全て見回し……首を横に振った。

「悪いが、わしには見た事も無いマジックアイテムばかりじゃ」

「えー……」

ウィーウエが更に、ユグドラシルの金貨を取り出す。ユグドラシルで使われる貨幣は金貨のみで、価値は同じだが二種類の金貨が存在した。ウィーウエは特にこだわりも無いので、その二種類の金貨をごちゃ混ぜに持っている。

「この金貨、どっちかに見覚えは？ 持つてる奴も知らない？」

片方は男性の横顔が、もう片方は女性の横顔が彫られている。闇小人はその二枚の金貨をじつと見つめるが、しかし首を横に振った。

「いや、知らんの。そもそも、金貨なんか使うのは人間の国くらいじゃろ。わしらは金貨で取り引きなんか行わん」

「あ、そう……」

金貨で取り引きしない、という事は完全に物々交換なのだろう。闇小人の事だから、しつかりとした文明ぐらいは築いているのだろうが、それでも亜人種を相手に取り引きをしている以上、使用する事は無いのかも知れない。確かにそれなら、金は硬貨にせず

に、武具などに加工してしまうだろう。

（うーん。参った。……人間の国に行かないと駄目か）

とは言っても、近くの人間の国は人間以外に優しくない。亜人種に襲われているので、当たり前だが。そうなるのかなり遠い場所を旅しないといけない気がするが、出来れば地図が欲しいところだ。

ウィーウエがマジックアイテムをしまいながら考え込んでいると、闇小人が再び声を掛ける。その言葉に、ウィーウエも顔を上げて思考を中断した。

「ん？ なに？」

「わしは、お前さんの故郷らしきユグドラシルもニホンも知らん。だが、お前さんが見せてくれたマジックアイテムを見て、ちよいと予想出来る事はあるぞ」

「本当!？」

思わぬ収穫に、ウィーウエは瞳を見開く。闇小人は興奮するウィーウエに、「ただし」と前書きを付け加えた。「お前さんと関係ありそうで、関係無さそうな話じやが」と。

闇小人が噂話を語る。——トネリコの枝を振り回して、幾多の竜を退治したゴブリン王。水晶の城を支配した姫君。六人の神と、八人の王。十三人の英雄達。

この中で、ウィーウエが気になったのは水晶の城の姫君だ。確か、ユグドラシルに水晶で出来た城があったはず。ウィーウエは他人のギルドを攻略した経験は無いので、確

実とは言えないが。

「——以上、大昔の伝説じゃ」

「……え？」

伝説。伝え聞く、大昔の話。

今では、決して無い。

「伝説」

「そう、伝説じゃ。どいつもこいつも、大昔の話でな。結末は封印されたとか、今も眠っているとか、退治されたとかそういうのばかりじゃ。お前さんは何だか、伝説級の装備で身を固めておるようだが、お前さんが探すような装備品の持ち主は、伝説の中にしかおらんのだ」

「……伝説」

ウィーウエは、呆然と呟く。現在の話ではなく、遙か昔。だが、ウィーウエはこのわけの分からない状態になってから、まだ一月も経過していないのだ。あまりに、年代が合わない。

呆然としたウィーウエの様子を、闇小人は気まづげに見る。

「まあ、そんなわけじゃ。お前さんが何者なのかは知らんが、仮にお前さんがその伝説のどれかに覚えがあるなら、お前さん。ちよつとばかし、起きてくるのが遅すぎたの。お

寝坊さんじゃ」

あらゆる伝説は、既に有るか無いかに分かれてしまっている。一応、跡地くらいはあるそうだが——跡地では意味が無い。

「……うん、ありがとう。色々教えてくれて」

「もうちつと詳しい話も、文献で良ければあると思うぞ？　ただ、その場合は上層部の者達と交渉してもらいたいが」

「いや……その必要は無いよ。うん、ありがとう」

ウィーウエはふらふらと、闇小人から身を離す。大昔。伝説。それでは意味が無い。実在。本物。今を生きていなければ、意味なんて全く無いのだ。

呆然とした様子のウィーウエを見て、ジーバーベが不思議そうに気にかけてくれたが、ウィーウエは彼女に生返事しか返せなかった。

そして、数日の後にウィーウエは再び藍蛆達の護衛として闇小人達の集落を離れたのだった。

§ § §

——闇小人達から衝撃的な事を聞いて。あれから、数日。ウィーウエは藍蛆達の住む

陥没穴を出て、その周辺で色々と考え込んでいた。

「……………」

〈ユグドラシル〉のシステムと、正体不明のシステム。プレイヤーの自分と、まるで生きているとしか思えない亜人種や人間種達。知らない土地に、世界樹の不明。

わけが分からない。

意味が分からない。

プレイヤーは自分だけなのか。ネットではない、現実はどうなっているのか。自分の身体は。企業は何をしているのか。何もかもが不明だった。

(……マジにどうなってるの、これ？ 俺ってこれからどうなんの？)

生きていれば何とかなるのが信条だが、そもそも自分が生きているのも不明だった。オカルトらしく、実は元の身体は死亡してしまつて、意識だけが電脳世界を彷徨っているのだろうか。それとも全てが夢の中の出来事なのだろうか。

あんなに、痛みは強いのに。ウィーウエは最初にこの世界にやって来た時の、体力が減っていた時の激痛をまだ覚えている。忘れられない。現実とは無縁の痛みだったから。あんな激痛は、人間の貧弱な身体では死の間際にしか与えられないだろう。

その痛みは、本当に夢だったのか。分からない。今の自分が、さっぱり分からない。頭がこんがらがってくる。やはり、もつと外の世界に目を向けなくてはいけないだろう

か。

「んー」

ガシガシと、頭を掻く。悩んでも始まらないのだ。何度も同じ結論に達しているが、やはりとりあえず、今を生きようとするのが先決だろう。このアバターの名前の通りに。

ウィーウエがそう決意すると同時に、背後からこっそりと近寄って来ていた人物が声をかけてきた。この声は、ジーバーベだ。

「ホデイエー殿」

「ん？ 久しぶり。どうかした？」

座り込んだ体勢のまま、振り向いて返事をする。ジーバーベは「いえ、この付近で生活しているようだったのでまだ何かあるのかと声をかけさせてもらいました」と告げた。どうやら、いつまでも遠くに行かずにこの陥没穴の周囲をうろちよとしていて、気になったらしい。

迷惑なら離れると告げると、特に困ってはいないようだ。むしろ、この付近で生活しておいてもらえば地上の強力なモンスターが陥没穴に近づかないので、逆に助かるそうだ。あの荷運び用の魔獣は、ウィーウエが適当にこの付近で野放しにしている。さすがに食べるのはちょっと心苦しい。

「ちよつと色々、考え事をね。まあ、考えたところで何も始まらないんだけど」

人間の国に行けば、もう少し何か分かるかもしれないと思うが。異形種の自分が人間の都市に入れるのかは疑問だ。少なくとも、変身するか何かしないと異形種はペナルティで人間の支配する国には入れない。《ユグドラシル》ではそうだった。あの城壁の奥が人間の国なようだし、一度確かめる為に入り込んでみようか。どうやつても入れないなら、それは設定で入れないようになっているのだろう。ゲームならばそうだ。現実ならおかしい話だが。

「何か悩んでおられるんですね。私でよければ、相談に乗りますが」

「いや、いいよ。こればかりは、どうもなー」

プレイヤーになら相談出来るが、そうでないなら相談する意味が無い。ジーバーベには悪いが、彼女はウィーウエの役には立たないのだ。ウィーウエの言葉に、ジーバーベは「そうですか」と少し悲しそうな声を上げた。その寂しそうな声に罪悪感はあるが、やはりどうしようもないので見なかった事にするしかない。

二人がそうしていると、ウィーウエは聞こえてきた足音に立ち上がる。急に立ち上がったウィーウエに、ジーバーベは驚いていた。

「どうされたのですか？」

「足音だ。二足歩行だな、これは」

流石に、二足歩行の生き物の足音と四足歩行の足音、それ以外の足音の区別が付き始めていた。長くアペリオン丘陵に留まっていたからだろう。これは二足歩行の生き物の足音で、そして微かに金属音が聞こえる。ウィーウエと同じ、金属鎧の、金属の擦り合う音だ。

ウィーウエが音の方角へ目を向けると、何かがこちらへ近づいて来ていた。その二足歩行の生き物を目を凝らして見つめて——ウィーウエは驚く。ジーバーベも、ウィーウエの視線を追って見つめた先にいた存在に、酷く驚いていた。当然だ。

そこにいたのは、人間だった。しかも、不穏な気配を漂わせている。

ウィーウエはその正体不明の人間を見つめる。顔はフードがすっぽりと、まるでウィーウエのように覆い被さっていて分からない。肩幅などの体格から考えると男のような気がするが、筋肉隆々の男のような体格の女性も世の中には存在するので、実際は分からない。

ただ、あのみすばらしいローブには見覚えがある。ヘugdラシルの市販で売りに出されている、速攻速着替えのデータクリスタルが使われているローブだ。ローブを体から引き剥がすと、セットされた装備品と瞬時に交換出来る能力がある。

つまり、今見えている装備品は当てにならない。ウィーウエは目を細めた。じり……と目の前の人間を警戒しながら、ウィーウエは足を後退させる。人間はウィーウエを見

て立ち止まっていた。相手との間合いを測る。一〇〇レベルなら余裕で瞬く間に詰められる距離だ。ウィーウエは相手との間合いをそう測ると、先手を取る事は諦めた。ジーバーベの位置を確認。続いて、背後の陥没穴との距離。覚悟は決まった。

ウィーウエは先手を取る事は諦め——ジーバーベとの距離を詰める。そして彼女の身体を足の甲になるべく優しく乗せ、そのままフットボールのボールを高く蹴り上げるように、ジーバーベを蹴り上げた。

「え」

ジーバーベは、おそらく気づいた時には既に空中だろう。彼女は悲鳴を上げながら、真つ逆さまにウィーウエが狙っていた陥没穴へと落ちていく。あの陥没穴は、それほど深い陥没穴では無い。高さも調節したので、落ちたところで平気だろう。ウィーウエは視線を正体不明の人間へ戻す。

その正体不明の人間……男は、既にローブを剥ぎ取っていた。ローブの下から現れた装備品を、ざっと大雑把に見回す。ローブとサーコート。サーコートの下に鎧は見られない。人間種の前衛で軽装鎧さえ装備しないような無謀者はいない。よって相手は後衛型。ただし後衛型でも魔法使いの場合自分との間合いは狭すぎるので、魔法系でもない。よって更に職業は絞れる。

だが、これ以上は初手を受けてみないと分からないだろう。致命的な魔法は飛んでこ

ないだろうが、特殊技術には注意が必要だ。

ただし、相手はウィーウエの職業が丸分かりだろう。どう見ても前衛型。更に、槍を持つているので槍特化の戦士系。間合いを詰めさせてもらえないに違いない。

彼女の悲鳴が響く中、ウィーウエは人間種の男に向かって地を蹴る。間合いを詰める為に。だが、それより早く相手の先手がウィーウエへと延びる。初手はウィーウエにとって一番嫌いなもの。即ち。

「――ティマーか！」

地面から、ワームが何匹か出現しウィーウエの足首に噛みつく。だがその初手はウィーウエにとって対処出来ないものではない。足首に噛みつかれる前に、土から出てきた頭部を踏み砕く。頭部を踏み砕かれたワーム達は痙攣しながら死亡し、ウィーウエが相手から外した視線は一瞬だった。

……相手は、おそらくモンスターティマー。ウィーウエにとって、もつとも苦手な職業構成の相手である。職業構成上、数の暴力は最も避けなくてはいけない相手だ。というより、基本前衛型のプレイヤーにとって数の暴力が得意な者はほとんどいないのだが。殲滅力では、どうしたって魔法系ビルドのプレイヤーに劣る。

(……でも)

相手の初手を判断するかぎり、それほどの脅威ではない。一〇〇レベルプレイヤーに

こんなワーム群が相手になるはずがないのだ。

だが、フェイクの可能性もある。油断した瞬間に超強力モンスターを不意打ちでぶつける、という戦法もあるし、何より亜人種だらけのこのアペリオン丘陵でモンスターテイマーを相手にするのは、厳しい。何せ、トレイン——周囲のモンスターをわざと複数引っ掻けて、対戦相手に押し付ける方法の事だが——し放題だ。知り合いを引っかけられると困る。流石に。そういう可能性を考えたからこそ、初手でジーバーベを射程範囲から外したのだから。

「……面倒だなー」

呟いて。ウィーウエは話し合いの余地の無さそうな男に向けて、距離を詰めた。

§ § §

——正直に言うのと、その日は踏んだり蹴ったりだった。

「……逃がした、だど？」

「も、申し訳ありません！」

スレイン法国の誇る特殊部隊……漆黒聖典の第四席次を預かるモンスターテイマー、
“地中旅団”オーガスタス・オールドマンは隊長である第一席次に頭を下げた。

オーガスタスは第一席次と同じく、神の血を引き、覚醒している神人なのだが力関係ははつきりしている。単純な戦闘力では、オーガスタスは第一席次には勝てない。勿論、あの番外席次にも。神官長にさえ。

だがオーガスタスの戦闘力は群体としての強さであり、当然他の神人のように個人の強さを比べるものではないのだが、“真なる竜王”達を従えられない以上、神人として覚醒した中でも最弱の神人と言つていいだろう。

そして、オーガスタスは事態を説明し、第一席次に頭を下げていた。オーガスタスから内容を聞いた第一席次は、溜息を吐いて呆れた声をかける。

「先程の森妖精^{エルブ}達の集団が原因か」

「はい。混乱の魔法をかけられたようで、私の手綱を離れました。これからすぐ追跡しようと思っています」

アベリオン丘陵で間引きなどを行っていた際の帰りの道に、エイヴアーシャー大森林に立ち寄ったのが間違いだつたのだろう。そこで森妖精達の奇襲に遭つたのだが、それ自体は問題無い。怪我一つ無く皆殺しにした。

問題なのは、オーガスタスの従えている魔物の一体が混乱状態になり、彼の手を離れた事だ。タイムしたモンスターは、混乱状態や狂気状態になった場合、従属が解除される事がある。

「分かった。お前ならば、一人でも大丈夫だろう。我々はこれから本国に帰還するが、お前はここの大森林を避けて帰れ。他の森妖精達ならば問題は無かるうが、あのクソが万が一出陣していた場合、お前では手に余るだろうからな」

「はい。申し訳ありません。……では隊長、行つて参ります」

部隊の者達にも一言断り、オーガスタスは踵を返した。狼達を何匹か呼び出して、自分の周囲に配置しながら共に森を駆ける。〈精神感応^{テレパシー}〉で命令を伝達。狼達の案内に従った。この狼達の持つ特殊技術は地中にいる相手さえも嗅覚で感じ取り、追いかける事が出来るのだ。

狼達の嗅覚に従いながら、森を駆け抜ける。辿り着いたのはアベリオン丘陵だ。どうやら、従属を解除されたあの深紅色のワームは、アベリオン丘陵まで駆け抜けたらしい。「……まずいな」

オーガスタスはそう呟くと、再び狼達を走らせる。アベリオン丘陵にはあのワームの餌が大量にある。別にアベリオン丘陵で虐殺が起きようと構わないが、取りこぼしがあるのは非常にまずい。強者と戦いながらも何らかの理由で生き残った者は、飛躍的に強くなる傾向があるからだ。あのワームが取りこぼしをすると、厄介な事になるかも知れない。早急に発見しなければ。

オーガスタスは狼達に追跡させながら、アベリオン丘陵を駆けた。時折現れる亜人種

達は、残らず殺す。人類の守り手とも言える自分達は、彼らを殺さなくてはならない理由があるのだ。

……何故なら、この世界で人類は弱者だ。亜人種達は人を喰う為に、法国としては狩らざるをえない。それは決定事項だ。こうして自分達が守護していなければ、他の人類は容易く亜人種達に殺されるだろう。尊厳を奪われるだろう。強さだけが全てだと思っている、あの野蛮人共に。

故に、殺す。でなくては、自分達は生き残れない。だから殺す。本当はアベリオン丘陵の亜人種達を皆殺しにしたいのだが、疲労的な意味でもそれは難しい。まず体力が続かない。そして、このアベリオン丘陵の亜人種達は油断していい相手ではない。何故なら、彼らは互いに殺し合って強くなるのだ。他者を殺せば殺すほど成長し強くなるこの世界では、互いに殺し合って強くなる彼らは恐ろしい相手だ。人類のように、手を取り合うという発想が無い。

もつとも、そういう発想が無いからこそまだ人類は生き延びる事が出来ているのだ。彼らが野蛮である事に、救われているのも事実だ。ずっとそうして、尾を噛む蛇のように一生ぐるぐると独楽のように回っていて欲しい。

オーガスタスは数日をかけてアベリオン丘陵を駆けずり回り、自分が逃がしてしまつたワームを探した。しかし――

(……まさか、討伐しているとは)

陥没穴の付近でワームの足取りを掴んだオーガスタスは、しかし既に彼が追いついた時現地の者達に討伐された後であつた。討伐したであろう藍蛆達は装甲を剥ぎ取り、闇小人達の集落を目指して既に旅立っていたのだ。

オーガスタスは考える。藍蛆達は王族を、オスを失っていたはずだ。強力な個体が生まれてきたとは考えにくい。確かに稀にメスがオスに性転換する事はあるが、可能性は低い。少なくとも、オスがいなくなつて急に性転換する可能性はゼロに等しい。それほどうすぐに性転換出来るような生態ならば、自分達だつてもう少し間引きをする。

なら現存する戦力でどうかしたと考えるべきだが、有り得ない。戦つた感触から、藍蛆達にそこまでの実力が無いのは確実だ。それほどの実力を持つているのなら、その藍蛆には二つ名が無ければならないだろう。

結論として、おそらくは外部。藍蛆では無い何者かが、これを始末したものと考える。

(……少し、探ってみるか)

オーガスタスは即座に帰還せず、まずは情報収集をする事にした。あのワームを討伐出来るほどの強者がいる、というだけでも十分な情報になるが、しかしやはり情報収集は出来るだけしておきたい。幸い、アペリオン丘陵の亜人種達を最近幾らか間引きしておいたので、どの種族も現在大人しい。モンスターテイマーでもあるオーガスタスなら

ば、個人行動が可能な環境だ。この隙に、出来るだけ情報を集めよう。

オーガスタスはモンスター達を呼び出し、彼らに同族達へ情報収集するように命令する。そして、自分は一応聖王国へ向かう。あちらにも何か異変は無いか探らなくてはならない。なるべく城壁の近くへ寄った後に、みすばらしいローブへ装備を変更して這う這うの体を装いながら城壁へと近づいた。これで、亜人種達に襲われ一人生き残った間抜けなワーカーにしか見えないだろう。

オーガスタスが城壁へ近寄って行くと、すぐに「止まれ！」と城壁から兵士に叫ばれた。そこでオーガスタスは奇妙な様子を感じ取る。彼らは、どうしてか酷い緊張状態だ。まるで、何か恐ろしいものに襲われた後の小動物のように。

(……もしや、最初はワームはこちらに現れたのか?)

追跡したかぎりではそのような様子は見られなかったが、しかしこの緊張状態。ピリピリとした様子はどう考えてもおかしい。いつもの聖王国の兵士達の様子では無い。彼らはあれで、慣れている。常にあるのは程よい緊張と程よい弛緩だ。新兵のような、異様な緊張状態なんて有り得ない。

だが、今の彼らの様子はまさしくそうであった。

オーガスタスが人間である事を証明し、位相もまた善なるものである事を証明し終えた後彼らはようやく、オーガスタスを城壁の内側へと案内した。オーガスタスは自分を

城壁内に案内する目の前の、おそらくは歴戦の弓兵に声をかける。……おそらくは、オーガスタスの正体に気がついている男に。

「バラハ兵士長殿、と言いましたか。一体何事ですか？」

「ああ……」

目の前を歩く男……「黒」のヨーン・バラハは周囲を少し見回すと、誰もいない事を確認してオーガスタスに口を開いた。

「貴方々には隠し事をしてても無駄でしょうから、告げておきます。つい先日、とんでもない亜人が城壁までやって来ていたんで、それで全員緊張しているんですよ。何分、我々には未だ対抗手段が思いつきませんから」

「亜人……？」

どうやら、自分と関係のありそうな内容だと判断する。聖王国が対抗手段を思いつかないほどの強者だと言うのなら、あのワームを討伐した件の犯人かもしれない。可能性は高いだろう。

「どのような亜人でしたか？」

「それは……」

ヨーンは言い辛そうにしながらも、しかしオーガスタスの正体に気がついている以上隠しても無駄だと思ったのだろう。ヨーンは更に声を潜めながらも、この城壁で起こつ

た事件の詳細を語った。オーガスタスにとっても、聞き逃せないそれを。

——曰く。それはあらゆる飛び道具を、第三位階魔法さえも無効化し。あの九色の赤の背後からの攻撃を一瞥もせずに防いだという。

「——」

話を聞いたオーガスタスは、絶句する。確かに、それは強力な亜人だ。とてもではないが、聖王国の人間では対応するのは難しいだろう。九色を全員呼んで完璧な連携を取るくらいはしなくては。

「そういうわけなので、我々としても困っているわけです。まあ、あの亜人は何もせずに帰ってくれたので死傷者自体はゼロなのですが」

不幸中の幸いです、とそう最後に締め括ってヨーンは再び歩みを進めた。その背中に、オーガスタスは声をかける。

「……貴重な情報をありがとうございます。その亜人は、こちらで対処しておきましょう」

「……助かります」

オーガスタスは再び踵を返す。再び、亜人の領域であるアベリオン丘陵へ帰る為だ。ヨーンはそんなオーガスタスを止めない。他国の者同士、此処では互いに出遭わなかった事にした方が無難だと気づいている。

オーガスタスは単なる名も知れぬワーカーであり、ヨーンは城壁内にそれを入れて国内へ案内して放置した。それでいいのだ。

闇に紛れて再びアベリオン丘陵へ出たオーガスタスは、見ぬ振りをしてくれた狙撃兵達に一礼するとすぐさまアベリオン丘陵へと駆けた。再び、自らを守るための護衛を呼び出す。しばらく進んで城壁からは決して見えぬ位置まで移動すると、合図を送る。情報収集へ当たらせていたモンスター達はオーガスタスの合図に気がつくとすぐにオーガスタスの元へ駆けてきた。

「よしよし」

オーガスタスは彼らの頭を撫でると、すぐに〈精神感応^{テレパシー}〉で情報を受け取る。様々な情報から、興味深い話が聞けた。

凄まじい魔法の武具で武装した、奇妙な蟲系亜人がいるという話だ。その亜人は、現在北部の陥没穴付近で生活しているらしい。

「……………ふむ」

常に黒いローブで全身を覆って顔は顎の辺りくらいしか見えないので、どんな種族なのか正確には不明。ただ、手足をガントレットとグリーヴで覆い、常に槍を持ち歩いているとの事で戦闘スタイルはすぐさま判明する。前衛戦士。ただ、槍がどういったものか正確には分からないので、素早さ重視なのか重装歩兵なのかその辺りは実際に遭遇す

るまで分らないだろう。

(第三位階魔法や飛び道具を無効化するなら、接近戦で仕留めるしかないな)

あのワームを討伐したのは、間違いなくこの亜人であろう。見逃す事は出来ない。オーガスタスは伝令役の梟の姿をしたモンスターを呼び出すと、その足に一筆したためた羊皮紙を括りつける。勿論、なるべくエイヴアーシャー大森林を迂回するよう命令するのも忘れない。伝言が伝わるのが遅くなってしまうが、しかしエイヴアーシャー大森林は多少伝令が遅くなっても迂回するべき場所だ。

羊皮紙には正体不明の亜人の事と、それを討伐してくる事を書いてある。あのワームを討伐出来る時点で、漆黒聖典の中でも一対一で倒せるのは神人くらいだろう。時折、アベリオン丘陵などの混沌の坩堝には、こうした通常の竜ドラゴンロード王級の怪物が出現する事がある。それを防ぐ為に漆黒聖典は時折間引きを行うのだが、出て来てしまったのはしょうがない。神人である自分が対処しなくては。

オーガスタスはそう覚悟を決め、丘陵地帯を駆け抜ける。件の亜人を始末する為に。彼は。——危険な亜人を一人で討伐出来ると思う程度には大胆で、勇気があつて、無謀で。そして人類の為に一刻も早く始末しなくてはと思う程には、狂信的だった。

ウィーウエは男との距離を詰めようとするが、男はウィーウエに距離を詰めさせる気が無いのだろう。幾体ものモンスターを呼び出し、距離を詰めるのを邪魔する。

（うーん……）

ウィーウエはティムモンスターを始末しながら、男を観察する。

レベル的には、間違いなくウィーウエ以下だ。反応速度的に見ても、ウィーウエの相手にもならない。というより、一〇〇レベルプレイヤーである自分からしてみれば、レベルが低い。ティムモンスターも弱い。

（でもなー）

そう、弱いウィーウエは二の足を踏む。何せ、痛いのは嫌だ。ウィーウエからしてみれば脆弱だが、しかし今まで見た丘陵地帯の亜人達より遥かに強いだろう。ウィーウエの行動に対する反応速度が違い過ぎる。

それが、ウィーウエには面倒だ。もう少し格下ならば簡単に始末出来るが、相手を生かしたまま——自分が無傷で制圧しようと思うと面倒な強さの相手だ。

（最初っから敵意ありありで来てるんだもん、この人。俺何かしたわけ？）

人間の国に近づいたのは確かだが、誰も殺していないはずだ。人間の精神性がかつての自分達と同じものであると仮定すれば、人を殺した過去があると面倒な事になるだろ

う。亜人種達のように、弱肉強食なんて自然の摂理は複雑怪奇な精神構造を持っている人間には通用しない。よって、ウィーウエは人間に対してはかなり注意を払って接していた。

だからこそ、いきなり敵意全開の目の前の男が理解出来ないのだが。

（相手を生かしたまま、口が利けるように制圧。それも自分が無傷のまま。両方やるのは辛いなーホント）

面倒臭さに汗をかきなくなるし、愚痴を言いたくなるが文句は言ってられない。この目の前の男を生かして捕まえるのは重要なのだ。ウィーウエは地中から飛び出してきた鎧でも装着しているかのような装甲持ちの、一メートルはあろうかというモグラの頭を瞬時に踏み潰して砕き、背後から飛びかかって来た狼を見もせずに気配だけ察して槍で一刺し。そのまま槍を梃子のように振り回して左右から迫って来た残りの狼達を、絶命した狼の身体で槌のように打った。ウィーウエの剛力で身体を打たれた狼達は、ぎゃん、という悲鳴を上げながら骨が砕かれ絶命する。穂先に刺さったままの狼の身体を、ウィーウエは槍を強く振るう事で真つ二つにして穂先から外した。見回せば、ウィーウエが殺したティムモンスターの死体がそこかしこに転がっている。

（モンスターをティムする数にも限界がある。幾らレベルが低いモンスターばかりとはいえ、軍隊レベルで従僕は出来ないはず……。そろそろ打ち止めかな、これは）

そして、ウィーウエは闇雲にモンスター達を狩っていたわけでは無い。モンスターテイマーはテイムしたモンスターによって強さが変わるが、どれだけ強力なモンスターだろうとテイム出来る数には限りがある。低レベルのモンスターばかりなら数多くテイム出来るだろうが、それでもやはり数に限りはあるのだ。少なくともヘUGドラシルのシステムではそうだ。昔どこかのプレイヤーが、あまりに悪魔を召喚し過ぎてサーバードウンを起こしかけた事があるので間違いない。

ティムモンスターさえ片付ければ、後はどうという事は無い。一〇〇レベルプレイヤーならばともかくとして、八〇レベル以下のモンスターテイマーでは、ウィーウエに傷をつけるのはほぼ不可能だ。簡単に捕縛出来る。その為に、わざわざ距離を一定以上離さないようにこの間合いで相手を見ながら戦っているのだ。

このままならば、順当に相手を無力化出来る。ウィーウエはその予定だった。男はウィーウエとの力の差を理解したのか、懐に手を入れ、そこからあるマジックアイテムを取り出す。ウィーウエの人外の視力はそのマジックアイテムを鮮明に捉えた。

美しい立方体。華美に尽くされた装飾。刻まれた幾つものローマ数字。見覚えがある。奇妙な賽子。

「——ッ！」

そう、このままならば順当に相手を無力化出来たのだ。ウィーウエはその予定だっ

た。

男が、ウィーウエもよく知る神器級アイテムを取り出すまで。

そのアイテムの名を、『宿命』と『偶然』の賽子』。低レベルプレイヤーが高レベル対象に攻撃を通す為に使う、あるコンボ——連続技に使用するマジックアイテムだった。

『宿命』と『偶然』の賽子』。

まだこの世が始まらない、何もかもが半分の世界で二柱の神が賭けをした。

「どちらが世界を支配するか決めよう」

賭けをしたのは『宿命』の神と『偶然』の神。それはこの世が全て決められた運命の内にあるのか、あるいは何の関係も無い運命の内にあるのかを決める一大勝負。二柱の神は互いに賽を振って勝負を行う。

どちらが勝ったのかは、誰も知らない。そんなとある創作神話の一つ。

それが、このマジックアイテムの元ネタであった。効果はただ一つ。それが可能性皆無で無いかぎり、必ず半々確率に持ち込むというもの。限りなく世界級アイテムの効果に近い、一步手前の神器級アイテムレベルのアーティーファクト。

かつて、ウィーウエが持っていた、けれどこの不可思議に見舞われる前にヘグドラシルで露店に売りに出したマジックアイテムだ。アレの凶悪さは、よく知っている。

攻略情報にさえ掲載されている有名なコンボだ。何せ、本来十レベルも差があれば勝る確率が限りなくゼロに近づくPVP勝負において、それを覆す事が可能な数少ないマジックアイテムの一つなのだから。

勿論、レベル差を覆せるマジックアイテムは幾つもある。例えば使用者のデータを完全抹消する代わりに、対象相手のデータも完全抹消させる聖者殺しの槍を初めとした世界級アイテムなどだ。

——そう。PVPなど勝負において一〇〇パーセントの確率など存在しない。高所で足を踏み外して底なし沼に転落して死亡するなど、いわゆる事故死と呼ばれる方法もあるのだ。

だからこそ、この『宿命』と『偶然』の賽子は恐ろしい。本来は一パーセント有るか無いかの確率を、有るならば強制的に半々の確率に変動させる運命の賽。

故に——ウィーウエは瞬時に、あらゆる欲目を振り切って決断した。死ぬのは嫌だ。生きてさえいれば何とかなるのが信条だから、死の危険性は限りなく排除したいのが彼の本音。

ウィーウエは有り得ないほどの思考速度でもって、今までの葛藤は何だったのかと言うほどに呆気なく、決断を行う。

「特殊技術の一つ、〈空間圧縮〉を使用。空間を圧縮して対象との間合いをショートレンジへ変更するこの特殊技術は、当然ながら幾つかの前提条件が存在するが全て無視。前提条件を無視した代償として、ヒットポイント——体力の減少による痛みが全身に響き渡るがそれらも根性で捻じ伏せる。」

瞬時に詰めた間合いに、相手が驚愕するが全て無視。通常ならこのまま相手を斬り伏せるが、『〈宿命〉と〈偶然〉の賽子』を持つ危険因子に対しては、真つ当な手段は取れない。男をそのまま引つ掴み——ウィーウエはあのアーティーファクトを発動させない対処法の一つ、可能性を排除する為の行動を開始する。

即ち——男を引つ掴んだウィーウエは、陥没穴の一つに向かって跳躍したのだ。

「——!!」

何を狙っているのか瞬時に悟った男が絶叫し、ウィーウエの拘束を外そうとする。だが、外れない。当然だ。ウィーウエはしっかりと掴んで、既に中空へと身を踊り出している。風が身を切った。フードが外れて、顔が顕わになる。人間では無い、黒と赤褐色の硬質な肌と、ぎよろりと動く複眼。おぞましい蟲の顔。

その顔は、リアルな人間ならばきつと「オオエンマハンミョウに似ている」と思ったに違いない。

ウィーウエは狙っていた陥没穴に寸分違いなく墜落すると確信する。そう、これがあのマジックアイテムを無効化する方法の一つ。墜落という名の確実性。高所からの落下ダメージ。

一〇〇レベルの前衛戦士であるウィーウエならば耐えられる、超高所からの墜落は、人間種でありモンスターティマーである男には耐えられない。

ウィーウエは死にたくないから、死ぬほど痛い方法で我慢したのだ。

……それは、異様な行動力だっただろう。

誰が、覚悟したからと言って、死ぬよりはマシだからと言って、死ぬほど痛いと思う方法で妥協する事が出来るだろうか。

死なないなら、自分の手首も平然と切れるのか。有り得ない。人間の精神は、誰だつて自分の痛みに敏感だ。死なないから、後で繋げられるからと言って電車に轢かれる前に手に持っていた鉋で、レールの間に挟まった自分の片足を自分で切断出来るか。いいや、否。

出来ない。出来るわけが無い。精神を病んだ人間であろうと、自分の手首を切る事はあつても手首を切り落とすような人間はいない。

けれど、彼はそれが出来る。死なないなら、後で回復するのならいいだろうと決断した瞬間呆気なく、今までの葛藤を放棄した。

ぐしやり、と潰れる音がした。地面に叩きつけられる。ウィーウエは、全身の激痛に泣き叫びながら這って男から身体を離す。離れた場所に胡坐をかくと、インベントリからアイテムを取り出した。ポーションだ。放っておけばファゴサイトーシスのクラスで回復するが、かと言って敵対者がいる中でアイテムの使用をケチるほど貧乏性ではない。

「ぐ、あ……」

ウィーウエはポーションの瓶を自らの頭上で砕く。硝子の破片が粉々となって頭に降りかかるが、それを気にしている暇は無い。ウィーウエの頭上に真つ赤な液体が降り注ぎ、体力を完全回復させる。

それを横目で見ていた死にかけの男が、ポツリと呟いた。神の血、と。

「……うん？」

その擦れるような囁き声を聞き届けたウィーウエは、男へ振り向く。男は濁った瞳をウィーウエに向けて、そして肺と食道に血の詰まった濁った声で呟いていた。

「あな……た、神のちを……では、ぶ、れ……や……では」

プレイヤー。男は、確かにそう呟いた。ウィーウエは両目を見開き、男へ近づく。距離に近づけば最後っ屁を警戒しなくてはならないが、それ以上に気になる事があったのだ。

「俺の事を知っているの？ プレイヤーを？」

「赤……ぼ……しょ……を持つ、なら。ふれ、や……のる、なら」

男の囁くような声を、ウィーウエは懸命に聞き届ける。男はウィーウエに、目の前の、神に連なる者にこの世界の事を語った。

かつて、六大神というプレイヤーを名乗る者が現れた事。同じく、プレイヤーを名乗る八欲王なる者が現れた事を。

男はウィーウエにそれを懸命に伝え、最後に呟く。

「おねが……人類、すく……」

それで、パタリと息絶えた。ウィーウエは男に回復薬を渡さなかった。故に、男はウィーウエにかつてプレイヤーがこの世界にいた事だけを伝え、息絶えた。

「……………」

ウィーウエは、男の言葉を頭の中で反芻する。かつて、この世界にはプレイヤーがいた事を。それはつまり——ウィーウエが酷く否定したかった真実で。

「——は、はは」

だから、ウィーウエは思わず笑った。口から笑みがこぼれ出る。信じたくなかった事実を目の当たりにして。

かつてこの世界にはプレイヤーがいた。最初に六大神。次に八欲王。時間軸のズレ。

少ない伝説。

つまり——プレイヤーがこの異世界に來た事は間違いないが、どの時代に現れるのかは未知。伝説の少なさが、此処へ來れたプレイヤーの数が決して多くない事を肯定している。

自分はそんな、数少ない例外の一人なのだとウィーウエは今確信した。

「——つまり、帰る方法は無い？」

呆然と呟く。何故なら、伝説に異世界の勇者だとかそういう単語は無いからだ。この世に顕現したらそれつきり。眠りに就いただとか、退治されただとかそういう伝説は小人から聞いたけれど、元の場合へと去ったという記述だけは無いのだ。ジーバーベにも訊ねたが彼女も知らなかった。

ああ、つまりそれは。帰る方法は無くて。この異世界に骨を埋めなくてはならないという事ではないのか。

「——」

なんて事だ。いつかは元の世界に帰れるだろうと信じていたのに、そんな事は有り得ないと今証明されてしまった。この異形種となった身体と、これからずっと付き合っていくしか無いのだと。

この、際限なく続く食欲の化身と。

「——う」

ウィーウエは、口元を抑える。血の臭いが充満している。血の滴る生肉が目の前に転がっている事に、ウィーウエは気がついてしまった。

それはつい先程まで、言葉を喋り動いていたもの。知性ある、かつて人間だったウィーウエと同じもの。それを前にしてウィーウエは。

「——」

無理だ。決めたはずだ。知的生命体を口に含んだら、自分は終わりだと。それくらいなら死んでしまおうと思ったはずだ。ウィーウエはそう決めたはずで、だがしかし。元の世界には、もう帰れない。

「——うん」

だから、ウィーウエはその葛藤を。

「……神様、どうかお願いします。より多くの殺生と食事を、俺にお許し下さい」

本当に、呆気なく手放した。死ぬまでこれと折り合いをつけていくしか無いのだと悟った瞬間。ウィーウエは人間としての葛藤を放棄したのだ。人間性を手放した。

何故なら、彼は異常なほどに前向きで、決断力があつて。そして。

他人とは共感出来ない自己価値観を持っていて。

いつだって退屈していて何もしないのは落ち着かなくて。

そして、良心の呵責は有るようであり、その実簡単に罪悪感を手放せるから。だからウィーウエ・ホディエーは簡単に、自らの人間性を手放した。

今を前向きに。生きていけば何とかなるさ。自分は異形種として、このまま生きていなくてはいけないのだと理解したから、迷いは無い。生きていけば幸せになる機会は幾らでもあるのだから、こんな自分を受け入れて今を生きていこうと、前向きに人間では無くなった自分を受け入れた。

この精神の異常性は、生来のもの。環境の変化だとかは関係無い。ウィーウエは元から、こんな精神性の者だったのだ。こんな、頭のおかしな奴だった。

だが、それを指摘する者は誰もいない。彼は一人で此処に立っている。他にギルドメンバーでもいれば、彼は此処まで簡単に人間性を手放さなかっただろう。どれだけお腹が空いていようと、こんな結論にはならなかったはずなのだ。他人とは価値観を共有出来ない、罪悪感も簡単に手放せるどうしようも無い人間だけれど、それでも確かに社会に適応不全はぎりぎり起こさずに、暮らしていたのだから。

たった一つの、小さな切っ掛けが。彼を呆気なく人間の地位から転落させた。

けれど、それを彼自身が気づく事は無いだろうし、この異世界に来てしまった他のプレイヤーが気づく事も無いだろう。こんな場所へ辿り着いてしまった者は、そうした小さな切っ掛けで転落してしまった者ばかりだから。これからこの異世界に来てしまう

者もまた、そうして彼のように小さな切っ掛けで人間性を捨ててしまうのだ。

だから、誰もかつてプレイヤー達がどういう人間だったのか、思い出せる者はいないのだろう。これは『転移』ではなく、『転生』なのだと気づく者は誰もいない。

「それじゃあ、いただきます——」

ウィーウエはかつての自分に別れを告げた事にも気づかず、自分はこういう生き物なのだと前向きに受け入れて、目の前の食事を見つめる。

貪食の魔神は、日々の糧に感謝しながら、目の前の食べ物に齧り付いた。

E p i l o g u e

聖王国の要塞線で、オルランド・カンパーノは目を光らせるようにしてアベリオン丘陵を見つめている。目をぎらつかせるオルランドの横に、同じように男が腰かけた。

オルランドは太い眉と無精髭の野性味溢れる顔立ちをしている、巨漢の戦士だ。対して、オルランドの横に腰かけた男はその逆で筋肉を絞ったような細い体つきをしている。ただ、目つきの悪さだけはオルランドでさえたじたじになるほどであったが。

「旦那」

オルランドの隣に腰かけた男は、パベル・バラハという超名手の弓兵であり、兵士長だ。同じ九色を戴く者の一人でもある。パベルはオルランドの横に腰かけ、同じようにアベリオン丘陵を見つめていた。

「気になるか」

口を開いたパベルの言葉に、オルランドは苦笑した。全く、この男には敵わない。

「そりゃ、まあね。俺は強え奴と戦って、自分が強くなっていくのが好きなんですよ」
それがオルランドの行動原理だ。他人に命令されるのは大嫌いだし、命令されるのな

ら自分より強い者でないと認めない。その点で言えばパベルは完全にオルランドより格上だ。調子に乗っていたオルランドを、弓兵のパベルが近接戦で完勝したのは記憶に新しい。

だが、そんなオルランドに勝利したパベルよりも恐ろしい存在が、このアベリオン丘陵には昔から棲んでいる。

「貪食の魔神——。一体、どんな奴なんです？　旦那は勿論、他の九色でも討伐は難しいって噂ですが」

アベリオン丘陵には、貪食の魔神が棲み付いている。彼の魔神は、亜人でも人間でも平気で一日に五、六人を食べ尽くしてしまうのだとか。オルランドは実際に見た事が無いし、母が悪い子の躰に間かせた御伽噺としてしか知らない。良い子にしないと、貪食の魔神に丸呑みにされる——そんな、何処にでもある行儀の悪い子供への躰だ。

だが、実際に貪食の魔神が実在すると知ったのは、こうして兵士になってからだ。だがパベルは、昔からこの魔神を知っていたのだという噂だ。

「他の九色でも討伐は難しい、か。……私が知る限りでは、難しいどころか不可能だと思うがな」

パベルはオルランドの言葉に、そう呟いた。その言葉に驚く。自分の腕前に自信を持つているだろうし、他の九色の戦士達だって信頼も信用もしているだろうに。パベル

は貪食の魔神の討伐は不可能だと言い切ったのだ。

「そうですかい？ ああ、*“白”*の聖騎士団長殿なら勝てるんじゃないんですか？」

誰もがそう信じて疑っていない。だが、パベルは首を横に振った。

「いや、無理だろうな。そもそも、あの魔神は悪の位相では無いから、聖騎士の能力はあまり役に立たない」

「……」

それも初耳だ。何でも喰らう貪食の魔神。それが悪の位相では無いなど信じられない。だが、顔に出ていたのかパベルがおそらく苦笑したのだろう表情で告げる。

「意外か？ そうでもないぞ。亜人達が人間を食べるのは単なる食事の問題だからな。人間を食べるから、悪になるのではない。奴らは我々が動物を食べるように、人間も食糧の一つに入っているだけだ。腹持ちが満たされているのなら、好みじゃないかぎりわざわざ襲って来て食べはしない。実際、あの貪食の魔神も私なんかは好みじゃ無いようだ」

その言葉に、聞き逃せない単語を見つける。

「好みじゃ無いって……旦那、遭った事あるんですかい？」

「ああ、遭った。数年前の事だが、奴は時折ふらりと遊びに此処へ来る。そこで初めて、実物を見た。奴は私達を気にもせず、平然とした顔で魔法も私達の攻撃も物ともせず

に、その時徴兵されていた平民を二、三人引き摺って帰って行つたよ。必死に立ちはだかつた私に、その時言つた言葉がこうだ——『お前らのような筋肉質の奴らは好みじゃ無い』

そうして、彼の魔神は平民達を引き摺ってアベリオン丘陵へとまた消えていったのだとか。

「相手にもならなかつたな。私達程度は、彼の魔神にとっては敵にもならんらしい。今ではこの城塞では奴に対する対処はこうだ。——『平民が二、三人犠牲になる程度で帰って行くのだから、奴には逆らうな』」

「そりゃ——なんと言いますか。単なる先延ばしじゃないですかい？」

「だらうな。だが、我々では勝てん実力の持ち主なのだ。放っておけば帰ってくれるのだから、あまり刺激しない方がいい。それがこの城壁に勤める者達の見解だ」

「へえ……じゃあ、いつか。俺がその魔神に勝つてみせますよ」

オルランドがそう言うと、パベルは笑つた。

「期待しないで待つててやろう——」

「——」

そんな、二年かそれくらい前にパベルとした会話を思い出した。オルランドは地面に

仰向けに倒れ、夕暮れの空を呆然と眺めている自分に気がついた。どうやら、少し意識が飛んでいたらしい。

全身が、酷く痛かった。しかし打ちのめされたのは身体ではなく、心だった。何をしても通用せず、最後は軽い足払い。そのまま地面に頭を打ち付けて、少し気絶していたらしい。

さくり。近寄ってくる。顔を覗き込まれた。だが、逆光で顔は見えない。真つ黒なフードを被っているから、オランダには相手の顔が見えなかった。だが、それが何者なのかは知っている。アベリオン丘陵最強の怪物。神出鬼没の聖王国の敵。即ち。

「――俺の勝ち」

貪食の魔神。神業の槍遣い。それが、仰向けのオランダの顔を覗き込んでいる者の正体だった。

魔神はオランダの顔を覗き込みながら、ニヤリと得意気に笑ったようだった。その告げた言葉にも微かな揶揄が見て取れる。

（この野郎……！）

それに少しばかり腹が立つが、しかし完敗であるが故に何も言う気にならない。勝負にもならなかった自覚はあるのだ。此処で自分が何を言おうと、それは単なる負け犬の遠吠えに過ぎない。敗者にだって、敗者なりの誇りというものはある。

だから、オルランドも笑って告げた。寧猛な笑みだった。

「ああ、テメーの勝ちだ」

自分は完全敗北で、相手は完全勝利。かつて豪王バザーと戦った事もあるが、バザーでも赤子のように捻ってしまえる相手だろう、この魔神は。

（ああ……旦那が、誰も勝てないって言うだけはあるさ……）

そう。パベルの言う通りこの魔神には勝てない。誰も勝てない。戦ってみて、初めて力量差が良く分かる。あまりに力量差が開き過ぎて、自分にはどうしようも無いという事が。良く。

「勝者はアンタで、俺は敗者だ。さあ、トドメを刺すがいいぜ」

オルランドがそう、勝者の権利を告げると魔神は困惑したようだった。

「トドメって言われてもなー。俺、君みたいな筋肉質な肉は好みじゃないし。何もしなけりや何もする気は無いし」

「……そりや、随分な言い様じゃねえかよ。俺程度は、殺す価値も無いってか」

「うん。君は、今すぐ殺さないといけないほどの危険性を見出せない。好きに生きて好きに死ねば？」

突き放した物言いだった。オルランドの事など、歯牙にもかけてない事が見て取れる、完璧な勝利宣言だった。それが非常に悔しい。怒鳴り散らしてやりたいほどに、腹

が立つ。勿論、怒鳴りつけてやりたいのは、この魔神に勝負の土俵にさえ上がって貰えなかった不甲斐ない自分自身だが。

「じゃあ——」

「うん」

息を吸い込む。そして、自分の心のままに、魔神へと懇願した。

「これから、頑張つて強くなるから、俺にこれ以上強くなられたら困ると思つた頃に、俺を殺してくれ」

「いいよー」

気軽な声だった。まるで、明日遊ぶ時間を決める、子供のようにそこに気負いは何も無い。

「俺は、英雄になる。テメーなんかより、きっと強くなつてみせる。誰よりも」

それが無謀な挑戦だという事は、言われるまでもなく分かつていた。それでも、今までの生き方を曲げられない。この、勝敗を競う事さえ出来なかった事実が悔しい。だから。

「来年、また此処に来てくれ。毎年、俺と戦う為に、此処に来てくれ」

それは、たぶん魔神の生涯においては、何の意味も無い暇潰しにしかならないだろう。それでも、オルランドは魔神に頼み込んだ。意味も無く、時間を消費してくれと、オル

ランドのようなちっぽけな命の為に。

「いつか、テメーに勝つ為に。強くなるから。お前は毎年、俺と戦う為だけに、此処へ来てくれ」

「いいよー」

もう一度、気軽な返答。答えは是だった。魔神は、意味も無い時間の消費を許可した。それが、とてつもなく悔しかった。そんな風に時間を消費しても構わないと思うほどに、魔神はオルランドに対して何の意味も見出していなかった。それが酷く、胸を打つ。悔しさに涙が出そうだ。

「じゃあ、その勝負の間だけは——人間を食べるのを止めてやるよ。別に、人間の肉が好きなわけじゃないし」

「……そうなのか?」

「うん。単に、そういう気分なだけさ。君らだって、毎日牛の肉ばっか食べてるわけじゃないだろ? 豚とか、鶏とか、魚とか。そうやって食べる肉は変わるじゃないか? 俺だって、そういう気分の日もあるよ」

パベルの言う通り、彼らは、別に人間を食べたいから食べるわけじゃない。単純に、好みの問題なのだと。

「だから、君と勝負している間だけは、この城壁内にいる人間を食べるのは止めてやる

よ。面倒だろ？ 色々と」

もつとも、丘陵地帯に出歩いている人間はその限りではないが。そう告げて。魔神はカラカラと笑った。

「――」

驚いた。この魔神が、わざわざ自分達の事情を考慮してくれる事に。確かに、オルランドが勝負をしているのに、その度に人間を喰われては堪ったものではない。その諸々の事情を、面倒だと考慮してくれる知性。これは、間違いなく単なる人喰いなどでは無かった。

「ただし――君が以前より弱くなっていると、そう俺が結論付けた時点でこの勝負は無しだ」

「――ああ。そりや、仕方ねえ」

単なる時間稼ぎに、ずっとそう勝負を挑まれては堪らない。魔神の言い分は真つ当だ。これはオルランドと魔神の勝負で、他の者は関係無い。そこに政治的な意味を持たせられるのは、オルランドだって御免だった。

だから、魔神の言葉にオルランドは頷いた。

「分かった。俺が前より弱くなった時点で、この勝負はおしまいだ」

「うん。それから、俺が怖くなるくらい君が強くなった時も、この勝負は終わりだよ」

死にたくない。生きたい。だから、オルランドが魔神よりも強くなろうとした時も終わりだと。

それも、仕方ないとオルランドは思う。当たり前だ。誰だって死にたくない。生きたい。オルランドが誰よりも強くなりたいと思っても、時間は待ってくれないのだ。魔神にはそこまでの酔狂さは無い。魔神は、別に強さに興味があるわけでは無いから。

「それじゃあ、また来年——」

「ああ、また来年——」

魔神は槍を担いで、アベリオン丘陵へと帰っていく。夕暮れの中。オルランドに背を向けて、魔神は沈む太陽のように去って行った。

オルランドは身を起こし、その背をいつまでも見続けた。魔神の背が見えなくなっても、ずっと。慌てたパベルや部下達が迎えに来るまで。ずっと——